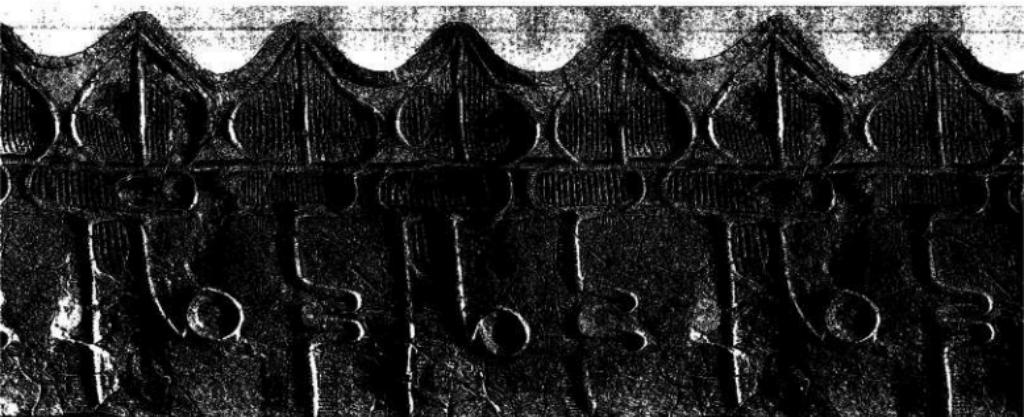


山梨県北巨摩郡双葉町

唐 松 遺 跡

KARAMATSU SITE

—双葉唐松団地建設に伴う発掘調査報告書—



1996.3

山梨県教育委員会
山梨県住宅供給公社

序 文

本書は「双葉唐松団地」建設工事に先だって1992・1993年度に行われた山梨県北巨摩郡双葉町宇津谷に所在する唐松遺跡の発掘調査報告書であります。

本遺跡が位置する茅ヶ岳南麓上の双葉町地内においては、これまでに主だった発掘調査の事例はほとんどなく、従って本遺跡の属する縄文時代の集落の様相についても明らかではありませんでした。この発掘調査において、茅ヶ岳東南麓上における遺跡の有様の一端や甲府盆地と八ヶ岳南麓との中間地点に位置する遺跡の性格などが、明らかになったことは貴重な成果であります。

今回は集落の南側半分、約7,000m²を調査したに過ぎませんが、縄文時代中期に位置付けられる住居跡11軒、土坑100基の他、平安時代の炭焼窯、近代以降の溝等が発見されました。遺物では、東北地方からの搬入品と考えられる大木8b式期の土器を初め、土偶や石錘、土錘などの石製品、土製品といった他地域との交流、精神生活及び実生活を考える上で興味深い資料を得られました。

以上のとおり唐松遺跡は縄文時代中期の集落を主体とした遺跡と考えられます。北巨摩郡最南端の縄文時代の集落の様相を究明する一資料として、多くの方々に御利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々の御協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査と整理に従事していただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

1996年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚 初重

目 次

序 文	
目 次	
例 言	
第1章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 発掘調査の概要	1
第1項 発掘調査の経過	1
第2項 遺構・遺物の概要	1
第3項 調査組織および協力機関	2
第2章 環 境	
第1節 環境と周辺の遺跡	3
第2節 調 査 方 法	5
第3章 遺 構 と 遺 物	7
第1節 住居跡・豎穴状遺構	7
第2節 土 坑	26
第3節 炭 燒 窯	50
第4節 石 器	51
第5節 土 偶	76
第6節 土 製 品	81
第7節 包含層出土遺物	82
第4章 遺構と遺物の検討	84
第1節 集 落 の 变 迤	84
第2節 土坑について	87
第1項 土坑の概要	87
第2項 集石土坑について	88
第3節 唐松遺跡の土偶について	89
第4節 繩文時代中期初頭から前葉の土器様相について	92
第5節 住居跡出土の石器組成について	96
附編 唐松遺跡の放射性炭素年代測定結果	98
写 真 図 版	99

例　　言

1. 本書は、山梨県住宅供給公社による宅地開発に先立ち、山梨県埋蔵文化財センターが実施した北巨摩郡双葉町宇津谷に所在する唐松遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は1992年（平成4年）11月4日から12月24日と1993年（平成5年）5月6日から1994年（平成6年）1月9日までの2年度にわたり埋蔵文化財センターが行なった。
3. 本調査は山梨県教育委員会と山梨県住宅供給公社との委託契約によって実施したものである。
4. 本書の編集は石神孝子が、執筆は第3章第1節第1・3・4号住居跡、第4章第3節を五味信吾、第3章第4節、第4章第5節を松村佳幸、第4章第4節を野代幸和、それ以外の全ての章、節、項を石神が行った。
5. 遺構の写真は山本茂樹・五味信吾・石神孝子が、遺物写真は石神が撮影を行った。また表紙、展開写真（図版55～57）、図版43・46・52は小川忠博氏によるものである。
6. 炭焼窯出土の炭化物の年代測定はパレオ・ラボに委託した。
7. 本報告書にかかる出土品、記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査および報告書作成にあたっては、関係諸機関・地元・多くの研究者の方々からの御指導・ご協力を賜った。厚く感謝申し上げる。

凡　　例

1. 遺構・遺物の縮尺は原則として次のとおりである。
　<遺構> 全体図1/400、住居跡1/60、土坑1/30、竪穴状遺構1/60
　<遺物> 土器実測図（縄文土器1/6）、土器拓本1/3、土製品（器台1/6、土錘・耳栓1/1、土製円盤1/2）
　石器実測図（打製石斧・磨製石斧・磨石1/3）、石錘・石錐2/3
2. 拓本で両面を載せてあるものは、断面右側が表面、左側が内面である。
3. 石器の内、磨石の磨面は■で表示した。
4. 遺構平面図のスクリーントーンは次の通りである。
　炉 ■ 地山 ■

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経過

唐松遺跡は山梨県北巨摩郡双葉町宇津谷に位置している。1991年山梨県住宅供給公社より山梨県教育委員会学術文化課に、当地に「唐松団地」を建設する旨の事業計画が提出された。学術文化課では、双葉町に文化財担当職員がいなかったため周辺市町村である中巨摩郡敷島町に試掘調査を依頼した。敷島町では大島正之氏（教育委員会生涯教育課文化財主事）を派遣、同年9月30日～10月4日・9日・14日～15日・21日～22日の9日間にわたって建設予定地の試掘調査が実施された。その結果、縄文時代の石器・土器などが多数出土、建設予定地の西側、全体の約3割にあたる部分について遺物包蔵地と認めた。

このような成果に基づき、1992年10月に学術文化課・山梨県埋蔵文化財センター・住宅供給公社とで協議を行い、1992年度および1993年度に発掘調査を実施することになった。文化財保護法に基づく山梨県教育委員会教育長から文化庁長官への発掘通知の提出を経て、山梨県埋蔵文化財センターによる発掘調査が1992年11月5日～25日（第1次調査）、1993年5月6日～1994年1月6日（第2次調査）の期間にわたって実施された。発掘調査終了後、遺物発見通知を韮崎警察署あてに提出、その後整理作業に入り、報告書の作成に至った。

第2節 発掘調査の概要

第1項 発掘調査の経過

第1区

1992年10月27日	文化庁長官宛に発掘通知を提出
11月4日	発掘調査開始
12月24日	機材・遺物撤収・調査終了
1993年1月7日	遺物発見届を韮崎警察署長宛に提出

第2区

1993年4月26日	文化庁長官宛発掘通知提出
5月6日	表土剥ぎ及びグリッド設定
11日	機材搬入
17日	作業員が加わり、発掘調査開始。
12月27日	機材・遺物撤収
1994年1月6日～9日	現場の後片付け等を行い調査を終了する。
13日	遺物発見届を韮崎警察署長宛に提出

第2項 遺構・遺物の概要

唐松遺跡は茅ヶ岳の山裾を、南流する塙川・釜無川が分断して形成した河岸段丘状、標高380m付近に立地する。唐松遺跡の発掘調査は山梨県住宅供給公社の「双葉唐松団地建設事業」に伴い、7,000m²の範囲にわたって実施した。そのため92年度にはこのうちの南西部分1,500m²を第1次として、93年度には残った北東部分5,500m²を第2次としてそれぞれ発掘調査を行った。その結果、河岸段丘上の傾斜の緩やかな南斜面を利用した縄文時代中期を中心とする集落跡を確認した。

本遺跡は全体的に畠土と地盤の色調の区別がつきにくい土質であるため、遺構を確認することはかなり困難であった。確認した遺構は縄文時代中期の住居跡11軒、土坑100基が主なものであり、その他竪穴状遺構、平

安時代の炭焼窯、後世の溝等が存在する。この縦横に走る溝は近年まで畠の地境として利用されていたと思われる。住居跡は繩文時代中期初頭から後葉までのものが確認されている。中期初頭のものは調査区の南に2軒存在し、五領ヶ台Ⅱ式期に位置付けられる土器を埋甕炉として利用している。中期中葉から後葉のものは調査区全体に位置しており、さらに集落は調査区外北側にも広がっていると考えられる。集落の中心及び住居跡周辺には該期の土坑が数多く存在し、集落の成り立ちについて知ることができる。

遺物は遺構に伴って多数出土した。このうち土器は非常にろく表面の摩耗は著しく、残存状況は良好とはいえない。一方石器は打製石斧、磨製石斧、石皿、磨石、石匙等が多数出土している。とくに打製石斧の出土量は非常に多い。また本遺跡からは土偶の出土量が比較的多く、脚部や頭部、腹部等を確認している。

第3項 調査組織および協力機関

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当 1992年度

　　山本茂樹（山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事）

　　五味信吾（　　〃　　文化財主事 現：甲府養護学校高等部教諭）

　　1993年度

　　五味信吾（山梨県埋蔵文化財センター主任・文化財主事）

　　石神孝子（　　〃　　文化財主事）

調査員 伊藤正彦（現 莽崎市教育委員会非常勤嘱託）

調査補助員 村松佳幸（現 山梨県埋蔵文化財センター非常勤嘱託）

作業員 井富保仁・飯室力・三井清廣・保坂吾良吉・柳本正房・土橋孝次郎・柳本英文・柳本精春・小林良三・森貞一・輿石義幸・柳本智治・土橋幸太郎・中村東美夫・中島茂・久保寺亮・望月重昭・箭本保・中島光江・小川己佐子・柳本春子・鰐池はつ子・中込祥乎・柳本環子・長久保孝子・長久保まち子・中島由江・柳本美津子・柳本永子・柳本ひさ・山田けさ江・柳本純子・鰐池洋子・柳本三重子・土橋妙孝・関本芳子・飯室久美恵・羽中田俊子・柳本初音・柳本洋子・箭本花代・柳本典代・柳本みさ子・柳本立美・名取住子・高添美智子・菊島やよい・水上豊・居村道夫・保延勇・内藤賢一・小林義平・横森松男・箭本重臣・箭本美紀・輿石俊雄・上野理江・小林光治・深見達也・箭本公介・泉博人

整理員 菱山貴美子・長谷川巖・飯寄貞子・森秋夫・関口愛子・出月遊鬼子・長田可祝・出月満寿江・中込よしひ・内藤安雄・八巻久子・望月和佳子・金井京子・平嶋弘子・石川哲理・森田良子・岩間佳子・清水真弓・伊藤順子・古屋和喜子・弦間千鶴・土屋道子・堀江淑子

協力者・機関 山梨県住宅供給公社・双葉町教育委員会・高須秀樹

第2章 環 境

第1節 環境と周辺の遺跡

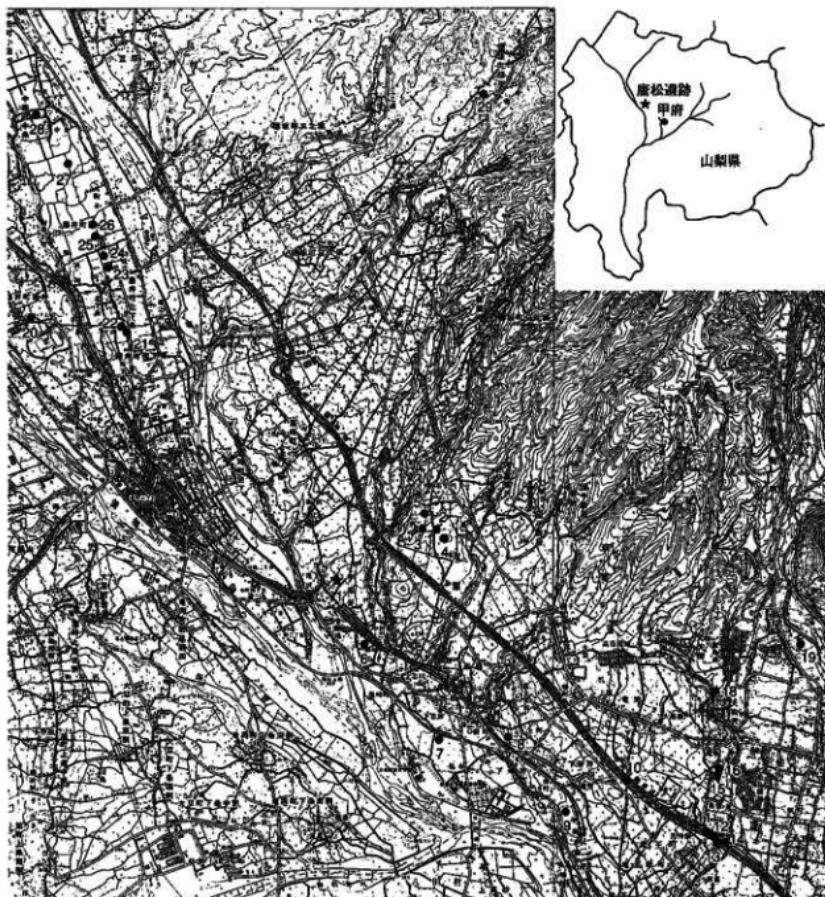
甲府盆地の北に位置する茅ヶ岳南麓上には、韭崎火山岩屑流が厚く堆積し、南に緩く傾斜しながら長い裾野を延ばしている。茅ヶ岳から流れ出るいくつもの小さな流路によって痩せ尾根が形成され、しかも連続する比較的起伏に富んだ地形である。一方段下には肥沃な穀倉地帯として知られ、南北に長く延びる藤井平の西縁を釜無川が、東縁を塩川が流れ、やがて合流して釜無川となり緩やかにのびる茅ヶ岳の裾野を分断して河岸段丘を形成している。

この茅ヶ岳南麓に所在する、北巨摩郡双葉町宇津谷地内に唐松遺跡は立地する。本遺跡では縄文時代中期の集落が確認され、釜無川、塩川の形成した河岸段丘上の緩やかな斜面、標高380メートル地点付近に位置している。藤井平の最南端から塩川を挟んで2つの尾根の南斜面に立地しており、釜無川と先ほどの塩川の合流地点より2キロメートル程北に位置する。遺跡のすぐ西側は釜無川の、また北側は茅ヶ岳に源を発し尾根に沿って南流する六反川の、それぞれ川筋になっている。また北には茅ヶ岳、北西には八ヶ岳を臨み、さらに南には富士山が遠望でき、眼前には甲府盆地が広がる展望のよい場所でもある。

遺跡の周辺には地形上、現在も尾根ごとに集落が営まれている。本遺跡周辺においては第1図のように他の遺跡の存在はあまり知られていない。さらにその中で発掘調査に至った遺跡はほとんど皆無に等しい状態である。このため遺跡相互の関係などについても明らかではない。この地域において人々の生活の痕跡を最も早く認められるのは本遺跡であり、旧石器時代のナイフ形石器が出土している。だが旧石器時代の遺物については周辺の遺跡からも現在までのところ確認された類例はないようである。縄文時代早期の遺物は中尾根遺跡（第1図29）で押型文土器が出土している。中尾根遺跡は本遺跡と同じ尾根上で唐沢川の上流付近に所在しており、早期の他中期の遺物も認められる。縄文時代中期には本遺跡以外にもいくつかの遺跡の存在が、数回の分布調査の結果から明らかになっている。宇津谷遺跡（6）は本遺跡と同様に釜無川の河岸段丘上に立地する遺跡である。中期中葉から後葉の遺物の散布が知られている。また本遺跡より北東の茅ヶ岳南麓では1984年に宇津棟遺跡（2）の発掘調査が行われ、調査範囲は僅かであったが、曾利II式期の住居1軒・土坑1基を確認し、集落の一端が明らかにされた。その他表面採集等から孤石遺跡（3）、西原遺跡（4）、米沢遺跡（5）等、縄文時代中期に営まれた集落の存在が想定される。一方、藤井平においては宮の前遺跡（26）で縄文時代前期の遺構が確認されており、また縄文時代中期の遺跡としては志村溝遺跡による県内でも先駆的な調査で学的につとに評価の高い坂井遺跡など、藤井平をはじめ八ヶ岳東南麓一帯で縄文時代中期の文化が盛行したことは、これまでの数々の調査で明らかになっている。甲府盆地内の本遺跡に最も近接するこの時期の遺跡は金の尾遺跡（17）で8軒の住居跡が確認された。弥生時代中期には藤井平、甲府盆地とともに水田等生産跡の遺構が確認されているが、今回調査した本遺跡付近においてはこの時期の生活の痕跡はあまり残されていない。本遺跡の50号土坑出土の条痕文の施された深鉢片がそれを表わず僅かな資料といえよう。弥生時代後期から古墳時代前期においては方形周溝墓と集落が合わせて確認された例としては藤井平では坂井南遺跡（20）、甲府盆地では金の尾遺跡（17）が挙げられる。本遺跡周辺では該期の遺跡の存在は現在のところ確認されていないが、今後確認される可能性を否定できない。

この地域において再び人々の活動が活発化するのは古墳時代後期であり、この時期茅ヶ岳南麓から甲府盆地へ下る赤坂台に古墳が数多く築造され、赤坂台古墳群と呼ばれる群集墳を形成する。そのいくつかは1978年の中央自動車道建設時に工事に先立ち発掘調査が行われ、その内容や性格の一端が既に明らかにされている。二ツ塚1号墳（12）や二ツ塚2号墳（11）、双葉古墳第2号（10）など5基の古墳が該当する。本遺跡よりさらに標高の低い河岸段丘上にこれらと同時期の古墳が点在する。お船石古墳（7）や双葉古墳第3号（9）等で

ある。また宇津谷遺跡の周辺でもいくつか古墳が確認されており、その分布はかなり広範囲にわたっている。それに引き続き7c後葉の生産遺跡として天狗沢瓦窯跡(18)が発見され、1988年の調査でその存在と性格が明らかになった。平安時代の生産としては本遺跡でも炭焼窯が検出された。炭焼窯は北巨摩地方に比較的多く分布することが知られており、古代牧の経営との関係についても指摘されている。本遺跡の北側には穂坂の牧推定地が所在し、本遺跡も立地や遺構の性格等からこのような説と無関係ではないとも考えられる。蘿井平でも宮の前遺跡(26)などで該期の大集落が確認されていることから、今後本遺跡周辺でも該期の集落の存在が明らかになる可能性は否定できない。中世においては塔之越経塚(8)が下今井地区の河岸段丘上の山林内に所在している。円筒形と六角形の2点の小型経筒が出土し、そのうち円筒形のものには永禄四年(1561)の銘が見られる。



- | | | | | | | |
|------------|---------|----------|-----------|-----------|----------|----------|
| 1 唐松遺跡 | 2 宇津谷遺跡 | 3 磨石遺跡 | 4 西原遺跡 | 5 米沢遺跡 | 6 宇津谷遺跡 | 7 お舟石古墳 |
| 8 塔之越経塚 | 9 古墳第3号 | 10 古墳第2号 | 11 二ツ塚2号墳 | 12 二ツ塚1号墳 | 13 電王2号墳 | |
| 14 電王3号墳 | 15 往生塚 | 16 古墳第1号 | 17 金の尾遺跡 | 18 天狗沢瓦窯跡 | 19 大塚 | 20 坂井南遺跡 |
| 21 北下条遺跡 | 22 鮎田遺跡 | 23 堂ノ前遺跡 | 24 後田遺跡 | 25 北後田遺跡 | 26 宮ノ前遺跡 | 27 前田遺跡 |
| 28 中田小学校遺跡 | | | | | | |

第1図 唐松遺跡と周辺遺跡位置図(1:50,000)

第2節 調査方法

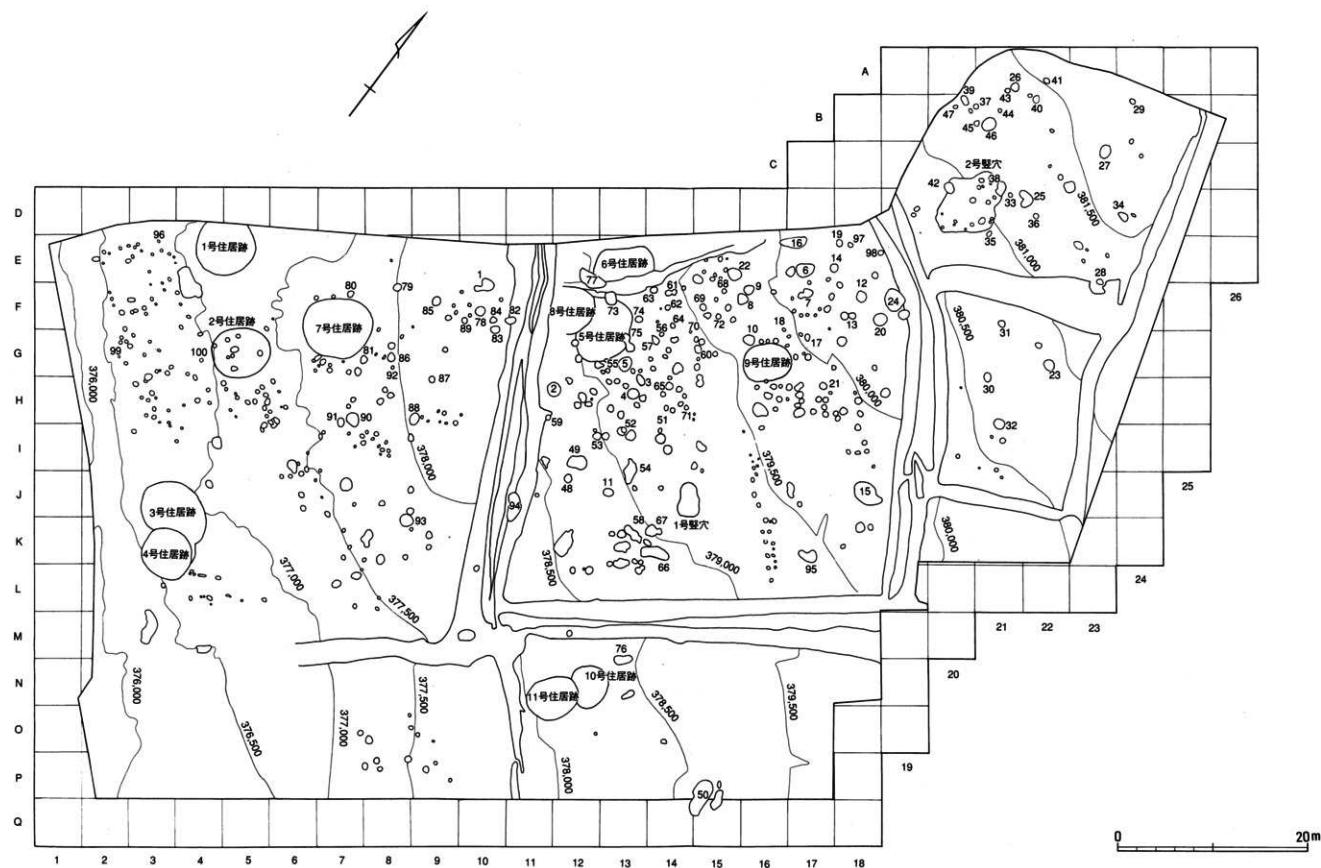
本遺跡の調査面積は7,000m²で、発掘調査は92年度の第1次調査と93年度の第2次調査の2年間にわたっている。そのため第1次調査では遺跡南西部1,500m²の、第2次調査では北東部分5,500m²の発掘調査をそれぞれ行った。(第2図)

本調査区は東西に長いため、便宜的に調査区にあわせて5×5mのグリッドを組んだ。そのため方位とグリッドの向きに関連はない。各グリッドは北西部を起点にして長軸である東方面へ1・2・3～の算用数字を、短軸である南方面へA・B・C～のアルファベットをふった。そのため西端のグリッドがA-1グリッドである。なお、第1次調査区・第2次調査区共通のグリッドを用いている。

調査はまず始めに重機によって遺構面を覆っている表土を剥ぎ取り、次に作業員がジョレンで丁寧に確認面の精査を行い、遺構確認を行った。遺物については出土原位置を記録し、取り上げ作業を行った。その後、土層図・遺構図・遺物出土状況写真・遺構写真などの作業を経て、調査を終了した。



第2図 調査区位置図



第3図 唐松遺跡全体図及グリッド配置図

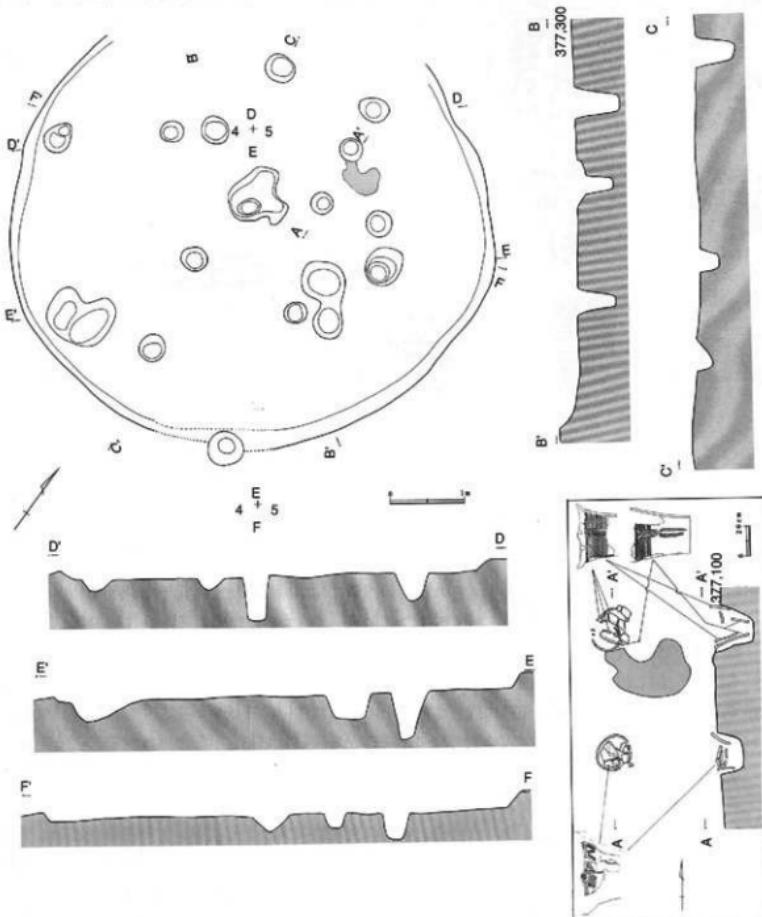
第3章 遺構と遺物

第1節 住居跡・竪穴状遺構

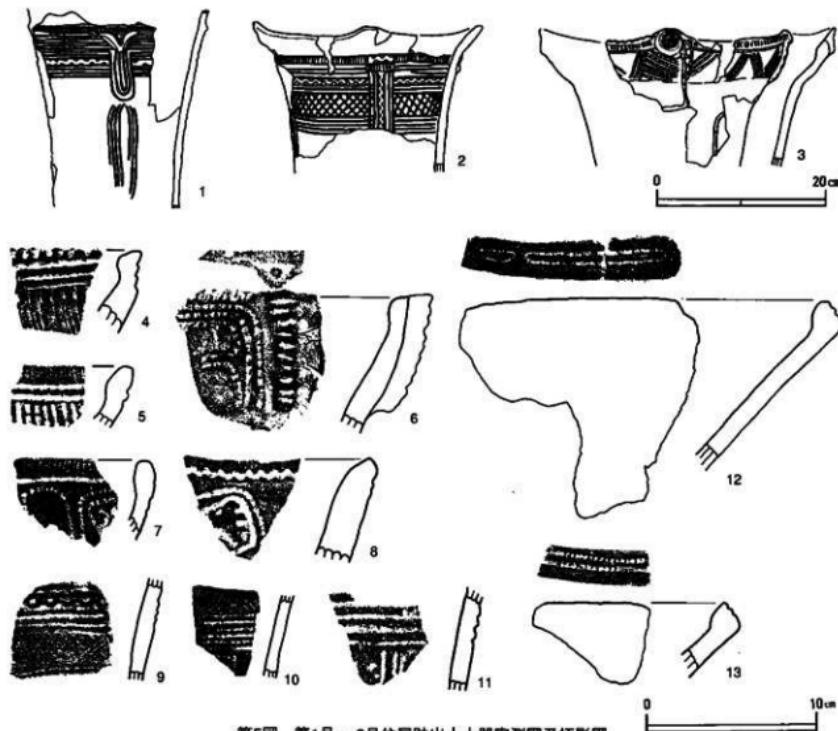
住居跡は合計11基、竪穴状遺構は2基が検出された。住居跡は全体的に調査区北側に集中しており、その中でさらに時期別にそれぞれまとまりをつくっている。炉を検出することができなかった2基については竪穴状遺構としたが、2基はそれぞれ性格が異なっている。

第1号住居跡 (D-E-4-5グリッド) (第4-5図)

位置 第1次調査区の北西端、調査区全体では西側に位置する。住居跡の一部が調査区外に広がっているが、



第4図 第1号住居跡実測図



第5図 第1号・2号住居跡出土土器実測図及拓影図

全体の様子はほぼつかむことができる。

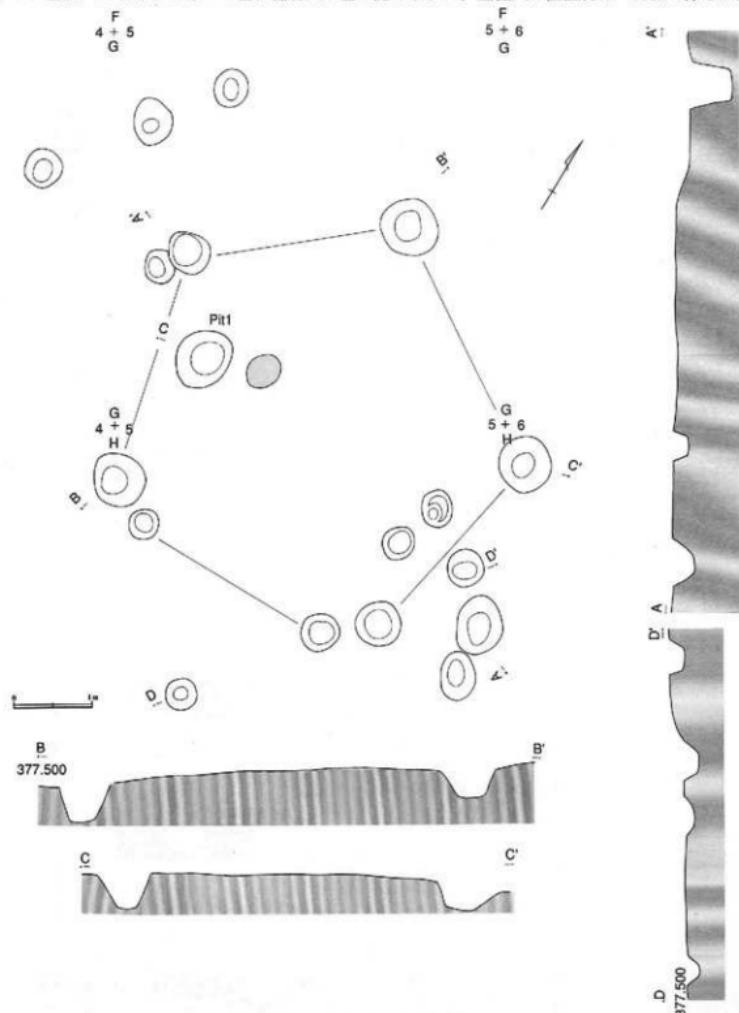
形態・規模 ほぼ円形を呈した竪穴住居であり、直径は約6.5mである。遺構確認面より床面までの深さは、24cm程度であった。住居中央よりやや北側において、埋甕炉が2基並んで検出された。このうち北の炉の東の床面約60cmが焼けて朱色を呈していた。北側の炉には底部のない深鉢土器が2個体重なって発見されている。一方、南側の炉にも、深鉢土器の胴部が据えられ、その内側には口縁部が伏せたような状態で検出された。柱穴については、直径30~40cm、深さ50cm以上の5基のビットが該当すると思われるが、住居の北東に寄っているので、他の浅いビットの中にも柱穴として機能していたものもあると考えることもできる。

遺物（第5図） 1は北側の炉に埋設されていた炉体土器であり、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期の深鉢土器の胴部である。口縁部の無文帯は僅かに残存する。その下には横位の連続爪形文、平行沈線文、交互刺突文が施されている。2は1の上に埋設された炉体土器であり、1と同時期の土器である。4単位の波状突起を持つ無文帯の下に、横位の連続爪形文、平行沈線文、交互刺突文、斜格子目文を施す。連続爪形文には4単位の波状の隆帯が貼付され、その下に爪形文を施した隆帯、縦位の交互刺突文と平行沈線による垂線が延び、横位の文様帯を区画する。3については、南側の炉内部で見つかった土器であり、より新しい沼沢式期に近い様相を呈している。すなわち、口縁部の4単位の渦巻き状の隆帯から垂線が胴部に延び、口縁部文様帯には斜方向の角押文がW字状に施されている。なお、五領ヶ台式期には本住居跡のように複数の埋甕炉を有する例が報告されている。北巨摩郡大泉村の天神遺跡や甲ヶ原遺跡の例がこれにあたる。

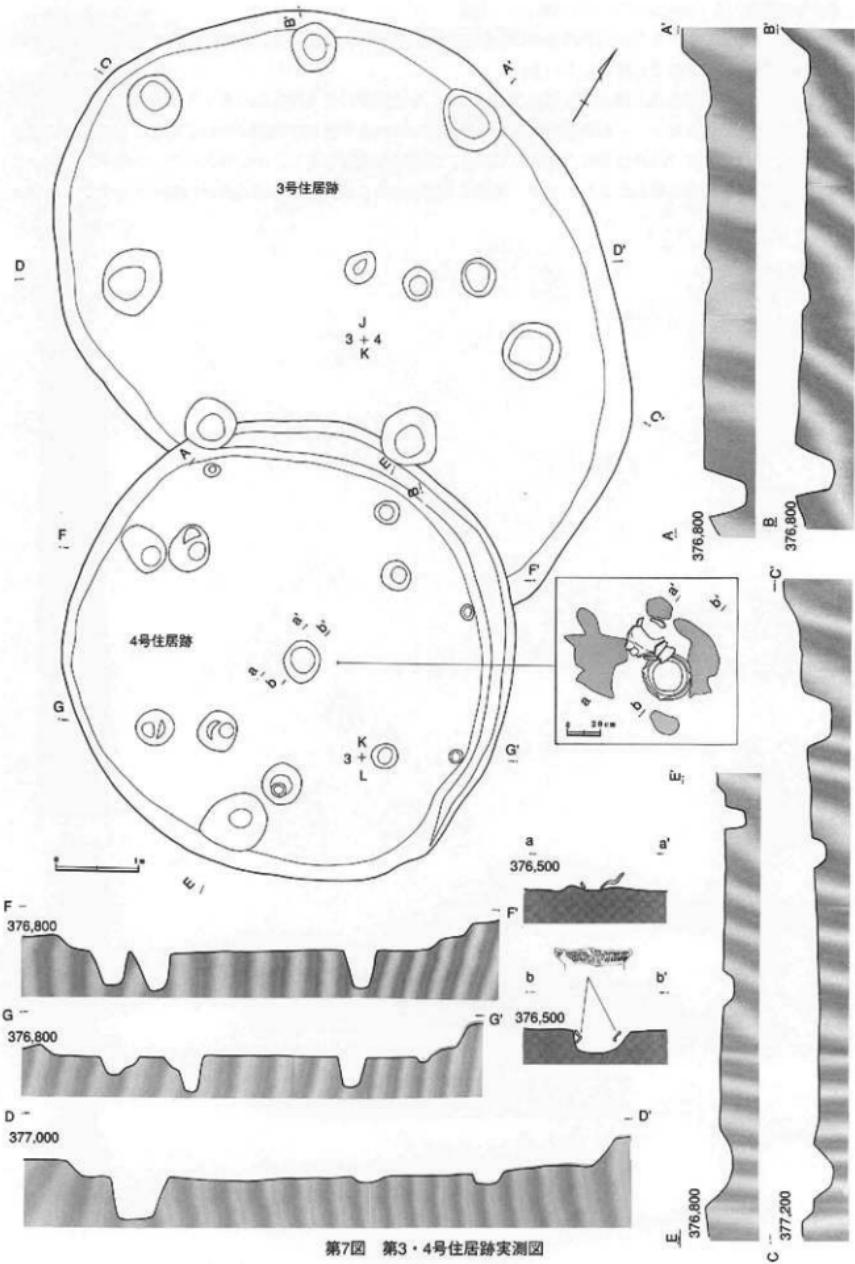
第2号住居跡 (G・H-5 グリッド) (第5・6図)

位置 調査区北側に集中する住居跡の中のひとつで台地の縁辺部に立地する。東側には第7号住居が、すぐ北側には第1号住居がそれぞれ位置している。

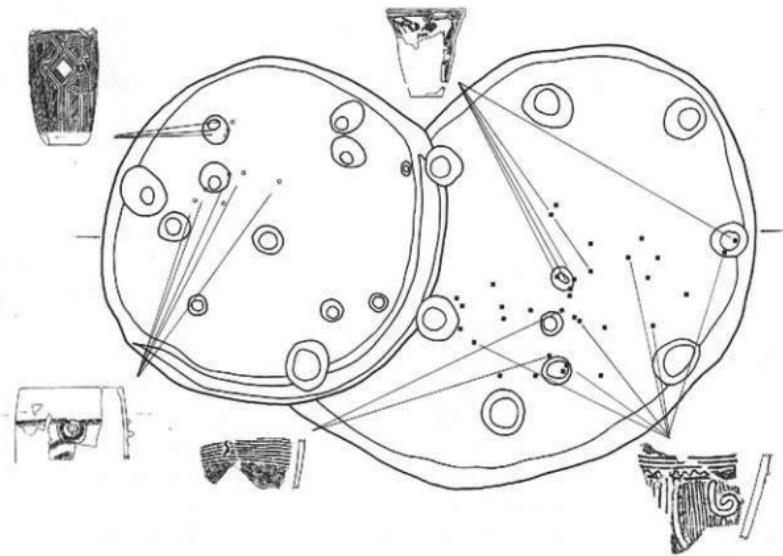
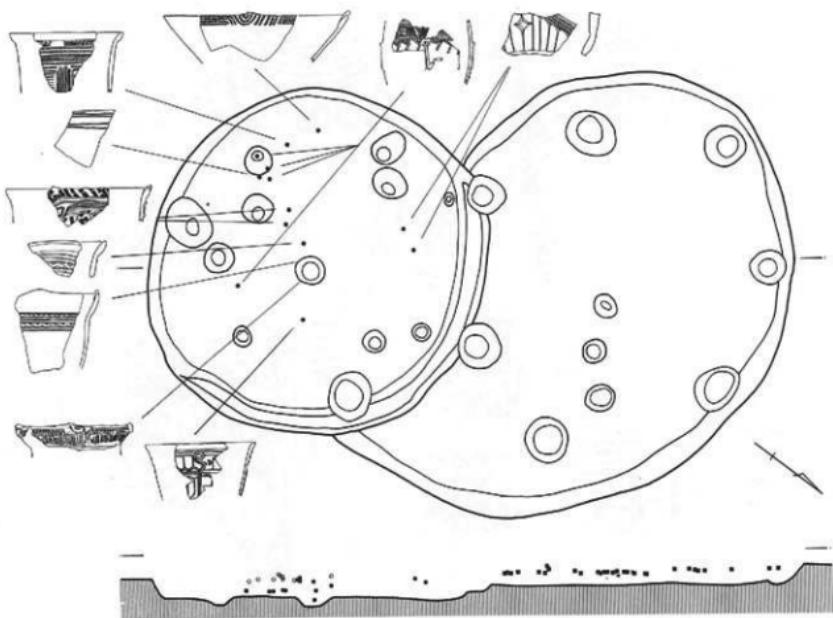
形態・規模 本住居は地山と覆土の区別がつきにくく、また耕作による搅乱のためプラン確認は非常に困難であった。そのため炉・ピット・炉周辺の床面を一部確認したのみで壁及び範囲について明確にすることはできなかった。炉は地床炉で内部は焼けて硬化しており、炉周辺の床面も赤く、かなり火を受けた様子が見受けられる。ピットは主柱穴と思われるもの5基、補助穴3基が認められた。主柱穴は直径約50~70cmで深さは50cm



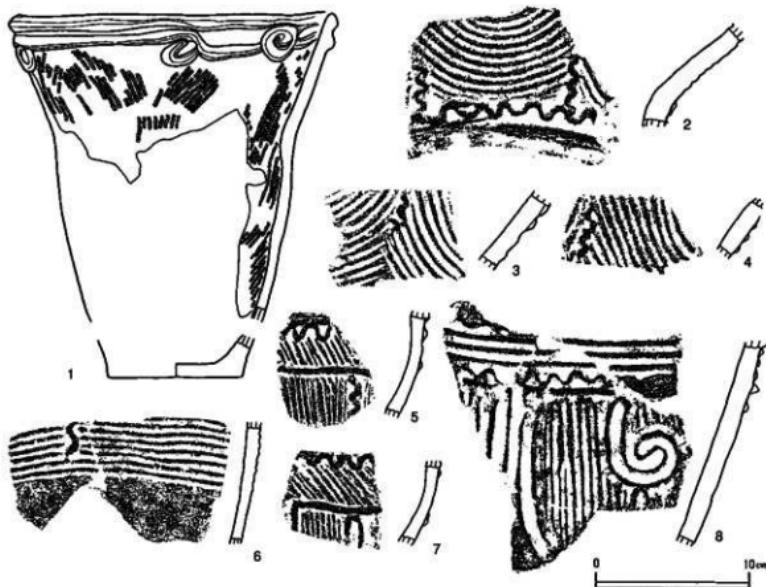
第6図 第2号住居跡実測図



第7図 第3・4号住居跡実測図



第8図 第3・4号住居跡出土遺物分布図



第9図 第3号住居跡出土土器実測図及拓影図

前後である。補助穴は主柱穴に沿うように位置しており主柱穴より掘り込みは浅い。床面は炉周辺で確認できた程度である。固く踏み締められている。炉の西側には貯藏穴と思われるピット1が確認された。

遺物 撫乱のため遺物の出土は少量であったが、炉の西側ピット1より土器片がまとまって出土した。そのほとんどは磨滅が激しく図化に耐え得ることはできないが、第5図12、13はその中で状態の良好なもので同一個体の深鉢であると思われる。口唇部のみに施文が認められる。

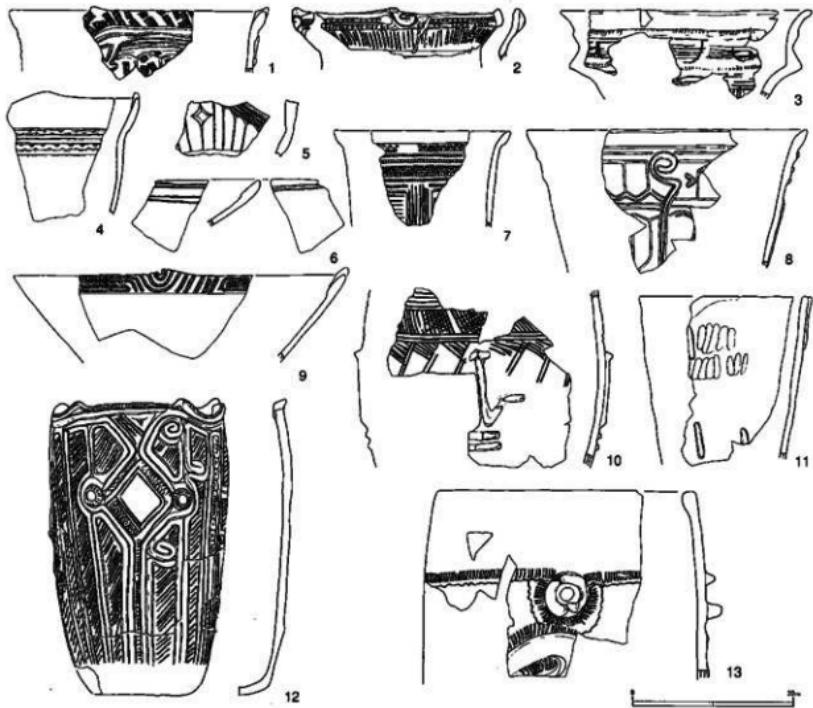
第3号住居跡 (J・K-3・4グリッド) (第7・8・9・10図)

位置 第1次調査区のほぼ中央、調査区全体では南西端に位置する。住居の南端部が第4号住居跡と重複している。

形態・規模 楕円形を呈した竪穴住居であり、直径は8m、短径は約6.5mである。遺構確認面より床面までの深さは、35cm程度であった。炉は検出されなかった。柱穴については7基検出され、これらはほぼ円形に配置されている。このうち住居の北側および西側の5基の柱穴は壁に近接している。柱穴の直径は最大70cm、最小50cmである。また床面からの深さは深いもので50cm、浅いもので10cm程度である。

遺物 (第10図) 1は唯一全体像のわかる土器である。口縁部には横位の隆帯が2本平行に付され、それに接して「の」の字状の隆帯が6ヶ所に貼付されている。地文は繩文である。繩文時代中期後葉の曾利式の中でも前半の時期のものである。関東地方の加曾利E式の影響を垣間みることのできる土器である。この土器以外は曾利II式の土器片である。2~4は曾利II式に特徴的な重弧文に波状粘土紐が施された土器片である。5・7は頸部の文様帯が斜方向の条線で充填され、その下には縱方向の条線を地文に縱の波状粘土紐などが貼付される。6は横位の条線によって頸部文様帯が形成され、縱の波状粘土紐が付される。胴部は無文である。8は頸部に横位の条線と波状粘土紐を付し、その下にはU字、逆J字のモチーフが施文され、地文として縦位の条線で埋められる。

なお、第3号住居跡の土器の分布状況は第8図のようになっている。



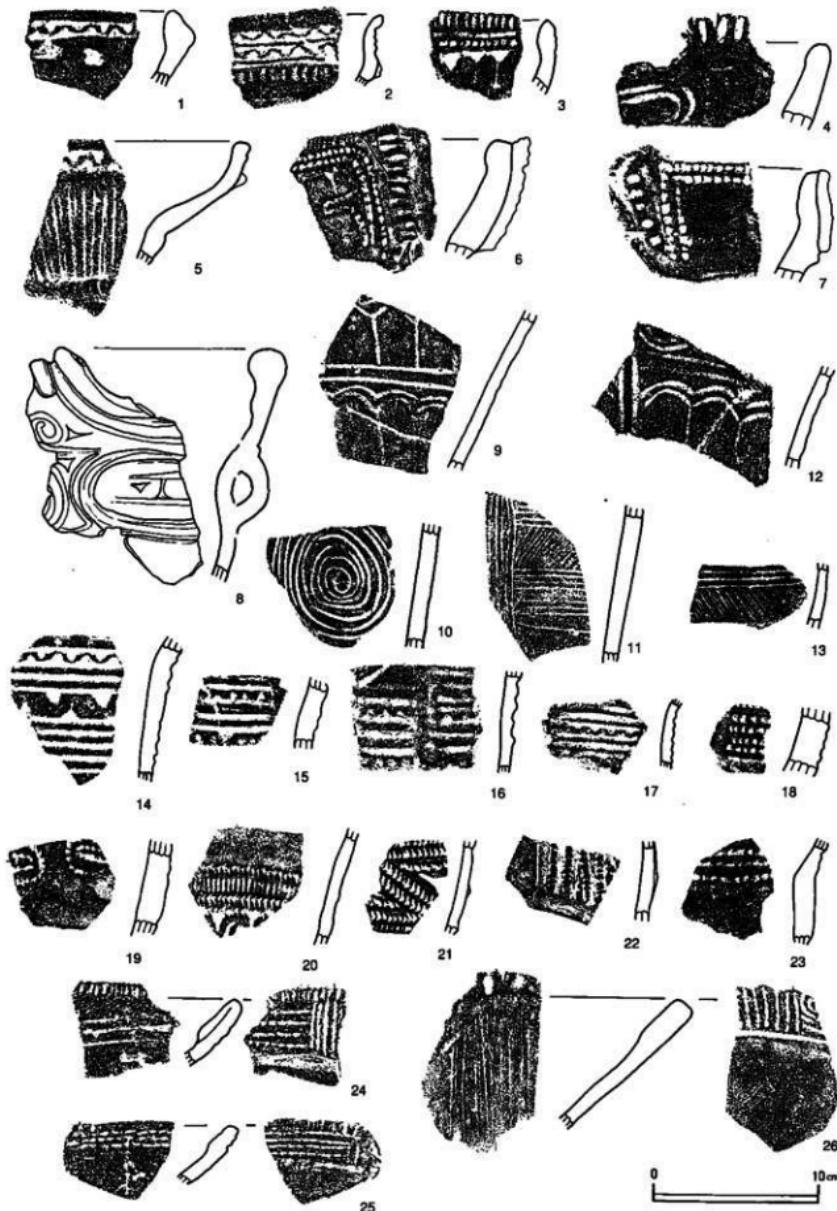
第10図 第3・4号住居跡出土遺物

第4号住居跡 (K・L-3・4グリッド) (第7・8・9・10・11図)

位置 第3号住居跡の南側に一部重複して存在する。

形態・規模 円形を呈した竪穴住居であり、直径は約5.4mである。遺構確認面より床面までの深さは、35cm程度であった。住居中央において埋甕炉が検出された。炉には深鉢土器の口縁部が据えつけられている。炉の周囲の床は焼けて朱色を呈していた。炉の上やや西には土器の口縁部が検出されており、第1号住居跡の埋甕炉のように2つの土器が重ねられて炉に埋設されたものである可能性も捨てきれない。柱穴については、住居の炉の四方1~1.5mの距離に4基が整然と配置され、さらに西と南の2基の柱穴の南西端近いところに別の2基の柱穴が存在する。これらの柱穴は炉をはさんで距離約2mの南・北平行線上に3基ずつ、対象的な位置にあるのが特徴的である。直径は30~50cm、床面からの深さは四方の柱穴4基がともに約40cm、南北2基の柱穴はこれより浅く25~30cmである。住居の南西2基の柱穴は炉の四方の柱穴を主柱のものとすると、これを補助する意味あいの柱のものと見ることもできる。なお、住居の北から東にかけての壁に近接して4つの小ピットが存在する。これを住居の建物ないしこれ付加された何らかの施設に関わるものとして興味深い。

遺物 (第11図) 1から10は五領ヶ台式期の土器である。1は深鉢形土器の口縁部で地文は縄文で、「Y」字状文を連続配置するのが特徴的である。2は炉に埋設されていた炉体土器であり、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式の深鉢土器の口縁部である。口縁部の無文帯は僅かに残存する。その下には横位の連続爪形文、平行沈線文、交互刺突文が施されている。これらは、4単位のV字形の隆带とそこから縦に延びるU字形の平行沈線に



第11図 第4号住居跡出土土器

より垂線で区画されている。3は2の上から検出された土器であり、2と同時期の土器である。横位の連続爪形文、平行沈線、「U」字状文を施す。4は横位の交互刺突文と平行沈線が頭部に施されている。5は深鉢形土器の突起部分である。「Y」字状文が連続配置され、中央部には菱形の文様が刻まれる。外側には3条の連続爪形文を施す。6は、浅鉢形土器の口縁部の破片で内外両面に横位の連続爪形文を施す。7は口縁が平坦な土器で、横位の連続爪形文および交互刺突文が繰り返され、その下には4単位と推定される縦位の平行沈線が延び、その間隔に横位の平行沈線が施される。8は深鉢形土器の平坦な口縁を持つ土器の破片である。平行沈線と「Y」字状文が連続配置され、先端が渦巻きで垂下する隆帯が貼付されている。9は浅鉢形土器の破片である。口縁内面には連続爪形文と横位の交互刺突文が施される。10は深鉢形土器の胴部で斜格子文と平行沈線が施され、その下に「Y」字状の文様が連続配置され、胴部の最も張りのある部分には隆帯が貼付されている。

12・13は、第4号住居跡内の比較的上部で検出された縄文時代中期中頃の藤内式期の土器である。当初、本住居跡はこれらの土器の時期のものであると考えられたが、中期初頭の埋甕炉の検出によって訂正されることとなった。従って、住居の廃絶から時を経て、同じ場所に住居ないし土坑がつくられたと見るべきであろう。このことは第9図の土器の分布状況からもよくわかる。12はサンショウウオのモチーフを持つ大型の土器の口縁から胴部にかけての破片である。13はいわゆるバネル文によって構成された深鉢土器で胴部の菱形の無文の部分の左右に貼付されたボタンのような文様、菱形の両脇から下方に垂れる隆帯があたかも蝶ないし蝶の頭部を連想させる特異な土器である。このモチーフは土器の対称的な位置に2単位描かれている。

なお、11については駅迎堂遺跡群で類似の出土例があり、縄文時代中期の新道式期の土器と見なすことができる。隆帯の貼付と指頭痕が特徴的である。

第5号住居跡（F・G-12・13グリッド）（第12・13図）

位置 調査区北側の住居跡群のひとつであり、斜面の緩やかな部分に位置する。住居跡・土坑群の比較的密集した中にあり西側を第8号住居と、東側を第75号土坑と、また北側を第78号土坑とそれぞれ重複している。

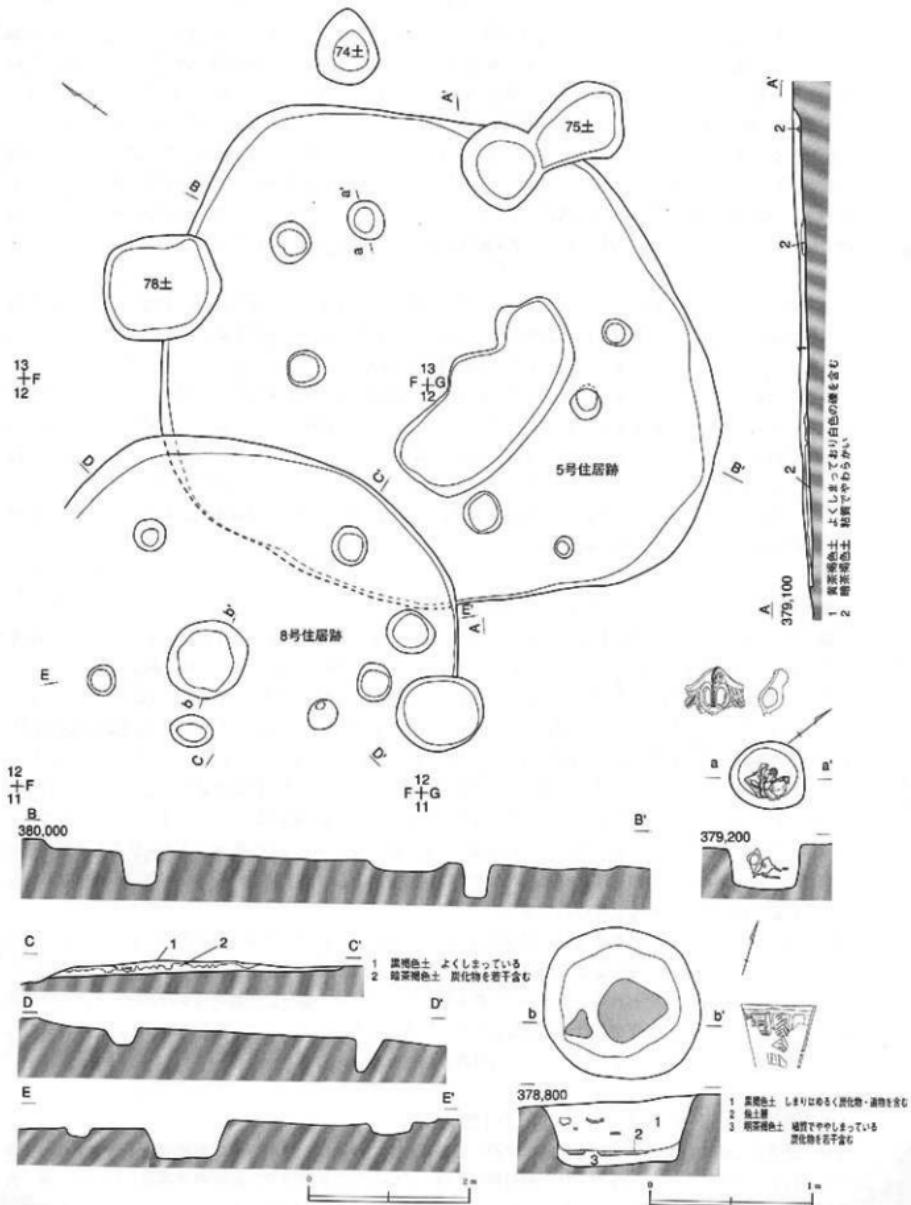
形態・規模 不整橢円形を呈した竪穴住居で、長径7m、短径5m90cmを測る。すでにほとんどが削平されており、造構確認面から床面までの深さは東壁で10cmしか残っていないかった。壁は緩やかに立ち上がっていったが、覆土は所々搅乱されていた。遺物は流れ込んでいると思われ、全層に含まれる。ほとんどが摩耗した土器片で、時期は縄文時代中期中葉から後葉まで幅広いが層位的な観察は困難である。炉は明確にすることはできなかったが、住居中央部に焼土粒子がわずかに認められた。おそらくこの範囲内に炉が存在していたと思われる。主柱穴はどれも円形で5基を確認した。平均径は50cm×50cm程度で、深さは50cm前後である。また北東側のピット内より中期中葉の土器の口縁部が廃棄されたような状態で出土し、出土状態から本住居跡は中期中葉かもしれない

。遺物 1、2（第13図）は中期中葉井戸尻式期の土器の把手であり、同一個体を成すものと思われる。石に潰されるようなかたちで折り重なるように出土した。土器は覆土の状態が劣悪であるため、表面の摩耗が著しい。口縁部は2単位であると思われるが双方施文が若干異なる。1は把手部分に沈線が施されるが、そこから胴部の文様帯へ続くと思われる隆帯には沈線は施されない。また隆帯間に三叉文が施される。2は把手部分には沈線は施されていないが、胴部へ続く隆帯には沈線が施される。

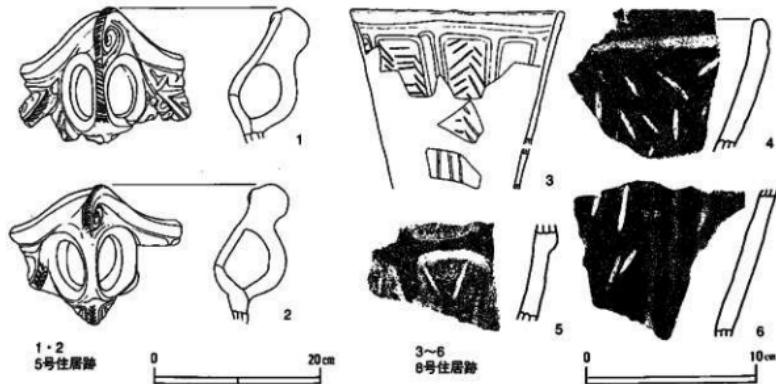
第8号住居跡（E・F-12グリッド）（第12・13図）

位置 調査区北側の住居跡群の最も東側に位置している。すぐ西側は釜無川方面へやや傾斜がきつくなっている。本住居は斜面のなだらかな部分の一番西側に位置している。北東側は第5号住居跡と重複している。また西側は後世の地境溝によって壠されており、住居跡全体を確認することはできなかった。

形態・規模 床面の広がりからほぼ円形の竪穴住居であると考えられる。削平されているため、比較的よく残



第12図 5・8号住居跡実測図



第13図 第5・8号住居跡出土土器

存している南東側の壁面でも高さは10cm程度である。西側は、壁は残存していないが床面のみを確認した。残っている範囲で長径5m50cm、短径4m50cmであり、固く踏み締められ遺存状態は良好である。主柱穴と思われるピットは5基、補助穴は2基をそれぞれ確認した。主柱穴は30cmから50cmの円形で、深さは平均30cmである。炉は住居跡の中央部より若干北側で地床炉を検出した。長径80cm、短径65cm、深さ40cmで3層の堆積が認められ、それに伴って遺物も出土している。

遺物 3(第13図)は炉及びピットより出土した縄文時代中期後葉曾利V式期の土器である。土器は炉の1層中間部分より出土した。口縁部には沈線が横走し、縦位に区画される。区画内は羽状沈線により充填されているが下部には認められないようである。同時期の土器片が燃焼面付近から(5)、また床面からも出土していることから(6)該期の住居であると思われる。

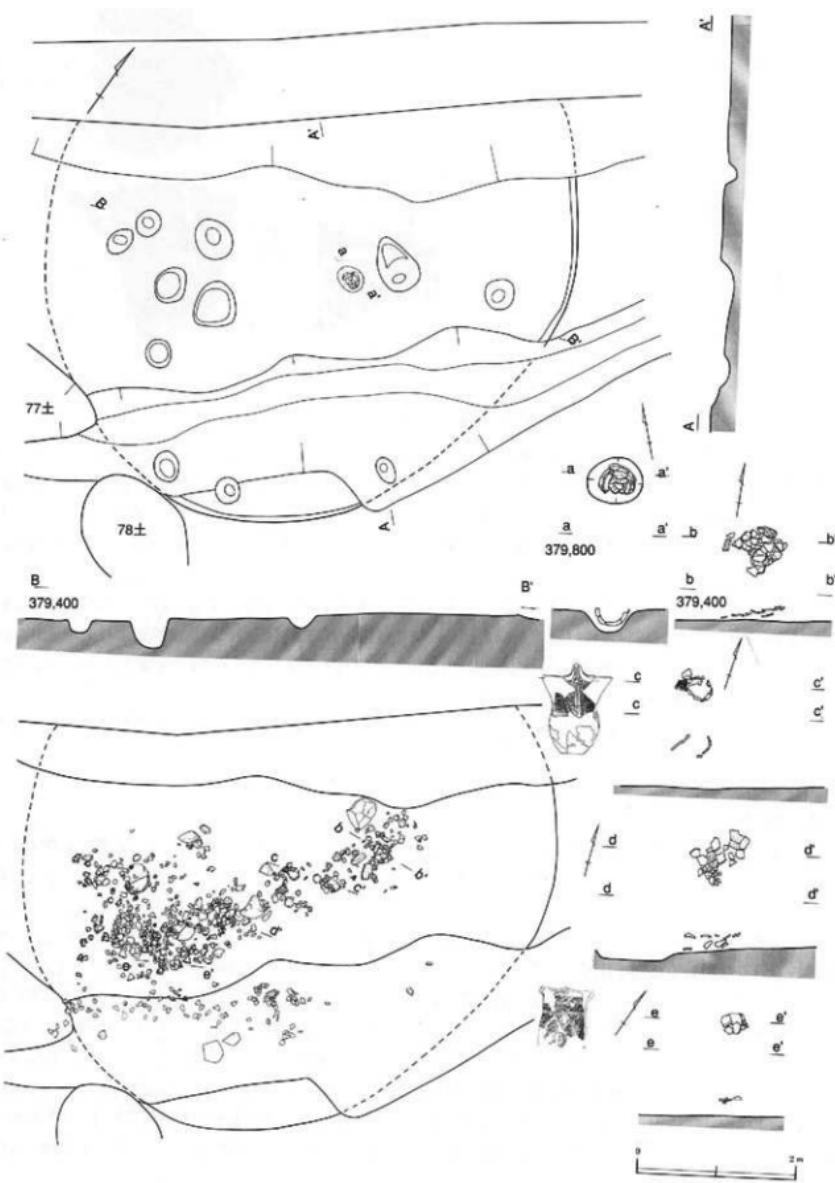
出土した遺物より、第5号住居が廃絶した後にそれに一部重複するようなかたちで第8号住居が建てられたと想定される。

第6号住居跡(E-13グリッド)(第14・15図)

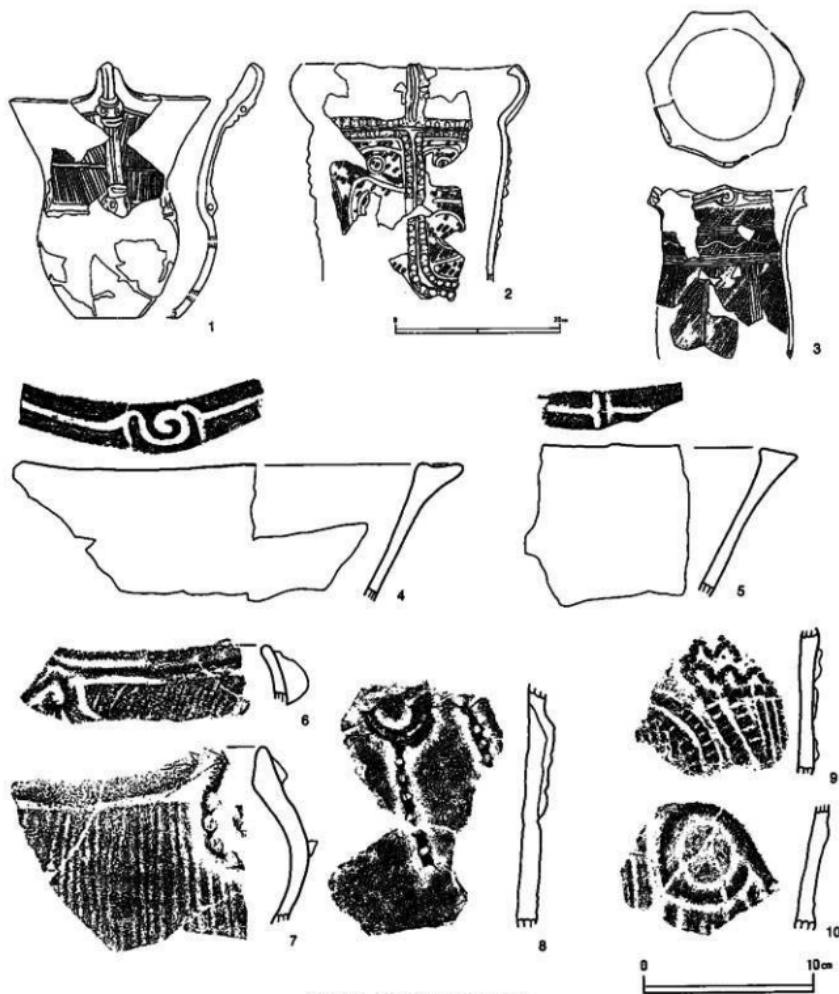
位置 調査区北側に分布する住居跡のひとつで、傾斜の緩やかな部分に位置している。住居北側は調査区外へ広がっており、東西に延びる2本の後世の地境溝によって一部床が壊されている。また西側は第77号土坑と第78号土坑のそれぞれに接する。

形態・規模 開墾によって削平されており、また後世の地境溝によって住居床面の南部分と北部分をそれぞれ壊されているため、中央部と南壁の一部を確認できたのみで全体のプランを明確にすることはできなかった。残存する壁及び床面の広がりから、住居の範囲は約長径6m80cmである。壁は住居の北東部と南部で一部確認できたのみである。深さは遺構確認面から床面まで北東部で20cm程度であり、壁の立ち上がりは緩やかである。床面は固く踏み締められており良好であるが、地形に沿ってやや西側へ傾斜している。ピットは11基検出された。直径はどれも30cmから50cm程度で深さは平均20cmと浅く、主柱穴を明確にすることは困難であった。またピットが主に西側に集中しているため住居の構造を知ることは難しい。炉は住居の中央部で土器の底部を利用した埋甕炉が出土した。利用された土器は非常にもろく、図化することは不可能であった。炉の土器内には焼土粒子・炭化物が少量認められた。

遺物は住居中央部から西側にかけて集中して出土した。住居は若干西側に傾いているため、遺物の堆積は西側が最も厚く、東側へ向かって床面が高くなるに従って薄くなる傾向が認められる。

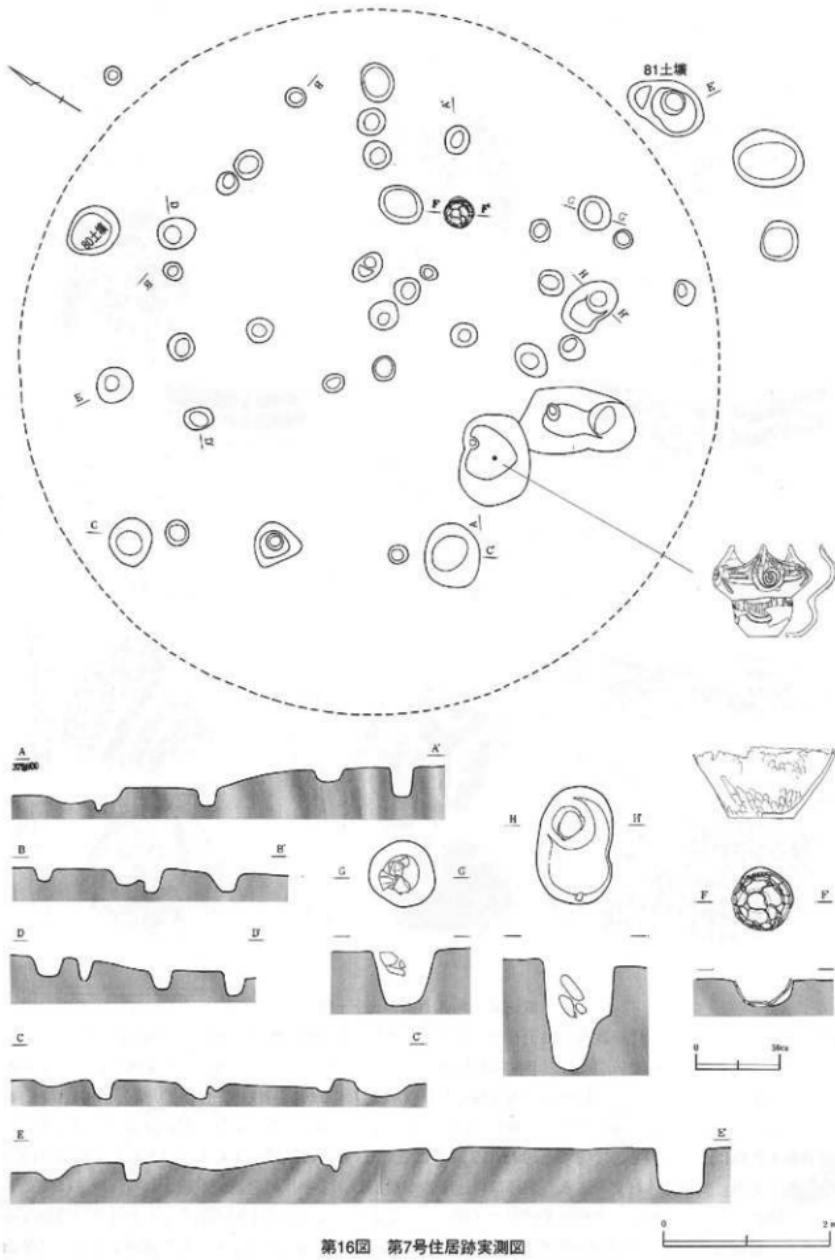


第14図 第6号住居跡実測図



第15図 第6号住居跡出土土器

遺物 遺物は土器片・石器片が数多く出土した。だが他の遺物同様土器は摩滅が激しく、図化に耐えられないものも多い。そのなかで第15図 1は住居跡のほぼ中央部、炉の東側(c-c')で出土した深鉢である。住居跡の最も上層より出土した。器形は口縁部が開き底部が算盤形を呈する繩文時代中期中葉井戸尻式期の名残をとどめているが、口縁部から胴部にかけて半蔵竹管状の工具によって施文されており、中期中葉井戸尻式期から後葉曾利I式期にかけてのものであると思われる。2は3(d-d')の北側の下層より出土した深鉢の口縁部から胴部である。口縁部は無文である。胴部は押圧隆帯が横走し、J字状の懸垂文が施される。地文は繩文で懸垂文の間に沈線が施される。中期後葉曾利I式期のものであり、1よりも下層で出土したがほぼ同時期の所産であると思われる。3は住居の中央部よりやや北側(d-d')、2のほぼ直上で出土した深鉢である。口縁部



第16図 第7号住居跡実測図

と胴部で文様構成を異にし、口縁部は7単位で渦巻文による文様帯がある。胴部は3条1単位の沈線で区画され、綱文で充填されている。中期中葉から後葉に東北地方で盛行した大木8b式に比定することができ、胎土が他の土器と異なっていることと合わせて、搬入品である可能性もある。4・5は同一個体であり、住居の最も南側(e-e')で出土した浅鉢の口縁部である。口唇部のみに文様が認められ、器壁は無文である。6は中期後葉の加曾利E式期の土器の口縁部であるが表面の磨滅が著しい。その他7~10は中期中葉の範囲内であると考えられる。また磨滅が激しく圓化には至らなかったが中期後葉曾利II・III式期の土器片も少量出土している。第61図11は住居跡南側で出土した土偶の腹部である。他の土器片に混じって出土した。出土遺物より本住居は中期中葉井戸尻式期から後葉曾利I式期にかけてのものか、もしくはそれより古い時期のものであろう。

第7号住居跡(F・G-7グリッド)(第16・17図)

位置 調査区北側に分布する住居跡群のひとつであり、その中では西側の、一段低い傾斜の緩やかな部分に位置している。南側には2号住居が、東側には81号土坑が近接する。

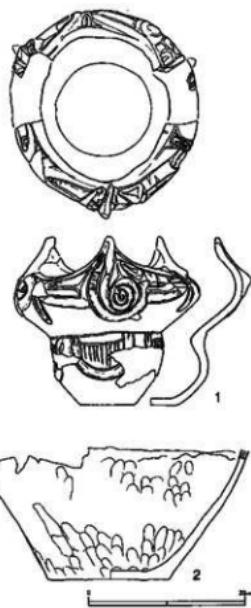
形態・規模 第1次調査区と第2次調査区にまたがっているが、覆土と地盤の区別がつきにくく、プランの確認が困難であった。そのため第1次・第2次ともに壁を確認することはできず、第2次調査時に炉・ピットのみを確認したに過ぎない。そのため規模や住居構造については明らかでない。ピットは主柱穴を明確にすることはできなかったが、炉の北西側で一部ピットの並んでいる箇所を確認した。どれも浅いが、住居の柱穴列の可能性がある。柱穴列の状態から炉は住居の中央部より南東に位置していたと推定できる。炉は土器の底部を利用した埋甕炉であり、土器の内部は真っ黒に焼けていた。炉の覆土は若干の焼土粒子と炭化物が混入していた。第1次調査時にピット1より縄文時代中期中葉井戸尻式期の土器が出土し、炉に利用されていた土器と合わせて本住居は該期のものかそれより古い時期のものであると考えられる。また住居内で2基の集石土坑が確認された。両土坑は近接しており、拳大から人頭大の石がまとめて土坑内の中央より出土している。どちらの土坑も時期を決定する遺物が出土しなかったため、本住居との関係は不明である。

遺物 第17図1はピット内から出土した土器である。口縁部は3単位で隆帯による文様帯を構成している。底部は算盤形で隆帯によりやはり3単位で縦に区画されている。区画内は沈線で充填されている。縄文時代中期中葉井戸尻式期のものと思われる。2は埋甕炉として利用されていた深鉢の底部である。土器製作時に器壁の調整を指で行ったと思われ、指頭痕が数多く残されている。内面は真っ黒に焼けていた。1と同時期のものと推定される。

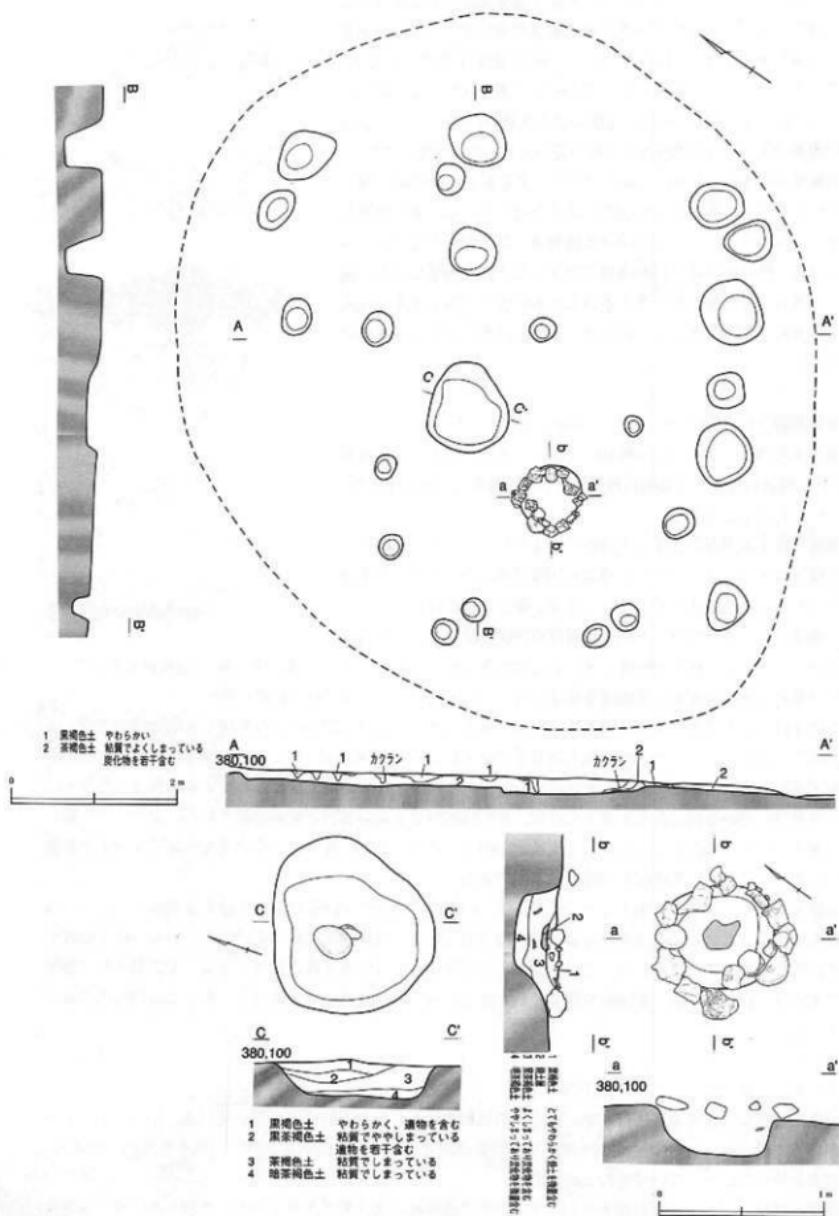
第9号住居跡(G-16グリッド)(第18図)

位置 調査区北側に分布する住居跡群の、最も東の比較的なだらかな南斜面に位置している。傾斜に沿って床面は西側の方が低くなっている。北側では土坑が多数確認されており、集落は環状に土坑を取り囲みながら、北側の調査区外へと広がっていくものと思われる。

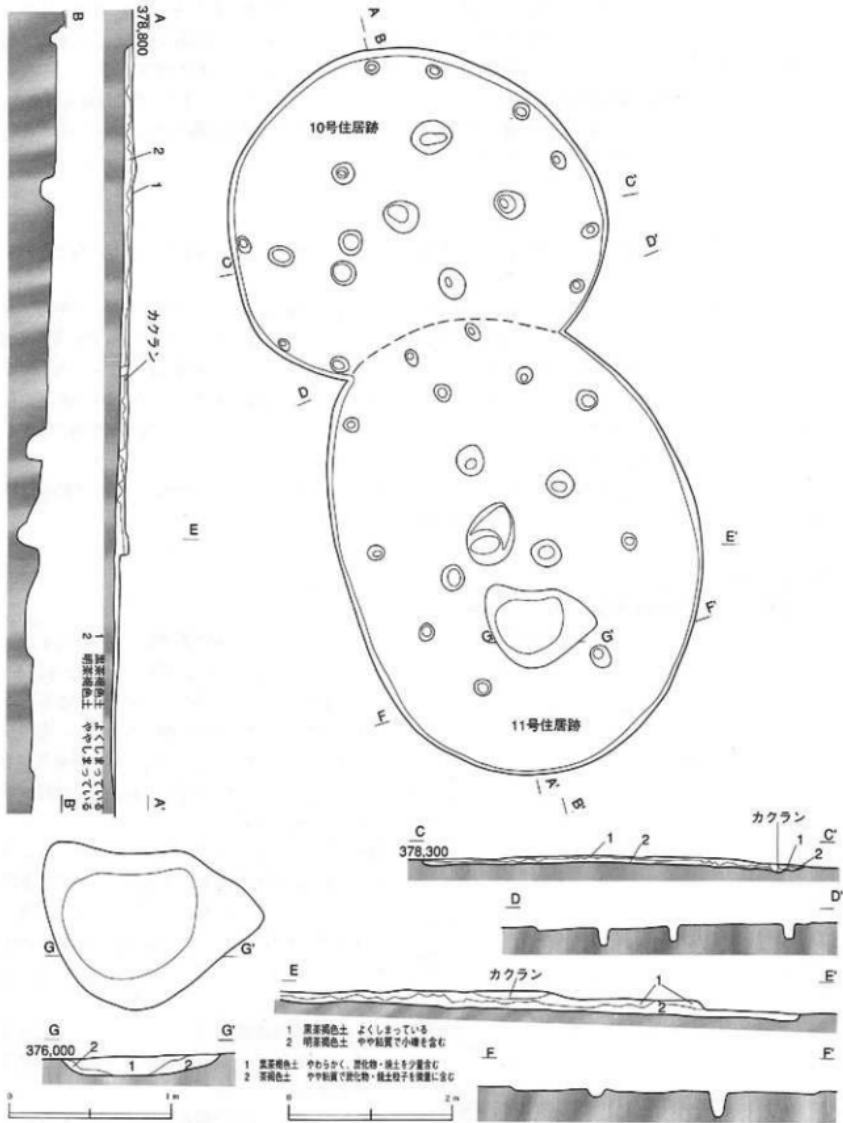
形態・規模 後世の畑作により斜面を平坦にするために遺構確認面は削平されていた。そのため壁及び床面を認めるることはできず、炉、貯蔵穴等を確認するのみにとどまった。柱穴は炉を取り囲むように確認された。手



第17図 第7号住居跡出土土器



第18図 9号住居跡実測図



第19図 第10・11号住居跡実測図

柱穴の規模は30cm×30cm前後で深さは50cmである。周囲に補助穴と思われるピットが付随しているものもある。だが西側ではピットを確認することはできなかった。柱穴の配置からほぼ円形のプランを呈していたと推定される。炉は石囲炉で西側に位置しており、約30cmの掘込みが認められた。上層に焼土層を確認し、下層からも

遺物の出土があったがそれらは摩耗が著しい。石圓炉に利用された石は人頭大の石が主であり、炉の石としてはやや小振りのものが多く、中には多孔石や石皿片、磨石等が転用されたものも含まれている。また炉の北側に浅いピットを確認した。ピット内からは石皿が出土し、住居に伴うものであると思われる。

遺物 削平のため、住居に伴うと思われる遺物はピットから出土した石皿と炉から出土した遺物のみである。だが土器は摩耗が著しく、図化することは難しい。遺物の時期は中期中葉井戸尻式期であると考えられ、住居の時期も該期のものかそれより古いものであると思われる。

第10号住居跡 (N-12・13グリッド) (第19図)

位置 調査区北側の住居跡群からは若干離れた、南側斜面の緩やかな部分に位置している。11号住居と西側で重複している。

形態・規模 ほぼ円形のプランを呈する。11号住居跡との新旧関係を明確にすることはできなかったため、西側の壁を確認することはできなかったが、補助穴の位置等から推定して長径4m61cm、短径3m97cm、遺構確認面から床までの深さは東側で10cm程度である。壁の立ち上がりはやや急であり、床面は軟弱であった。炉は確認することができなかった。主柱穴と思われるピットが住居中央部で5基認められた。直径は平均30cmから40cmで深さは20cmから30cmを測り、しっかりした造りである。補助穴と思われるピットは11基が壁側に位置していた。直径は平均20cm程度で深さは約20cmを測る。

遺物 遺物は磨滅した土器片、石器片等が多く出土したがどれも流れ込んだものと思われ、土器片の時期は縄文時代中期全般にわたっている。そのため本住居跡の時期は不明である。

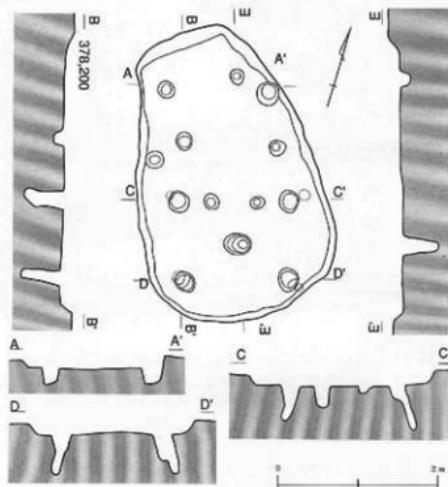
第11号住居跡 (N-12・13グリッド) (第19図)

位置 調査区南側の第10号住居跡と重複して西側に位置する。

形態・規模 楕円形のプランを呈する。東側は10号住居跡と重なっているため正確な範囲は不明であるがピットの位置等から推定して長径5m53cm、短径4m36cm、遺構確認面から床までの深さは西側で約10cmを測る。

炉は住居の西側で確認された。地床炉であると思われ、不整形で浅く底面に焼土がわずかに堆積していた。ピットは第10号住居と同様に補助穴が9基、壁に沿って住居内を巡る。直径は平均20cmで深さは約20cmを測る。

遺物 遺物は第10号住居同様流れ込んでいると思われ、縄文時代中期全般の土器片及び石器が多数出土した。そのため住居に伴うと思われる遺物の出土は見られなかった。従って第10号住居跡同様住居の時期は不明である。



第20図 第1号竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (J・K-14・15グリッド) (第20図)

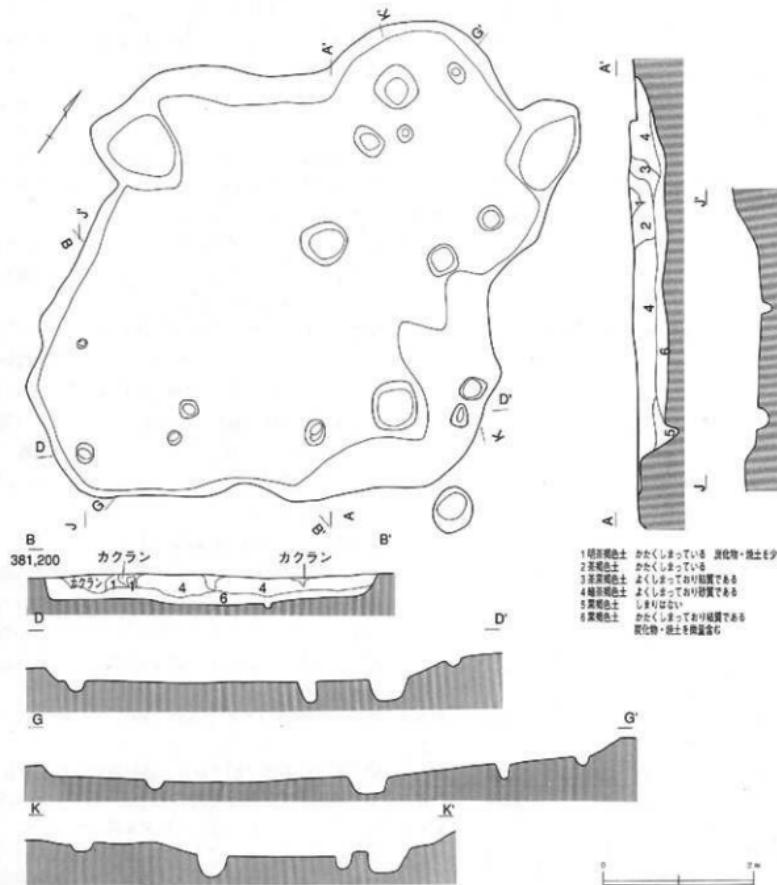
位置 本遺構は住居跡群より南側の調査区中央部に位置する。

形態・規模 本遺構は耕作のために上部が剥ぎ取られており、壁面の残存状況は良好とはいえない。本遺構は不整椭円形であり、長径3m58cm、短径2m21cm、壁は最も残りのよい南壁で床面より18cmを測る。ピットは合計13基が確認された。とく

に東西の壁に沿って位置するピットは、全て壁側から中央部へ傾くように建てられており、遺構中央部に位置するピットと比較して掘り込みは深い。また炉を確認することはできず、遺物の出土もほとんど見られなかった。さらに本遺構は他の住居と比較して小振りであることなどから、他住居とは異なる利用方法が成されていた可能性がある。

第2号竪穴状遺構 (C・D-21) (第21図)

位置 本遺構は調査区の北側に位置する。西側で42号土坑と重複しており、東側で33・35号土坑と接している。
形態・規模 本遺構は数多く流れ込みによると思われる遺物の集中により確認された。遺物は縄文時代中期全般にわたっており、ほとんどは摩耗した土器片及び石器である。不整形で長径7m91cm、短径6m60cmを測り、深さは45cm前後である。床面には大小複数の掘り込みを確認したが、第1号竪穴状遺構とは異なり、規格性を見出すことはできない。また炉を確認することはできなかった。壁の立ち上がりは西側及び南側では急であるが東側は緩やかである。以上から本遺構の性格を明確にすることはできなかった。



第21図 第2号竪穴状遺構実測図

第2節 土 坑

発見された土坑は合計100基を数える。遺跡内では数多くの性格不明のピットが確認されたが、それらとは別に何らかの遺物を含み、はっきりとした掘り込みをもつものについてを土坑とした。土坑の時期は縄文時代中期全般にわたっている。

第1表 土坑一覧表（サイズの単位はcm・図版番号は遺構、遺物の順番で示してある。）

土坑番号	グリッド	サイズ			時 期	遺構/遺物の図版番号	土器以外の遺物	概 要
1A	F-10	130	120	45		22図 33図1		不整円形であり、南西側で1B土坑と重複している。底面は平らで壁の立ち上がりは急である。遺物は摩耗し、図化するのは困難であった。
1B	F-10	72	65	25	曾利I式	22図 31図1		楕円形で、北東側が1A土坑に壊されている。浅く、底面は整っていない。多量の遺物は中期後葉曾利I式期に位置付けられる。31図1はそれらの中で比較的まとまって出土したもので深鉢の頭部から胴部である。胴部の文様はU字形を上下に組み合わせ、その中を半截竹管状工具による平行沈線で充填している。
2	H-12	168	151	57	井戸尻式	22図 33図2	打斧5 磨斧1 磨石4 多孔1	やや楕円形で北東側にテラスを持つ。底面は平坦で人頭大の礫が密に重なっており、それらの間から炭化物・土器片・石器等が出土した。土器片の大部分は中期中葉井戸尻式期のものである。摩耗が激しくそのほとんどは図化できない。
3	H-13	123	80	50	藤内式	22図 31図2 33図 3~9	打斧1 磨石4	不整形で壁の立ち上がりは急である。底面には凹凸があり、とくに西側には掘り込みが認められ遺物が集中していた。33図3は最も上層から出土したが、底面掘り込み部分直上より出土した土器と接合関係にある。口縁部に渦巻き文と三叉文が配される。31図2は33図3のすぐ下層から逆位で出土した。口縁部には摺曲文が巡っており、2単位で把手を持つ。33図5・6・7は同位置より出土した。底面掘り込み部分からは33図4・3・磨斧・無文土器の底部が重なって出土した。4は算盤状の底部を利用した浅鉢である。非常に多い。33図3・5~9は中期中葉藤内式期に、31図2・33図4は井戸尻式期に比定できる。
4	H-13	120	100	40		22図	打斧1 石皿1	楕円形で底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。人頭大的礫が中央部に集中する。
5	G-13	150	100	42		22図	磨石1	楕円形で底面は平坦であり、壁は急に立ち上がる。
6	E-17	196	148	68		22図	打斧2 磨石4	不整楕円形で北側と東側にテラスを持つ。底面は比較的平坦で、流れ込みの遺物が多量に出土した。
7	F-17	168	95	60		23図		不整形で北側にテラスをもつ。壁の立ち上がりは急であり、底面は平坦である。摩耗した土器片が多量に出土した。流れ込みによるものと思われる。

土坑番号	グリッド	サイズ			時期	遺構/遺物の図版番号	土器以外の遺物	概要	
		長径	短径	深さ					
8	F-17	158	110	25	藤内式	23図 33図10		楕円形で底面は凹凸であり、壁は緩やかに立ち上がっている。人頭大の礫が数かれるように密集し、それより下層の底面に最も近い箇所より、33図10が破片で点在するように出土した。口縁部は眼鏡状の把手と楕円区画文で構成され、胴部は綱文が施される。底部は欠損している。中期中葉藤内式期に位置づけられる。	
9	F-16	115	100	25	藤内式	23図 31図3	打斧1	不整形で浅く、底面は凹凸で壁の立ち上がりは緩やかである。土坑の全面に底部を欠損する土器（31図3）が潰れた状態で横たわっており、その上部より人頭大の礫が多数出土した。表面は摩耗が著しい。口縁部は4単位の波状であり、胴上部は隆帯による楕円区画文が巡る。それより続く隆帯は懸垂文で円形文と蛇行状であるものが交互に配されている。中期中葉藤内式期に比定できる。	
10	G-16	111	102	78		23図		円形で壁の立ち上がりは急である。遺物はほとんど認めらなかつた。	
11	J-13	92	86	53	曾利V式	23図 31図4	石皿2 打斧3 磨石2	ほぼ円形で底面は若干凹凸があるが固くしまっている。人頭大から拳大の礫が密集しており、その中に石皿等の石器が混じる。それらを全て取り除いた最も下層より土器（31図4）が出土した。深鉢であると思われ、口縁部は沈線により弧状文が施され下部は縦位の区画がある。区画内には羽状沈線が充填される。中期後葉曾利V式期に比定できる。	
12	F-18	116	103	75		23図	石皿2	円形で中央部にピット状の遺構を持つ。遺構確認面には礫が数個と石皿片が露出していた。	
13	F-18	85	80	28		23図		ほぼ円形で浅く、東側は掘り込みが見られる。底面は凹凸がある。壁は緩やかに立ち上がっている。遺構確認面には礫がまとめて露出していた。	
14	E-18	88	84	50		23図	打斧1 磨石1	ほぼ円形で壁は底面に向かって放射状におちている。底面は平坦であり若干遺物が流れ込んでいた。	
15	J-18	315	160	109		24図	打斧1 磨石2	不整形で大型である。底面は狭く凹凸があり壁は南側が急に立ち上がっているほかは比較的緩やかである。層位は7層で、上層では中期全般の土器片約500点が出土したが摩耗しており、流れ込みによるものと思われる。下層は遺物は少なく、時期を決定する遺物の出土も認められなかつた。	
16	E-18			10	井戸尻式	23図 31図5	打斧1	後世の地境の溝の掘削のため、遺構の上部は削平され全体の形状について把握できない。しかし、底面とそれに伴うと思われる遺物が残存しており、本土坑の性格を伺うことができる。底面は凹凸であり、	

土坑番号	グリッド	サイズ			時 期	遺構/遺物の図版番号	土器以外の遺物	概 要
		長径	短径	深さ				
								付近より遺物が出土した。31図5はその一つで口縁部に眼鏡状の円形文に隆帯による文様が組み合わされている。その他摩耗が著しく、図化できなかったが算盤玉状の底部に楕円区画文を配する深鉢の底部等も出土している。中期中葉井戸尻式期のものであると思われる。
17	G-17	71	50	30		23図	磨石1 多孔1	楕円形で、底面には南側にピットを伴う。遺物は摩耗が著しく、時期を判断することは困難であった。
18	G-16	45	30	40		23図		楕円形で壁は緩く立ち上がり、底面はすり鉢状を呈する。拳大の礫が土坑の上部に集中する。
19	E-18	70	70	52	曾利V式	23図 31図6	打斧1 磨石1	不整円形で底面は若干凹凸があり、壁の立ち上がりは急である。大小の礫が集中しているがそれに混入する形で全体的に摩耗の激しい土器(31図6)が出土した。隆帯による区画が施され、区画内を羽状沈線で充填する。中期後葉曾利V式期に比定できる。
20	F-18	72	70			24図	磨石1	円形で浅く、北側に若干傾斜しており底面は平坦である。磨石等の遺物が中央に集中し、その周りに土器片等が散布している。土器片はいずれも小さく、年代決定には至らなかった。
21	H-17	40	35	20	井戸尻式	23図 34図 11・12		円形で浅く、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。底面付近まで礫が集中し、そこに中期中葉井戸尻式期の土器が混入していた。すぐに南側に位置する第9号住居跡とほぼ同じ時期の遺構であると思われる。
22	E-5	140	107	42		24図	打斧1	不整楕円形で底面は凹凸があり壁は緩やかに立ち上がっている。遺物は遺構確認面の高さに分布しており、土坑との関係は不明である。
23	G-22	111	99	35	曾利IV式	24図 34図 13~19	磨石7 石皿2 多孔2	円形で底面は凹凸があり、南へ若干傾斜している。本土坑を中心にその周辺からも多数の遺物が出土した。土器は胎土、文様などからほぼ同一個体であると考えられるが、摩耗が激しく、復元には至らなかった。そのため比較的文様の明確なものについて拓本で示した。胴部は縦位に区画され区画内は繩文により充填されている。中期後葉曾利IV式期のものであろう。
24	F-19	223	187	40	井戸尻式	24図 34図 20~22		やや楕円形で浅く、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。土坑のほぼ中央に土器と礫が集中していた。土器片のほとんどは同一個体で34図20は頭部の眼鏡状把手、21は胴上部で隆帯で渦巻き文などを配しながら縦位に区画し、区画内は沈線により充填している。22は21の下部に位置すると思われ隆線が縦走する。中期中葉井戸尻式期に比定できよう。

土坑番号	グリッド	サイズ			時 期	遺構/遺物の図版番号	土器以外の遺物	概 要	
		長径	短径	深さ					
25	D-22	150	100	65		25図	石縁2 打斧1 磨石2	不整形で大型であり、中央に掘り込みが見られる。底部は凹凸があり壁の立ち上がりは急である。遺物は多数出土したが流れ込んでいる可能性が高い。	
26	A-21	94	75	57		24図	石皿1	ほぼ円形で、底部に2箇所掘り込みがある。北側のピットには底面まで多くの礫、遺物が混入するが摩耗が著しく、無文のものがほとんどである。	
27	C-23	145	112	54		24図		不整円形で底面は南から北へ緩やかに落ちている。底面には掘り込みが見られるが遺物は摩耗している。	
28	E-23	77	69	23		25図	磨石1	円形であったと思われるが北側は後世の地境溝により削平されていた。底部は平坦である。中層で焼土層を確認したが周辺に関連遺構を発見することはできなかったので屋外炉であると思われる。	
29	B-24	62	59	57		25図	石皿1	円形ですり鉢状に落ち込む。石皿片のみが出土した。	
30	G-21	92	70	34		25図	土偶1	楕円形で底部は凹凸であり壁は急に立ち上がる。	
31	F-21	68	68	38		25図		不整円形で底部は西側に傾斜している。遺構上層より同一個体と思われる曾利V式の土器が出土したが摩耗が著しく、固化できなかった。	
32	I-21	110	95	23		25図	磨石1	不整円形で浅く底面は凹凸である。壁の立ち上がりは緩い。遺物は流れ込んでいるようである。	
33	D-21	45	40	50		25図		小型円形で壁の立ち上がりは急である。遺構の中央に礫が集中し、遺物が少量混入していたがそのいずれも摩耗が著しい。	
34	D-24	133	70	40		25図		不整形で底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がっている。東側にピット状の掘り込みがある。遺物は流れ込んだものであると思われる。	
35	D-21	108	85	60		25図	石皿1	楕円形で東側にテラスを有する。底部は平坦であり壁の立ち上がりは急である。落ち込み部分で石皿等の遺物が多く出土したが時期決定には至らなかった。	
36	D-22	60	62	85		25図	磨石4 台石1	円形で深く、底部は丸みを持っているが壁は急に立ち上がる。上部から礫、遺物が少量出土した。	
37	B-21	50	53	38		25図		円形ですり鉢状である。礫が底部まで集中しているが遺物の混入はほとんど見られなかった。	
38	C-21	65	63	15		25図	石皿1	円形で浅く、底面は凹凸だが緩やかに立ち上がる。表面に平坦な礫が敷かれるように出土した。少量遺物が含まれていたが時期決定には至らなかった。	
39	B-20	102	63	25		25図	石皿2	不整楕円形で東側が若干深い。底部は凹凸であり、壁の立ち上がりは緩い。石皿が出土した。	
40	B-22	74	74	32		25図	無文土器 磨石2	円形で底部は平坦で緩やかに立ち上がっている。僅かに指頭痕の観察できる無文の深鉢が胴部から底部にかけて土坑にはまるように正位で出土した。それらの下層より中期中葉井戸尻式の土器片が出土していることから該期の土坑であると思われる。	

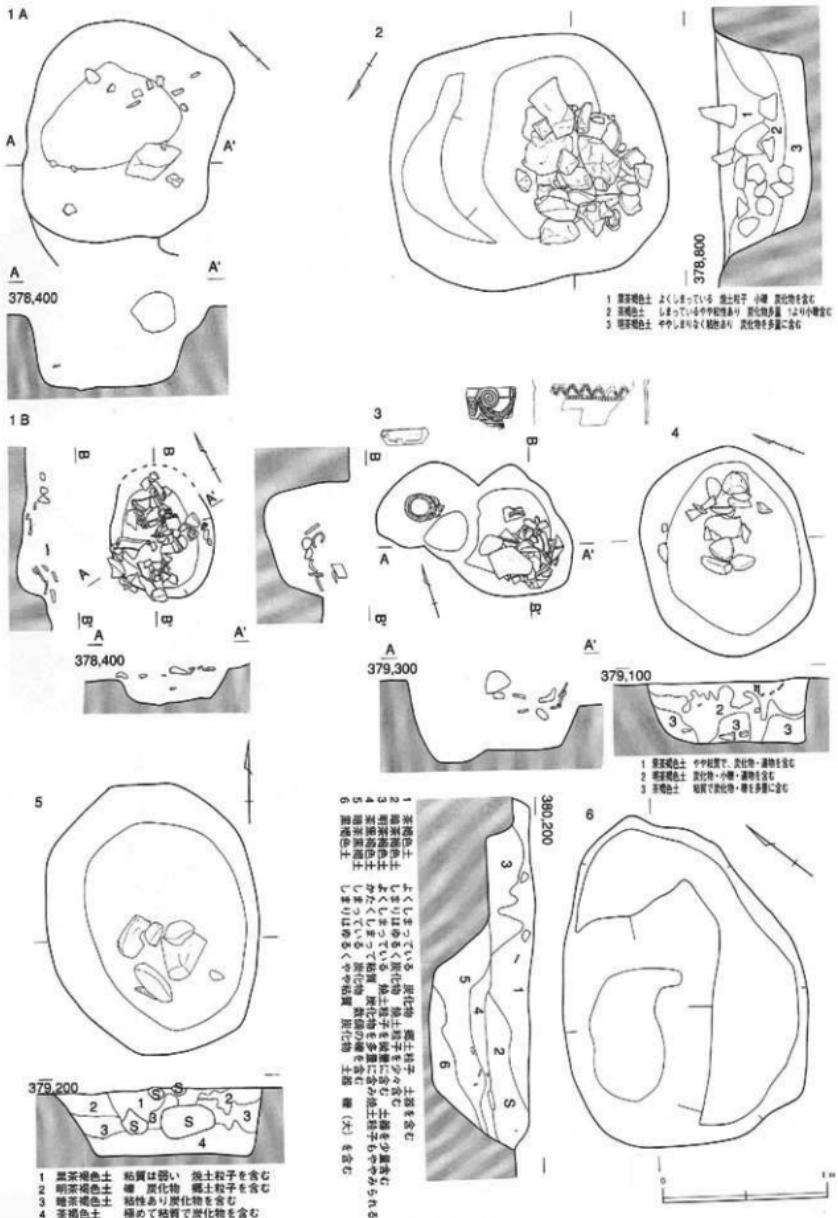
土坑番号	グリッド	サイズ			時期	遺構/遺物の図版番号	土器以外の遺物	概要
		長径	短径	深さ				
41	A-22	68	57	42		25図		不整楕円形で東側にピット状の落ち込みがある。上部に礫が集中し、それに潰されるように摩耗した中期後葉の遺物が出土したが固化には至らなかった。
42	C-20	128	100	55		25図		2号竪穴状遺構に重複している。不整形で、底部は北側へ緩く傾斜している。
43	B-20	50	50	30		25図		円形で浅く、底面は凹凸がある。礫が底部付近まで集中していたが遺物の混入は見られなかった。
44	B-21	40	40	10		26図	打斧1	円形で浅く、底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩い。
45	D-20	48	47	26		26図		円形ですり鉢状である。壁は緩く傾斜する。土坑の中心部より拳大の礫が集中して出土した。
46	B-21	142	132	27		26図		不整円形で大きいが浅い。底面は平坦で壁の立ち上がりは急である。遺物は流れ込んでいると思われる。
47	B-20	50	40	15		26図		楕円形で底面は平坦であり、北側に位置している。土坑内からは拳大の礫が数点出土した。
48	J-12	84	84	32	井戸尻式	26図 31図8		円形で底面は凹凸があり、壁はやや急に立ち上がっている。人頭大以上の大型の礫が集中しており、それに潰されるような状態で底部を欠損した土器(31図8)が出土した。2単位で眼鏡状の把手が2箇所に配されており、口縁部には押圧隆帯が二重に横走する。胴部にはやはり隆帯で渦巻文とW字状のモチーフで構成される。胴部はへら状の工具で調整される。中期中葉井戸尻式期に比定できる。
49	I-12	210	140	30	新道式	26図 31図7 35図 23~50	土偶5 石鎌1 打斧7 粗匙1 横刃1 磨石5 石皿2 礫器1	不整楕円形で浅く、壁はごく緩く立ち上がる。底面はやや凹凸がある。遺物は大小の礫及び多数の石器土器片が出土した。そのほとんどは中期中葉新道式期のものであるが接合等により全体の文様の様子を知ることができるものは31図7をのぞいてはほとんど皆無であった。またそれに混じって該期のものであると思われる数点の土偶が出土した。31図7は深鉢胴部である。楕円区画文で区画された中に貼り付けによるサンショウウオのモチーフが施される。
50	P-15	410	170	105		27図 36図 51~57	土偶1	不整形で壁の立ち上がりは急であり底面は凹凸がある。下層は南と北でそれぞれ掘り込みが認められるが覆土は同一である。遺物は第3層の暗黒褐色土層中より多量の土器片が出土した。また36図51~57は弥生時代前期後葉から中期前葉に位置付けられる深鉢片である。条痕文が施されている。焼土層の上層より出土した。なお同レベルより縄文時代の土偶頭部も出土している。本土坑は縄文時代中期後葉に集落の終焉とともに廃絶されたようであるがその後再利用された可能性も否定できない。

土坑番号	グリッド	サイズ			時 期	遺構/遺物の図版番号	土器以外の遺物	概 要
		長径	短径	深さ				
51	I-14	90	80	90		26図 36図58	無文土器	不整円形で底面はすり鉢状になっており壁は急激に立ち上がっている。口縁部を欠損する小型の深鉢(37図58)が土坑にはまるように正位で出土した。器壁には指頭痕が観察できる。またその下層より磨製石斧片が数点まとめて出土した。
52	I-13	95	80	35	藤式内	26図 31図9		楕円形でテラスを持ち、一段低くなった底面は南へ若干傾斜している。壁の立ち上がりは急である。51号土坑のすぐ北側に位置し、土坑にはまるように上部を欠いた土器(31図9)が正位で出土した。土庄による破損が著しい。4単位で区画され隆帯による釣針状のモチーフと逆U字状のモチーフが交互に配されている。中期中葉藤内式期に位置付けられる。
53	I-12	82	82	10		26図		円形で浅く、底面は平坦である。摩耗した土器片等が少量出土したが流れ込みであると思われる。
54	J-13	284	120	60		27図		不整形で底面は凹凸であり、壁は緩く立ち上がっている。遺物は上層で集中して出土したが、摩耗が著しく時期も中期全般にわたっていることから本土坑の年代を決定することは難しい。
55	G-13	60	45	35		26図	石皿1	円形で底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。拳大から人頭大の礫が数点まとめて出土した。
56	G-14	45	40	40		26図		円形ですり鉢状を呈する。土坑の上層より拳大の礫が数点まとめて出土した。
57	G-14	43	40	30		26図		円形で底面は平坦であり壁の立ち上がりは急である。土坑の上層より拳大の礫が数点まとめて出土した。
58	K-14	126	120	20		26図		円形で大きいが浅い。底面は平坦である。
59	H-11	53	50	10		26図	石皿1	円形で浅く底面は平坦である。人頭大の礫とともに石皿が底面直上より出土した。
60	G-15	37	35	10		26図	台石・石壺1	不整円形で浅く底面はややすく鉢状を呈する。
61	F-14	55	50	10		27図	磨石・石皿1	円形で浅く底面は平坦である。
62	F-14	60	55	28		27図	磨石1	不整形で底部が南東に長いすり鉢状を呈している。上層より拳大から人頭大の礫及び石器等がまとめて出土した。
63	F-14	75	75	30		27図		円形で底部は凹凸があり、壁は緩やかである。人頭大の礫が重なるように出土し、それに混じって摩耗の著しい無文の土器が数点出土した。
64	F-14	50	50	25		27図	磨石1	不整円形で底部は平坦であり壁の立ち上がりは緩やかである。確認面で遺物が出土したが摩耗が著しく、土器は無文のものがほとんどである。
65	H-14	90	90	50		28図	打斧1	不整円形でテラスを有し、南東の掘り込みはすり鉢状である。テラス部分より少量遺物の出土を見たが中期全般に亘っており流れ込んだものであろう。

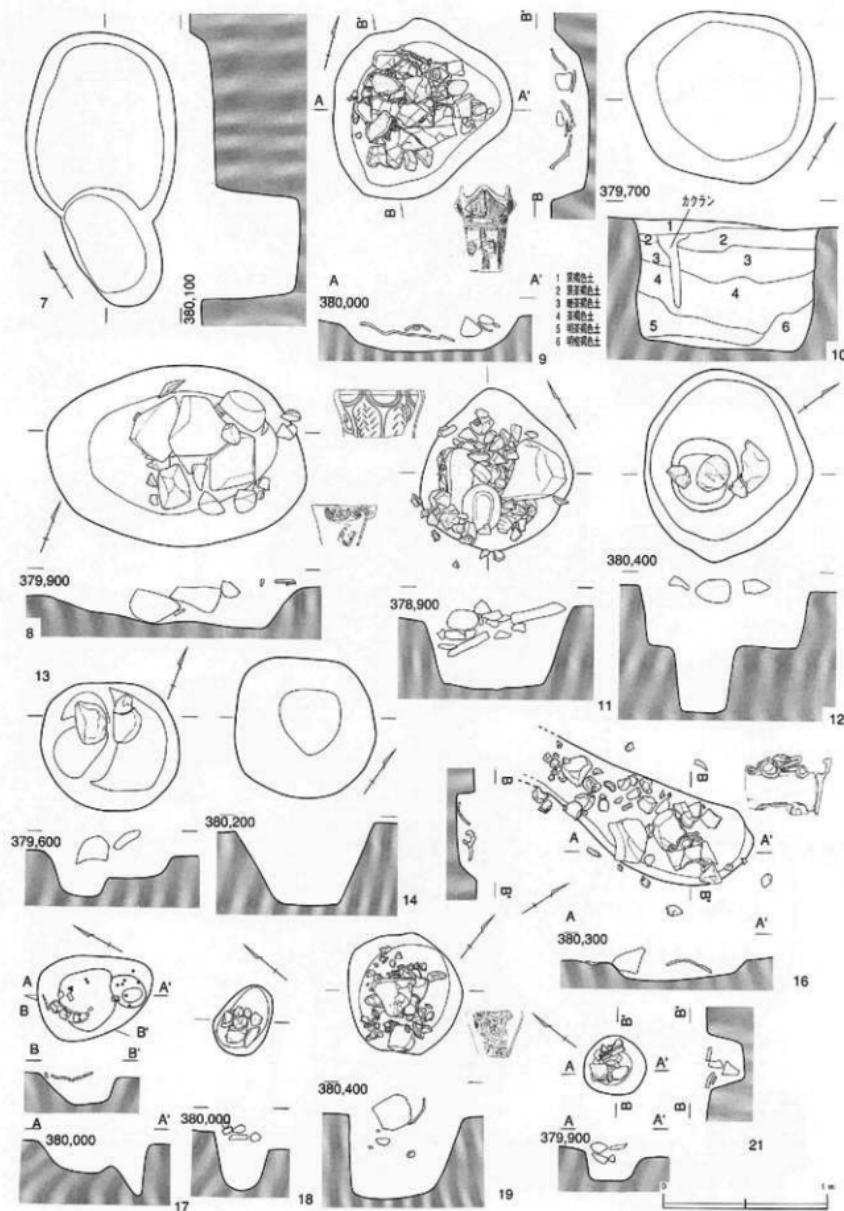
土坑番号	グリッド	サイズ			時 期	遺構/遺物の図版番号	土器以外の遺物	概 要	
		長径	短径	深さ					
66	K-13	310	125	65		28図	石鍤1 打斧5 粗匙1 磨石3	大型で東西に長く不整形である。底部は南側に傾斜しており凹凸が激しい。他の大型の土坑と同様に多数の土器片・石器等が出土したがその時期は中期初頭から後葉まで幅広く、流れ込んだものと思われ遺構の時期を決定できるものではない。	
67	K-14	70	60	40		28図	打斧1	不整円形で壁の立ち上がりはやや急である。底部には若干凹凸がある。	
68	F-15	40	35	15		27図 36図59		小型でやや楕円形である。底部は凹凸があり、壁の立ち上がりは緩い。遺物は拳大の礫が中心部に集中し、それに混じって土器片が出土した。	
69	F-15	75	70	50		28図		不整形で深く、底部は平坦であり壁の立ち上がりは急である。上層では大型の礫が隙間なく出土した。礫の中には使用痕のあるものも認められる。	
70	J-14	50		20	曾利I式	28図 32図10 36図60-64		不整形で浅く、壁に緩やかに立ち上がり底面は凹凸がある。押圧隆帯が施された深鉢の口縁部(32図10)が出土した。中期後葉曾利I式期に位置付けられる。	
71	H-14	55	50	33		28図		不整椭円形で鉢状であり、壁は所々凹凸がある。流れ込みと思われる遺物が若干出土した。	
72	F-15	50	50	20		28図		円形で壁は急に立ち上がり、底面は若干凹凸が見られる。出土した土器は無文で摩耗が著しい。	
73	F-13	138	115	25		28図	打斧1	隅丸長方形で浅く、底面は平坦である。5号住居跡の北側に重複して位置する。遺物は礫が多く、遺構の年代を決定するような遺物は認められなかつたため住居跡との新旧関係については明らかでない。	
74	F-13	90	70	30		28図	打斧1 石皿1	不整形で底面は凹凸である。北側で礫が重なるような状態で底面付近まで集中していた。	
75	G-13	95	90	25		28図	打斧1 磨石3	不整形で浅く、東側にテラスを有する。人頭大から拳大の礫が多数出土した。5号住居跡の東側に重複しているが土坑の時期を決定するような遺物の出土が認められないため住居との新旧関係については明らかではない。	
76	N-13	200	80	80		29図		不整形で壁の立ち上がりはかなり急である。底面は不整形である。遺物は摩耗した土器片等が出土したが遺構に伴っていないと思われる。	
77	E-12	305	170	100	曾利V式	29図 37図65	打斧2 磨斧1	大型で不整形である。壁の立ち上がりは若干緩やかであるが底面は凹凸が激しい。中層で広い範囲で焼土が約10cm程度堆積していた。また流れ込みが激しく、全層で中期全般の土器片が多数出土したが特に最も下層の底面直上より中期後葉曾利V式の土器片が出土したことから該期の遺構であると考えられる。従って本土坑は中期後葉曾利式期終末に廃絶され、	

土坑 番号	グリッド	サイズ			時 期	遺構/遺物 の図版番号	土器以外 の遺物	概 要
		長径	短径	深さ				
								それ以降埋没していく段階で火を用いた何らかの2次利用が成されたと考えられる。
78	F-10	110	100	30		29図	打斧・鎌1 磨石2 石皿・磨1	円形で浅く、底面は平坦である。拳大の礫、摩耗した土器片等が多数出土した。遺物は中期全般にわたっており流れ込んだものと思われる。
79	F-8	83	67	25		28図	打斧1	楕円形で底面はやや東側へ傾斜している。人頭大の礫が数点出土したのみである。
80	F-7	68	50	18		28図		不整形円形で壁は急に立ち上がっており、底面は平坦である。遺物の出土は認められなかった。
81	G-8	88	62	56		29図	磨石1	不整形で北側にテラスを有する。立ち上がりは急で底面は緩いすり鉢状である。人頭大の礫が重なるように出土したが遺物は認められなかった。
82	F-10	117	75	15		29図	打斧1 磨石1	楕円形で浅く、掘り込みは地形を利用して落ち込んでいる程度である。本土坑からは無文の浅鉢が出土したが摩耗しており時期は明らかではない。
83	F-10	92	75	40		29図 37図66	磨石1	楕円形で底面はすり鉢状である。中層から下層にかけて多量の炭化物が堆積していた。また胴下部に縄文を施した土器が出土したが摩耗が著しく、ほとんどは団化できなかった。
84	F-10	65	58	10		29図	磨斧1	浅く、楕円形で底面は平坦である。礫が数点出土したのみである。
85	F-9	120	90	20	井戸尻 式	29図 32図13	粗匙1	不整形で底面は若干凹凸がある。東側で出土した土器は土圧により潰されていたが、逆位で緩やかに立ち上がる壁面に沿うような状態で出土した。底部を欠損している。中期中葉井戸尻式期に位置付けられる。土器の中には粗匙が収められていた。
86	G-8	95	72	60		29図		楕円形で底面は不整形のすり鉢状である。遺物が出土したが団化には至らなかった。
87	G-9	78	64	25		29図		楕円形で底面は平坦であり、壁の立ち上がりは急である。遺物は摩耗した土器片のみである。
88	H-9	124	80	20		30図	打斧1 磨石1	不整楕円形で浅く、底面は東から西へ傾斜している。遺物は打斧、磨石等の石器が出土している。
89	F-9	60	60	30		29図	磨斧1	円形で底面は平坦であり壁は急に立ち上がっている。
90	H-10	152	120	30		30図	打斧・粗匙1 横刃1磨石2	不整楕円形で底面は平坦だが2か所に浅い掘り込みが見られる。
91	H-7	95	88	20		30図 37図67 68		円形で底面は若干凹凸があり、壁の立ち上がりは急である。人頭大の礫が重なって多数出土し、それに混じって若干の摩耗した土器片が出土した。
92	H-8	42	40	20		30図		円形で小型である。遺物は中期後葉曾利V式の土器片が一片出土した。
93	J-8	145	130	10		30図	打斧1 磨石2	大型で円形であるが浅い。遺物は礫及び土器片が出土した。

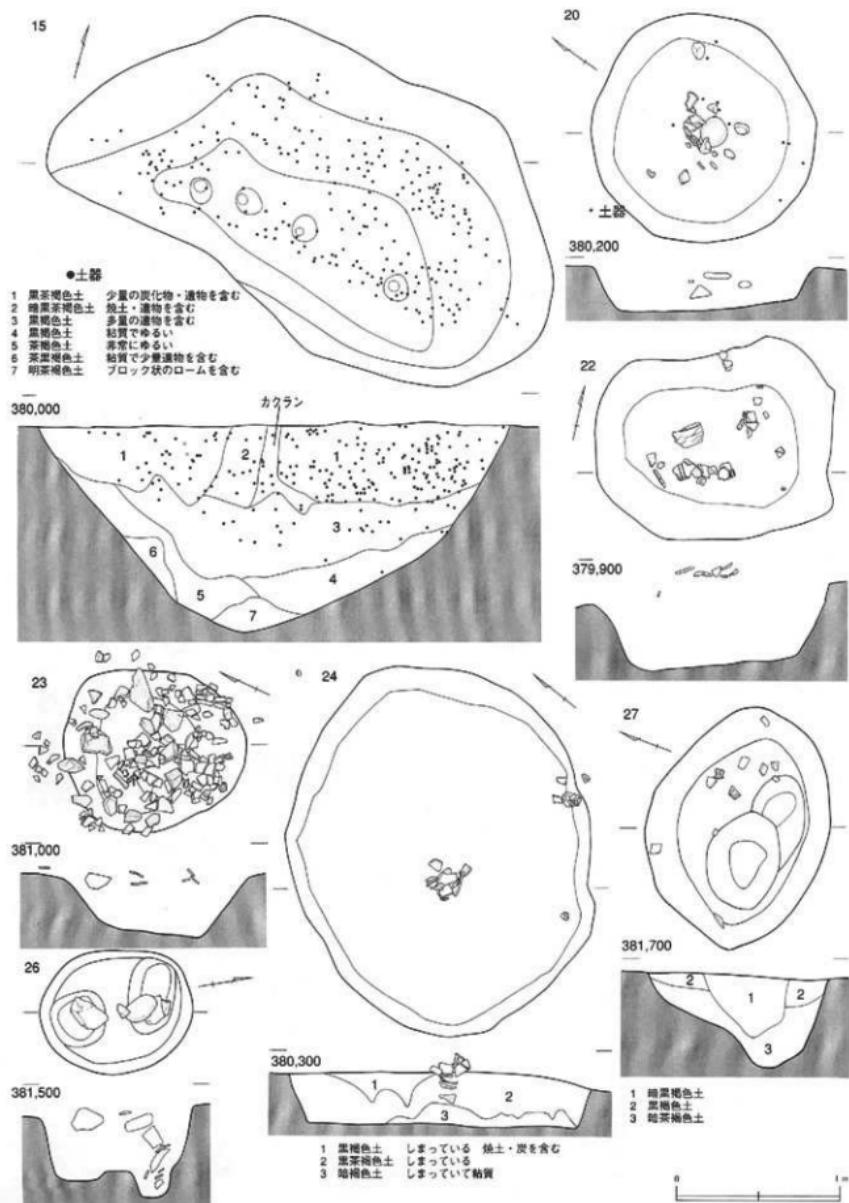
土坑 番号	グリッド	サイズ			時 期	遺構/遺物 の図版番号	土器以外 の遺物	概 要
		長径	短径	深さ				
94	J-11	150	70	62		30図		不整形で大型であり、所々凹凸しながら掘り込んでいる様が観察できる。他の大型土坑と同様に流れ込みと思われる中期全般の遺物が多量に出土したため本土坑の年代は不明である。
95	K-17	285	180	90		30図	打斧1 磨斧1	不整形で大型である。東壁は土坑の中腹から緩やかに立ち上がっており、底面はすり鉢状である。多量の流れ込みと思われる遺物が出土した。
96	D-3	50	40	20	井戸尻 式	30図 32図 11~12		楕円形で壁は比較的急に立ち上がっている。深鉢は口縁部は失われているが胴部から底部にかけてが正位で土坑にはまるようなかたちで出土した。上部は疊によって潰されている。
97	E-18	80	68	60		30図		楕円形で底面はほぼ平坦である。壁は急に立ち上がっているが、中腹にテラスが巡っている。
98	E-19	65	55	50		30図		円形で深く、壁の立ち上がりは急である。疊と摩耗した土器片が若干出土した。
99	G-2	40	40	35	五領ヶ 台式	30図 32図 14~15 37図 69~70		1号住居跡と4号住居跡のほぼ中間で、台地の縁辺部に位置する。不整形で小型であり、底面は平坦であるが、壁の立ち上がりは急である。2個体の土器が重なって出土した。32図14は沈線により退化したY字状のモチーフが口縁部から胴部まで連続する。15はやはり沈線でY字状のモチーフが施されるが、一部角押文も認められる。中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期も終末のものであると思われる。
100	G-4	40	40	40	落沢式	30図 32図 16~20		小型で円形であり、すり鉢状を呈する。壁の立ち上がりは急である。土器片が重なって2個体出土した。32図16は口縁部で隆線による楕円区画文を施しており、隆帯に角押文を沿わせる。32図17は口縁部と底部の径にあまり差が見られないタイプの深鉢であると思われる。楕円区画文を何段にも配し隆線に角押文を沿わせるが、中心に三角押文を波状に配する。中期中葉落沢式期に比定できる。



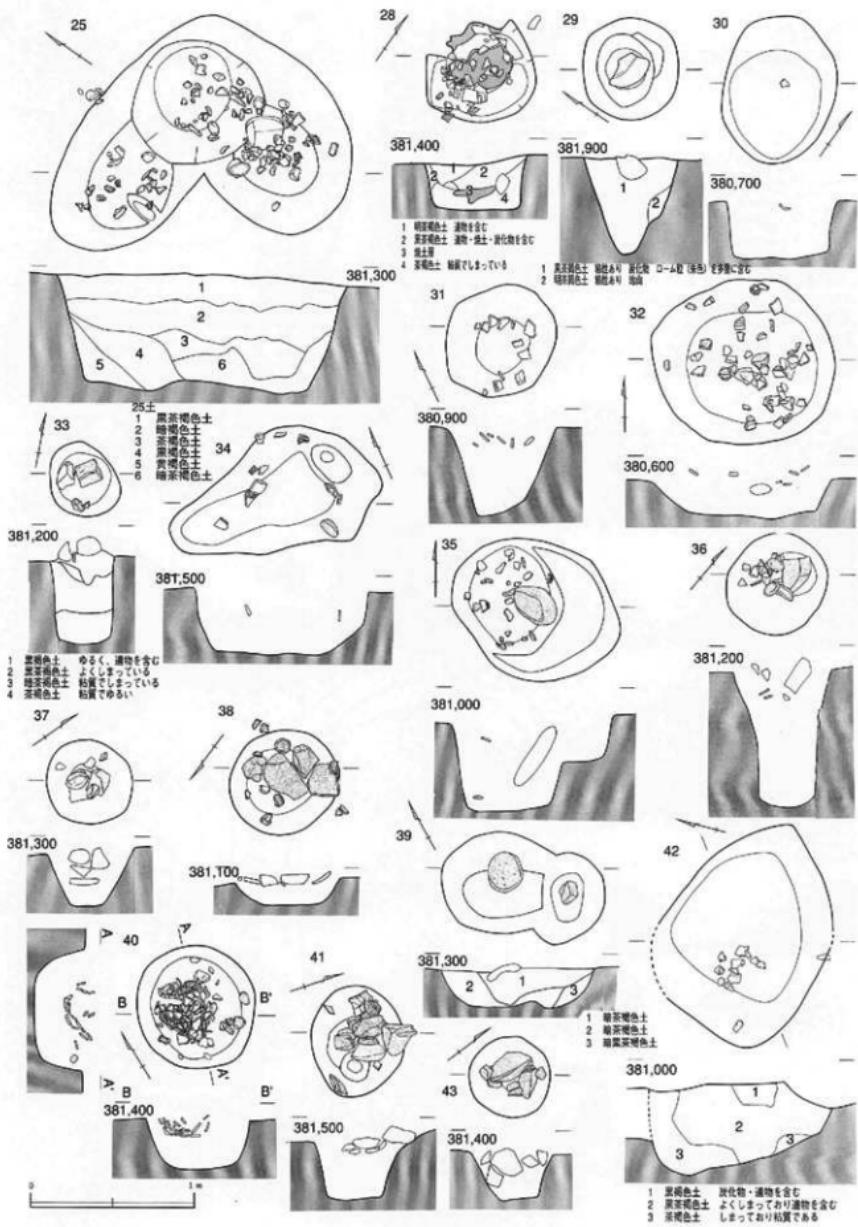
第22図 土坑実測図 (1)



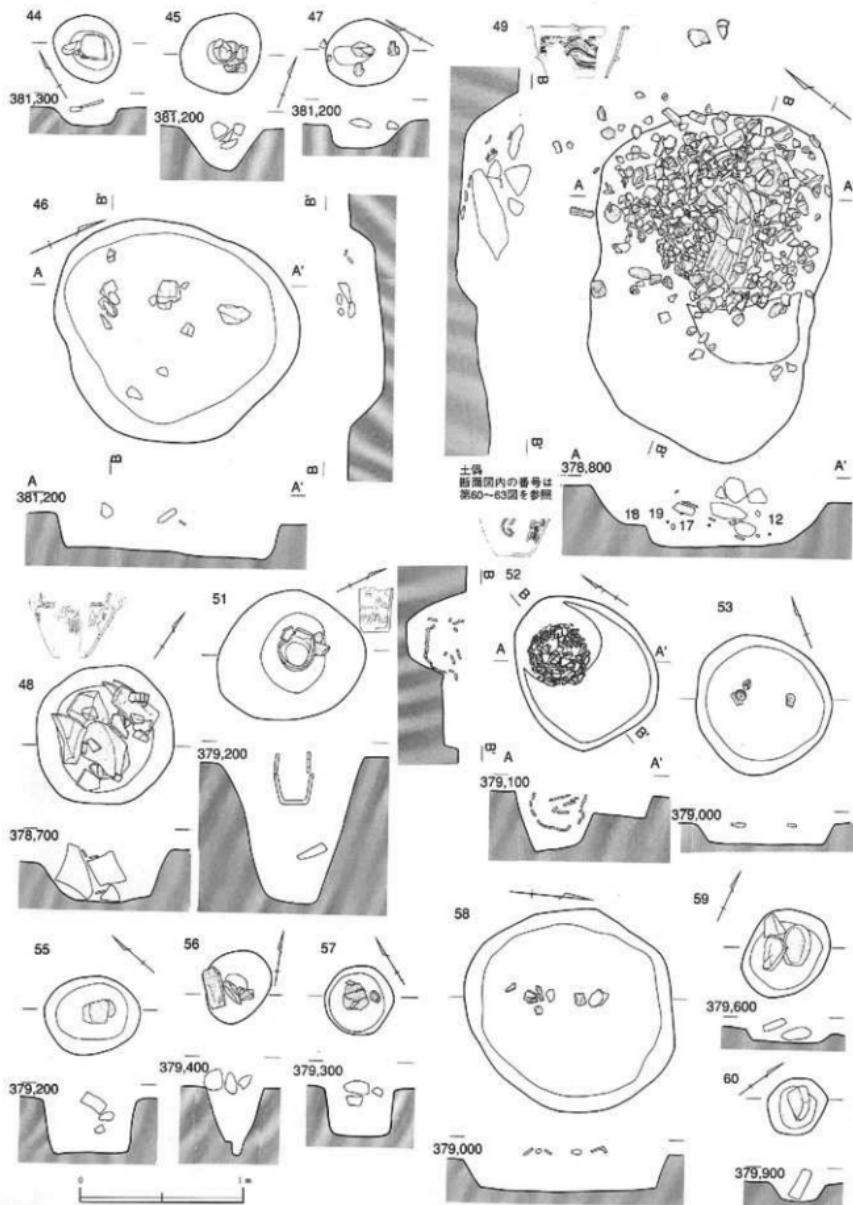
第23図 土坑実測図 (2)



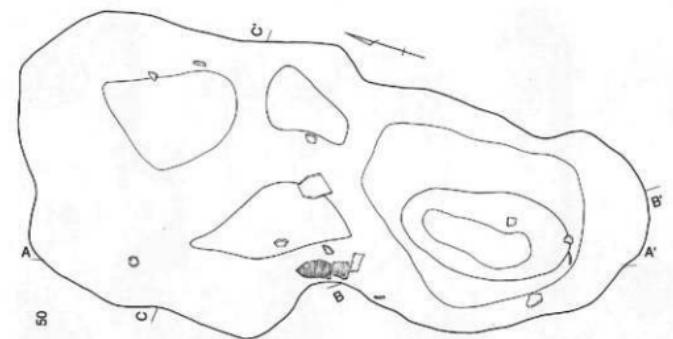
第24図 土坑実測図 (3)



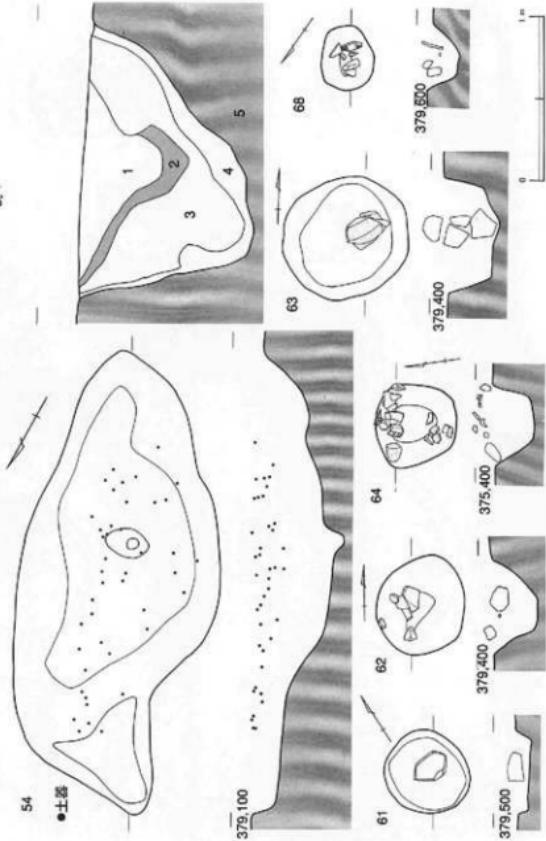
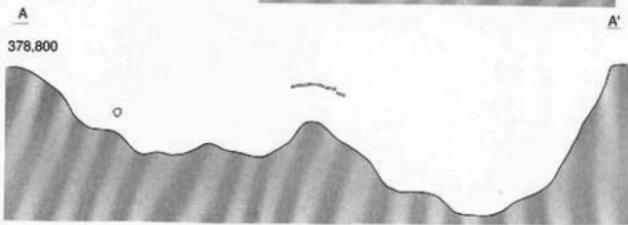
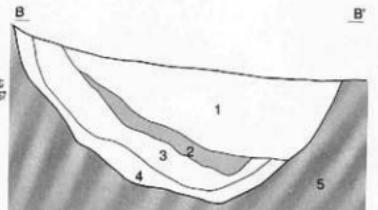
第25図 土坑実測図 (4)



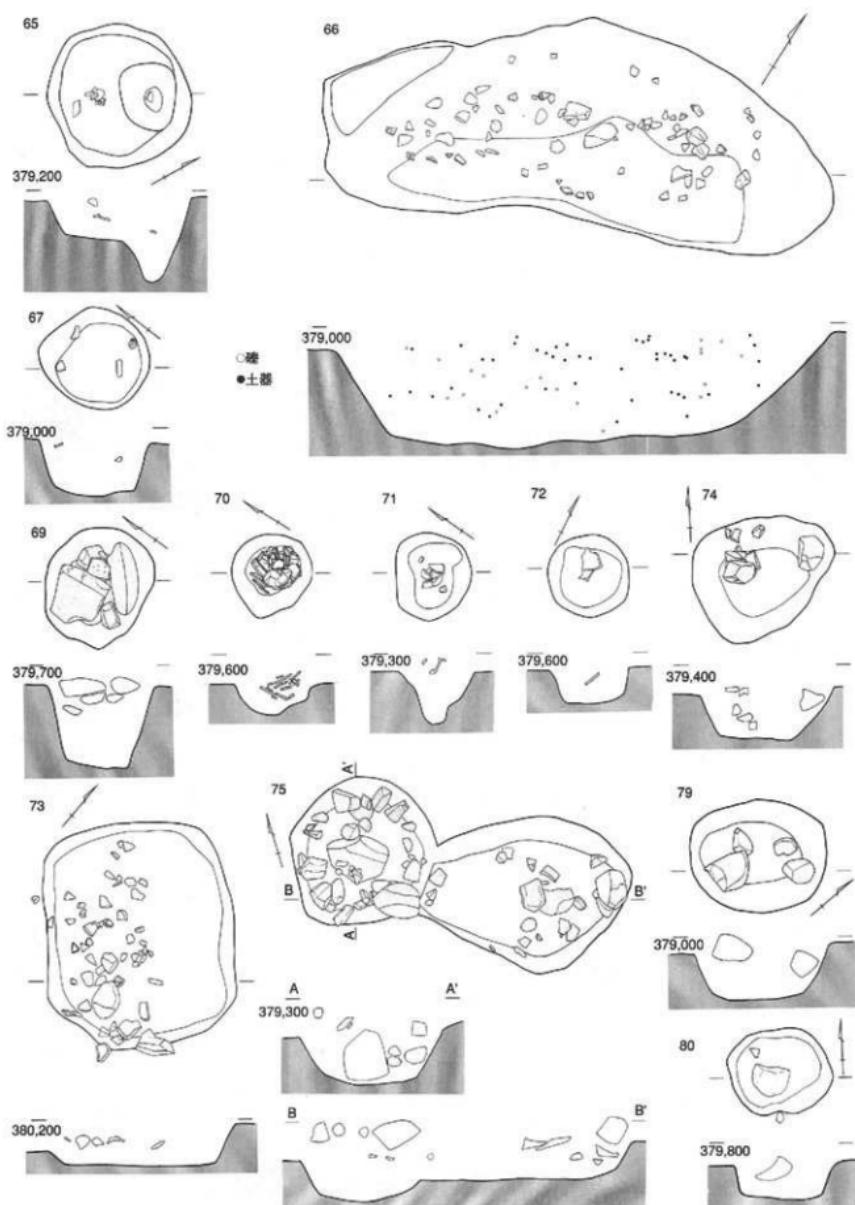
第26図 土坑実測図 (5)



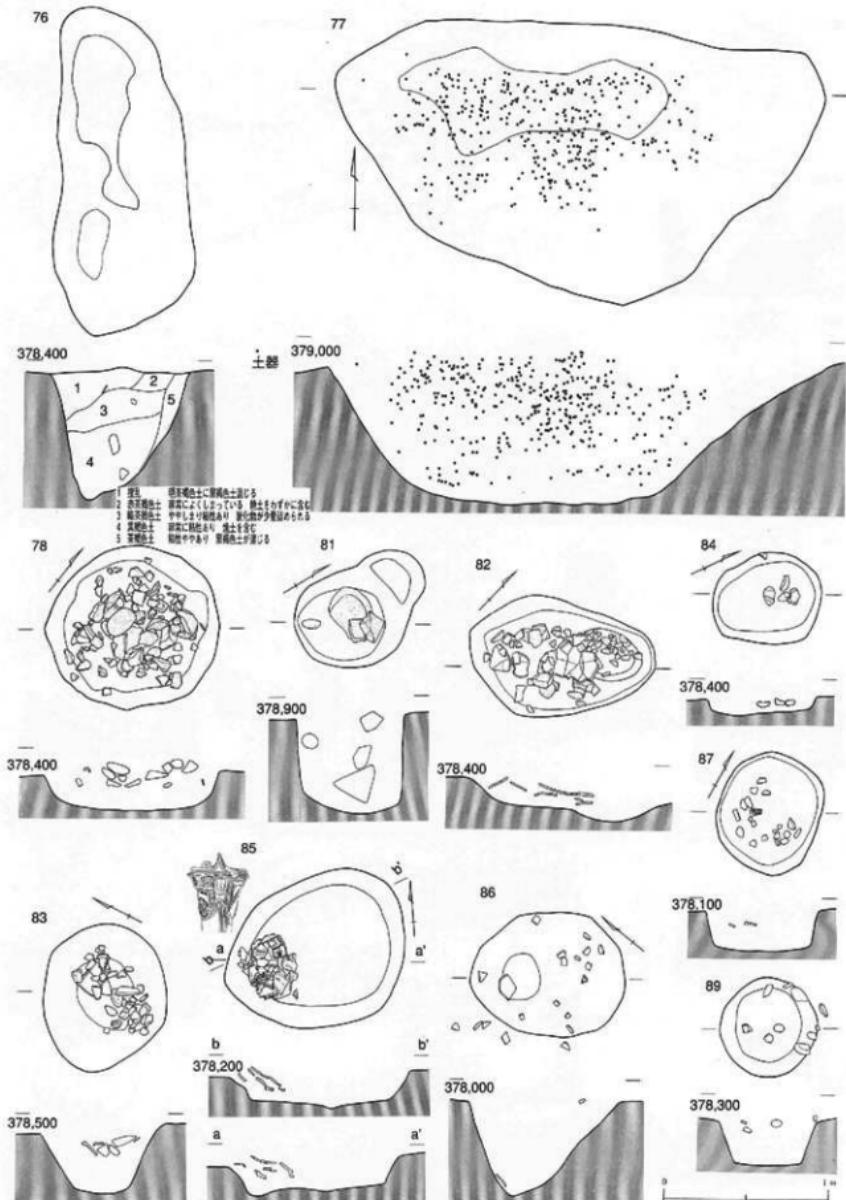
- 1 黄褐色土 粘質でしまっている 黒色・赤色粘子を含む
- 2 赤褐色土 深土
- 3 離葉層土 粘性がなく砂質でやわらかい 黑色・赤色粘子を含む
・根・根子・土壌片を多量に含む 土・第 図44-57
の土部はこの層から出土
- 4 黄褐色土 粘質で固くしまっている
- 5 黄褐色土 粘質で強くしあっているが硬化していない



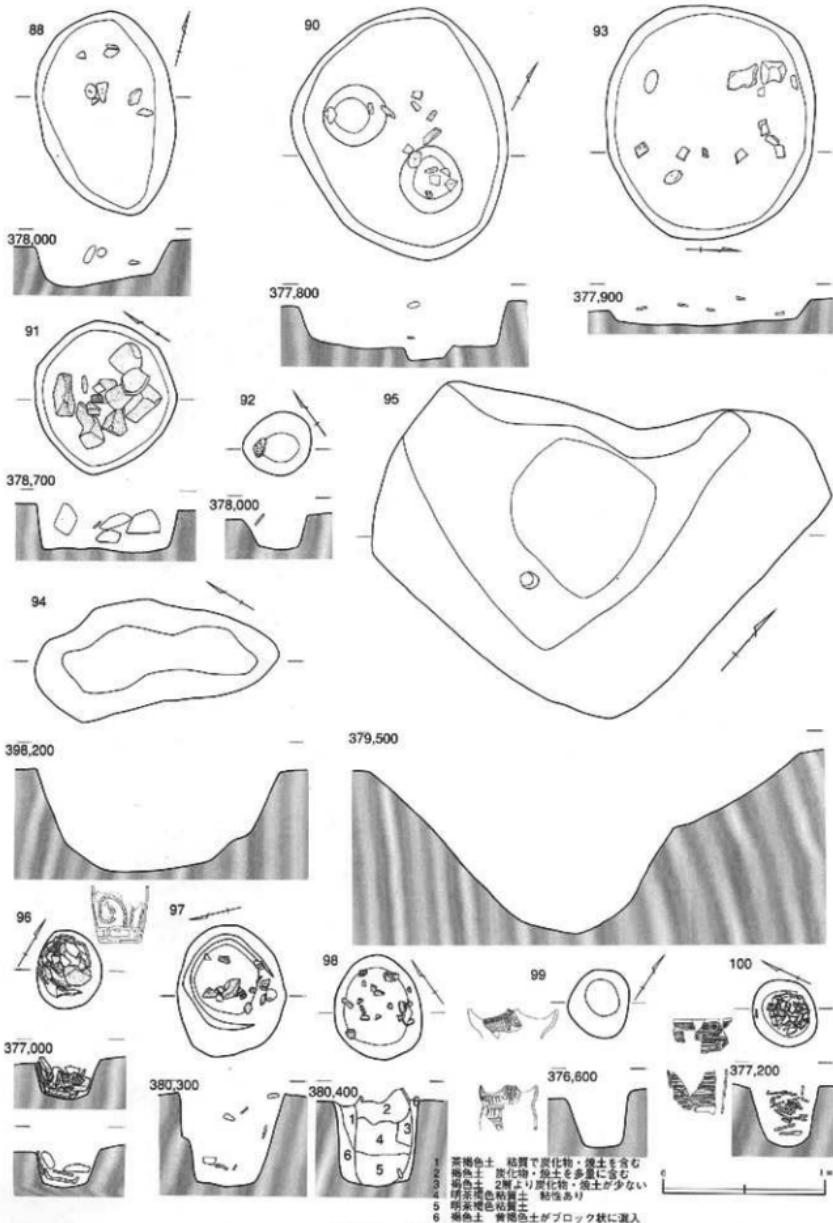
第27回 土坑実測図 (6)



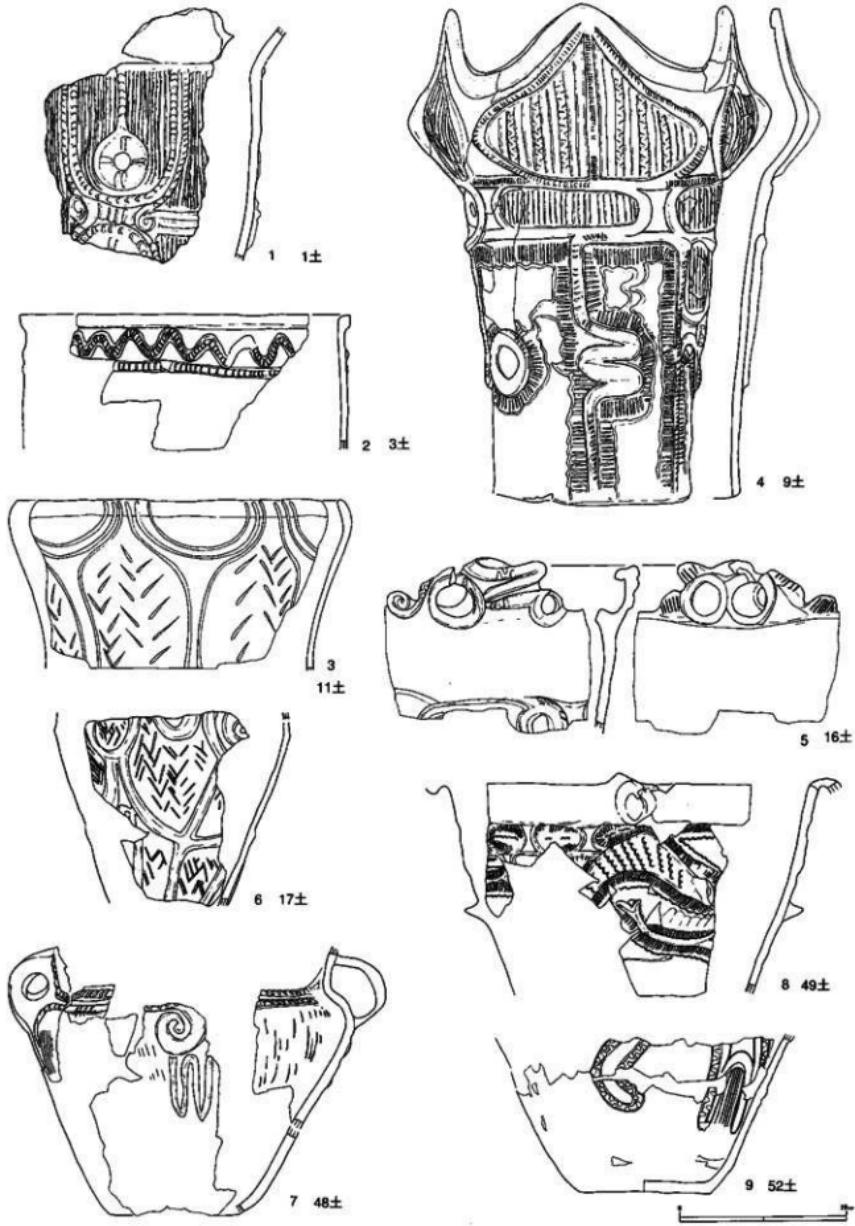
第28図 土坑実測図 (7)



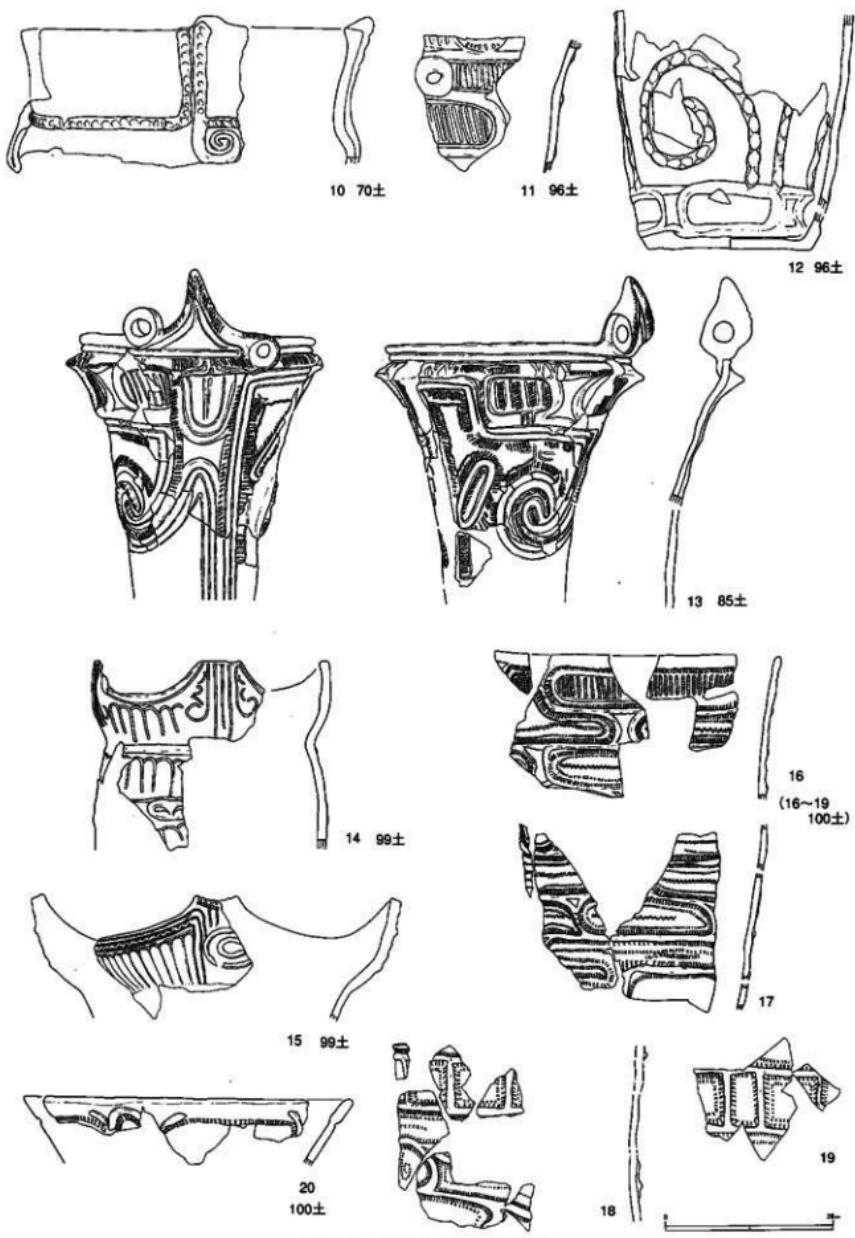
第29図 土坑実測図 (8)



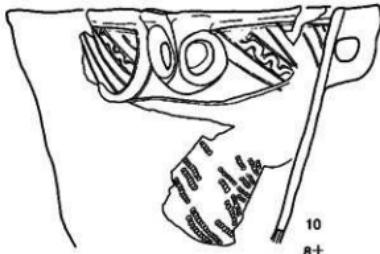
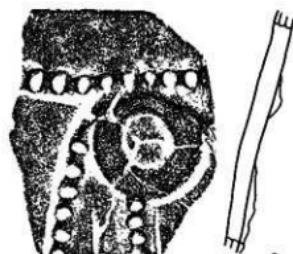
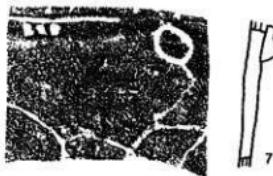
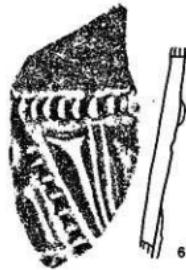
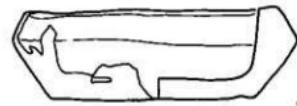
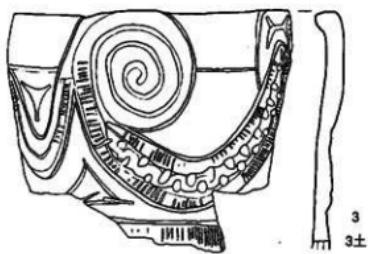
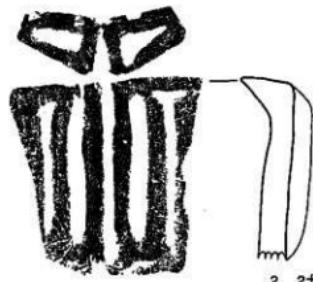
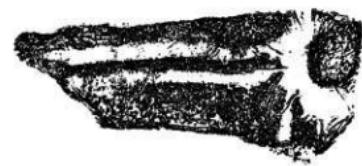
第30図 土坑実測図(9)



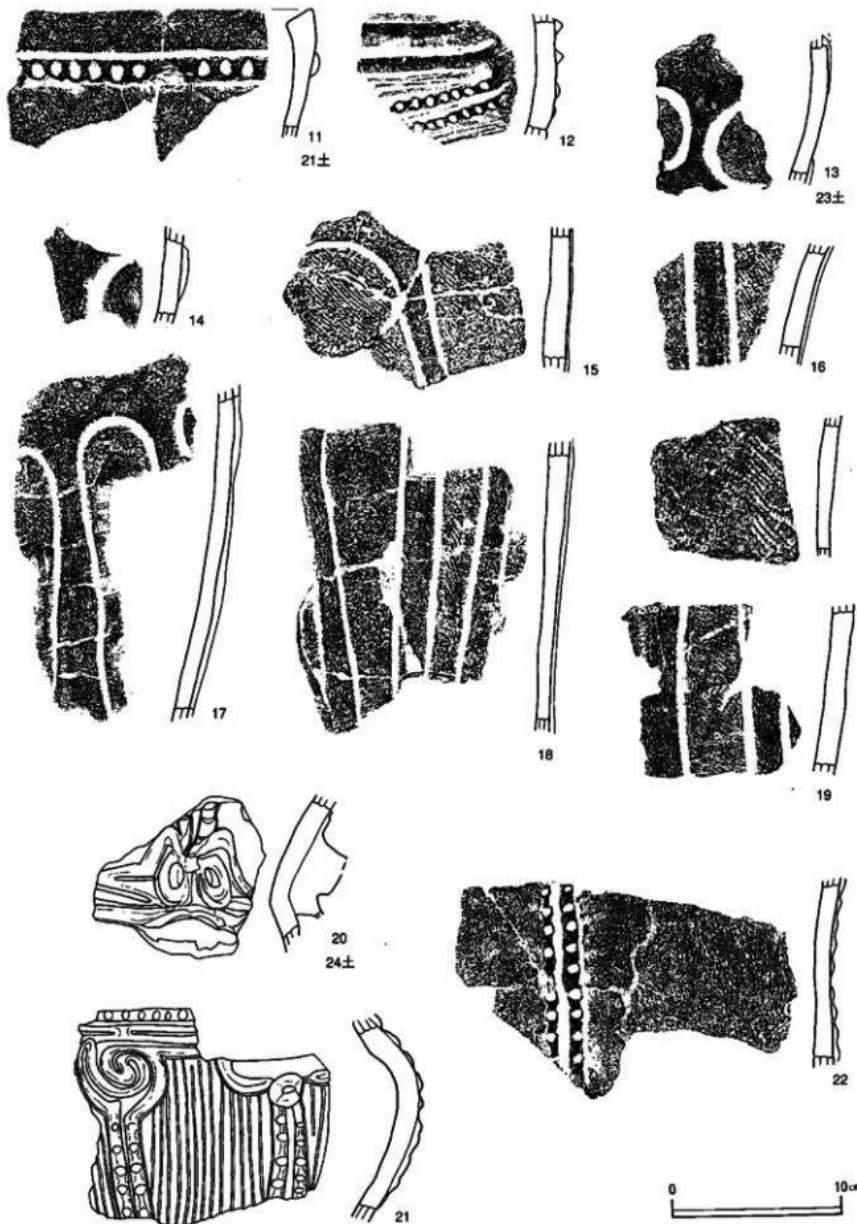
第31図 土坑出土土器実測図（1）



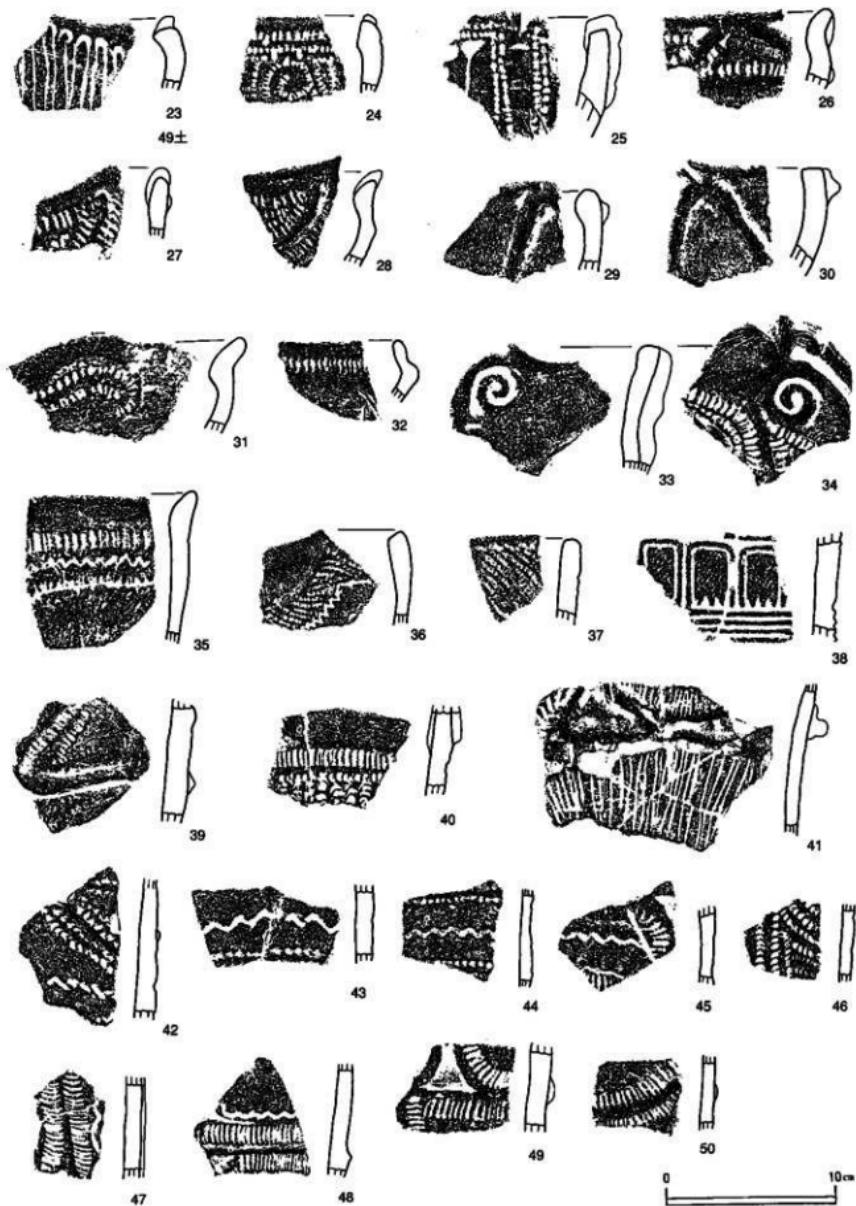
第32図 土坑出土土器実測図(2)



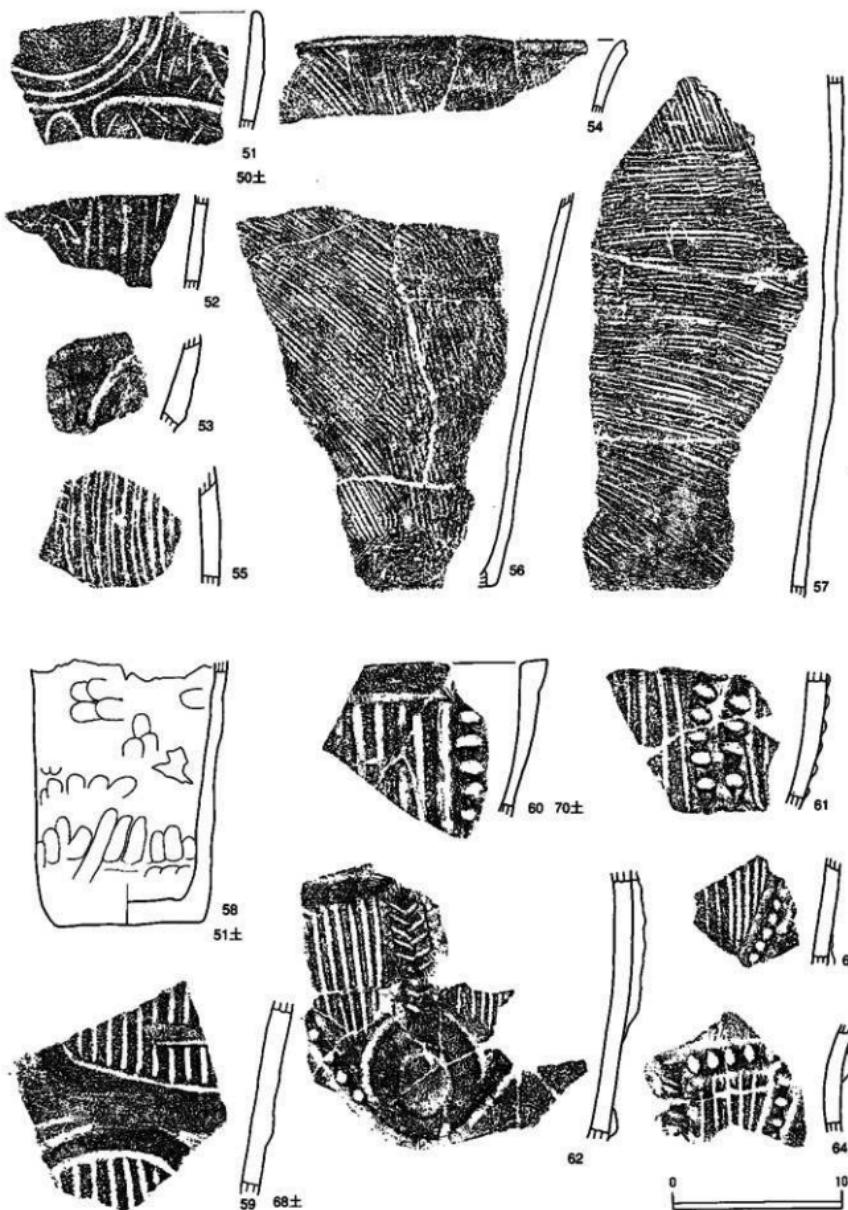
第33図 土坑出土土器拓影図(1)



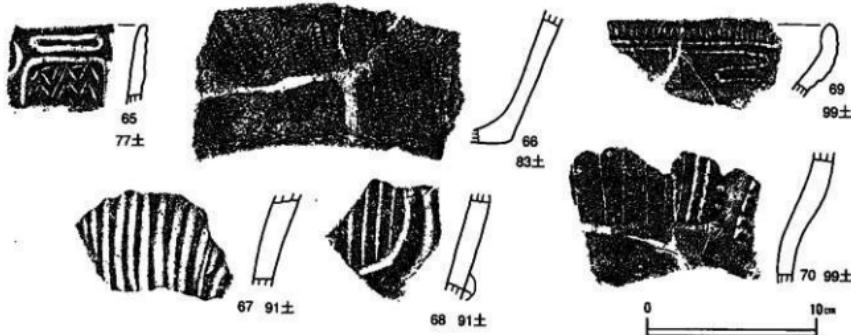
第34図 土坑出土土器拓影図（2）



第35圖 土坑出土土器拓影圖 (3)



第36図 土坑出土土器拓影図 (4)



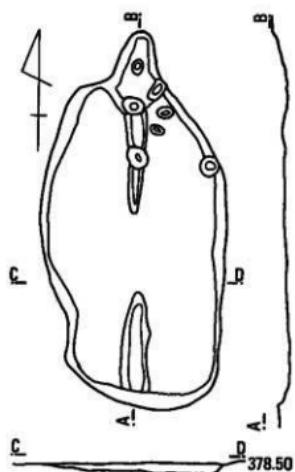
第37図 土坑出土土器拓影図(5)

第3節 炭焼窯

炭焼窯(K-12グリッド)(第38図)

位置 本遺構は調査区のほぼ中央部で斜面のなだらかな部分に単独で立地する。

形態・規模 本遺構は東西に長い椭円形を呈しており、北側には煙噴き出し口と思われる突出した張り出し部が見られる。主軸を南北にとり、主軸長径2m96cm、短径1m47cmを測る。遺構確認面からの深さは東壁で10cm程度で、壁の立ち上がりはやや急である。中央部には主軸に沿って溝状のくぼみを伴っている。くぼみは幅が11cm~22cmで、深さは4~10cmを測る。覆土には多量の炭と若干の木炭片を含んでおり、底面のとくに煙噴き出し口付近には焼土が集中していた。



遺物 遺物は木炭以外には全く出土しなかった。¹⁴Cの年代測定からは990±90といった結果が提出されており、平安時代に相当するものと考えられる。山梨県における平安時代鍛冶遺構の様相については保坂康夫氏によって、北巨摩地方に集中していることが既に指摘されており¹⁵、また、野代幸和氏によって北巨摩郡の牧経営に伴う鍛冶等の工業用及び家庭用炭の需要の増加に伴い、この地域で広く木炭生産が行われた可能性も¹⁶提示されている。本遺構も例外にもれず北巨摩郡に立地しており、また平安時代の甲斐国三御牧の一つ穂坂牧比定地に近接していることから、炭の需要の増加に伴って設備されたものであると考えられる。

註

- (1) 保坂康夫「山梨県下の平安時代鍛冶遺構の様相」『山梨懇考古学協会誌』第5号 山梨県考古学協会 1992
- (2) 野代幸和『丘の公園第7遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第92集 山梨県教育委員会 1994



第38図 炭焼窯

第4節 石 器

今回の調査で、本遺跡から出土した石器の製品出土総数は1662点であり、その内訳はナイフ形石器1点(0.1%)、石鎌60点(3.6%)、石匙4点(0.2%)、スクレイパー2点(0.1%)、石錐2点(0.1%)、釣針形石器1点(0.1%)、磨製石斧49点(3.0%)、打製石斧794点(47.8%)、粗製石匙18点(1.1%)、横刃形石器49点(2.9%)、磨石類551点(33.2%)、石皿90点(5.4%)、台石5点(0.3%)、多孔石20点(1.2%)、礫器6点(0.4%)、石錘4点(0.2%)、垂飾2点(0.1%)、石棒4点(0.2%)である。剝片・碎片などを含めると数千点に及ぶ。掲載の数量的制約があるので、定型化した石器についてのみ各器種ごとの形態などを報告することとし、各遺構から出土した石器数は第表を参照されたい。なお、黒曜石の剝片・碎片は4,253点、重量にして5,496.9g出土している。

ナイフ形石器（第39図1）

今回の調査で旧石器時代のものと思われるナイフ形石器が1点出土している。縦長剝片の背面の二側縁に調整加工が施してあり、腹面側にも基部から両側縁下半にかけて調整加工が施されている。石材は黒曜石である。最大長4.10cm・最大幅1.35cm・最大厚0.68cm・重量2.2gである。

石 鎌（第40図1～60）

石鎌の出土総数は未製品を含めて60点であり、すべて図示した。石材は1のチャート以外はすべて黒曜石であり、黒曜石の利用率が極めて高い。その中で、茎部の有無・基部形態・側縁部形態についてそれぞれ分類した。

茎部について、有るもの1点（第40図51）、無いもの53点（同図1～50・54・57・59）、不明なもの6点（同図52・53・55・56・58・60）である。不明なものも、おそらく無茎であると思われる。

基部形態について分類すると以下のようになる。

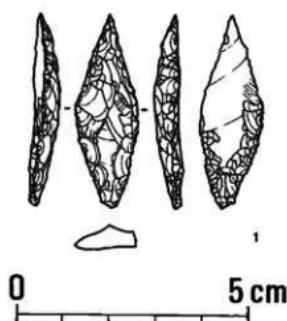
I類 回基のもの

I a類 扱りが深いもの	28点	46.7%	(同図10～26・33・37・38・45・50・54～59)
I b類 扱りが浅いもの	29点	48.3%	(同図1～9・27～32・34～36・39～44・46～49・60)
II類 平基のもの	1点	1.7%	(同図51)
III類 不明のもの	2点	3.3%	(同図52・53)

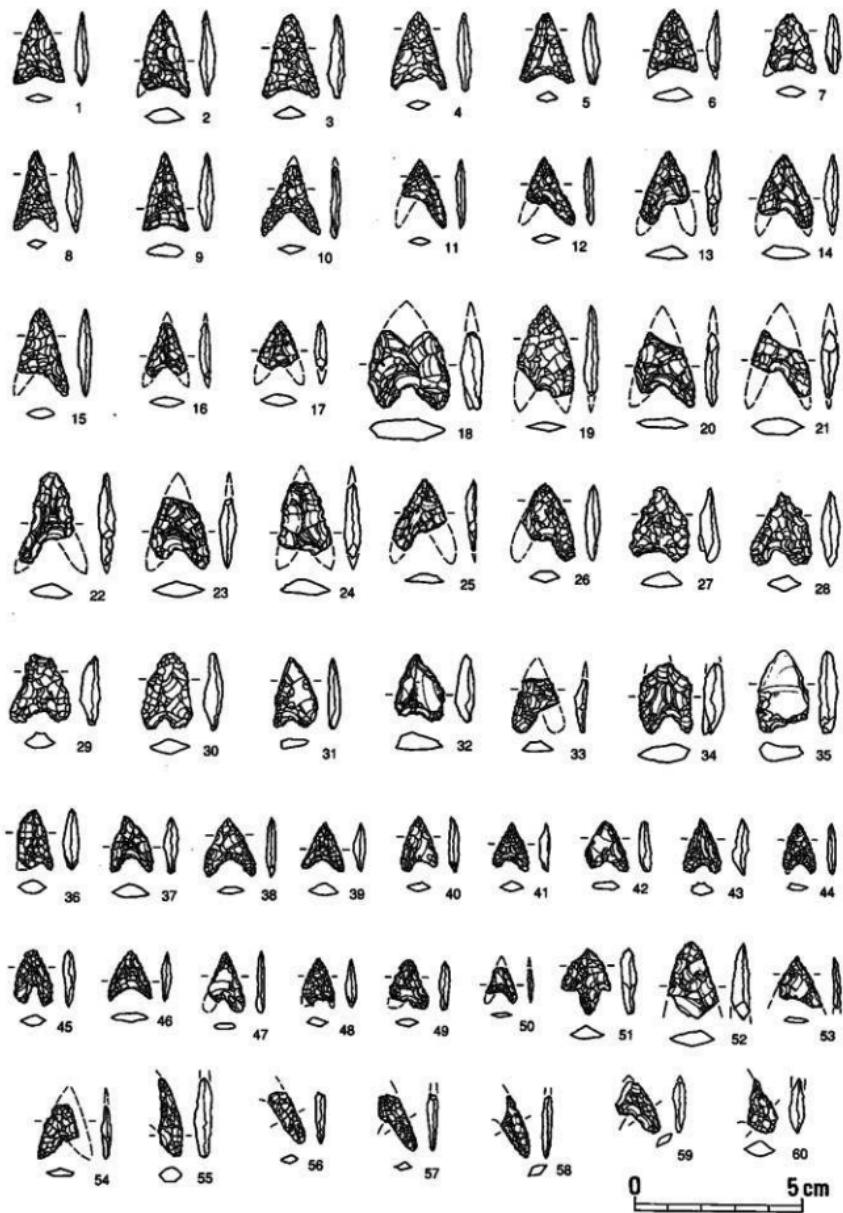
数量的には、平基が1点、不明が2点以外は全部回基である。その回基の中でも、扱りの深さで2つに分けられるが、I a類（深いもの）・I b類（浅いもの）はほぼ同数出土している。また、側縁部形態を外湾状のもの・直線状のもの・内湾状のものの3つに分けると、I a類について

外湾状12点(20.7%、同図11・14・18・19・21・25・26・37・45・54・55・59)、直線状13点(22.4%、同図13・15～17・20・23・24・33・38・50・56～58)、内湾状3点(5.2%、同図10・12・22)、I b類について外湾状14点(24.1%、同図1・6・7・27・28・30～32・34～36・44・46・48)、直線状13点(22.4%、同図2～5・8・9・39～43・47・60)、内湾状2点(3.5%、同図29・49)、II類について外湾状1点(1.7%、同図51)である。I a類・I b類でも、外湾状・直線状・内湾状の点数はほとんど同じで、その大半が外湾状のものと直線状のものである。側縁部形態は直線状と少し外湾する形態が一般的であったと思われる。

破損状態は完形22点(36.7%)、先端部欠損3点(5.0%)、脚部欠損19点(31.6%)、先端部と脚部欠損8点(13.3%)、脚部破片6点(10.0%)、先端部破片1点(1.7%)、未製品1点(1.7%)である。完形の中では長さが約1.5cm前後の小型のものが多く、大きいものほど欠損している割合が高い。先端部と脚部では、脚部のほうが欠損率が高い。



第39図 ナイフ形石器



第40図 石 器

石匙 (第41図1~4)

ここでは黒曜石・チャート製の細かい調整のある石匙をあつかい、粗製の石匙は後述する。出土数は4点であり、すべて図示した。1は縦型、2・3は斜型、4は横型であり、1・3・4は黒曜石、2はチャートである。2はつまみ部が欠損しており、3はつまみ部と刃部の一部が欠けている。

スクレイバー (第41図5・6)

2点出土している。5は小型で円形をしている。6は上部が欠損していて全体の形態は不明だが、おそらく三角形に近い形になると思われるが、欠損した部分につまみ部があり石匙になる可能性も考えられる。両者とも黒曜石製である。

石錐 (第41図7・8)

2点出土している。7はつまみ部がなく棒状であり、8はつまみが一部欠損しているがつまみ部を有するものである。どちらも石材は黒曜石である。

釣針形石器 (第41図9)

形態が釣針に類似している石器が1点出土している。軸から先端にいたるまで細かい調整を施し釣針のように整形している。先端部とは反対の張り出しているところに少し切れ込みが入っており、もし、そこが切り取られていたならば、より釣針に近くなる。あぐのような部分は見受けられない。黒曜石製である。

磨製石斧 (第41図10~12、第42図1~12)

磨製石斧は49点出土している。その内15点を図示した。その内、小型磨製石斧が3点出土している (第41図10~12)。いづれも刃部破片であり、全体の形態は不明である。

本遺跡出土の磨製石斧は、欠損率が非常に高い。完形は2点 (4.1%) だけであり、刃部欠損5点 (10.2%)、基部欠損4点 (8.2%)、刃部と基部の欠損4点 (8.2%)、刃部の破片13点 (26.5%)、基部の破片10点 (20.4%)、脣部の破片10点 (20.4%)、横半分を欠損しているもの1点 (2.0%) と、その95%以上欠損している。その中で、平面形態が分かるもの22点について分類すると、乳棒状のもの19点 (第42図1・2・4・6・7)、定角状のもの3点 (同図3・5) である。そのほとんどが乳棒状であり、定角状のものでも、5は少し丸みを帯びているので明確に定角状とは言いにくく、はっきり定角状といえるのは2つだけである。刃部の形態が確認できるもの20点はすべて円刃である。

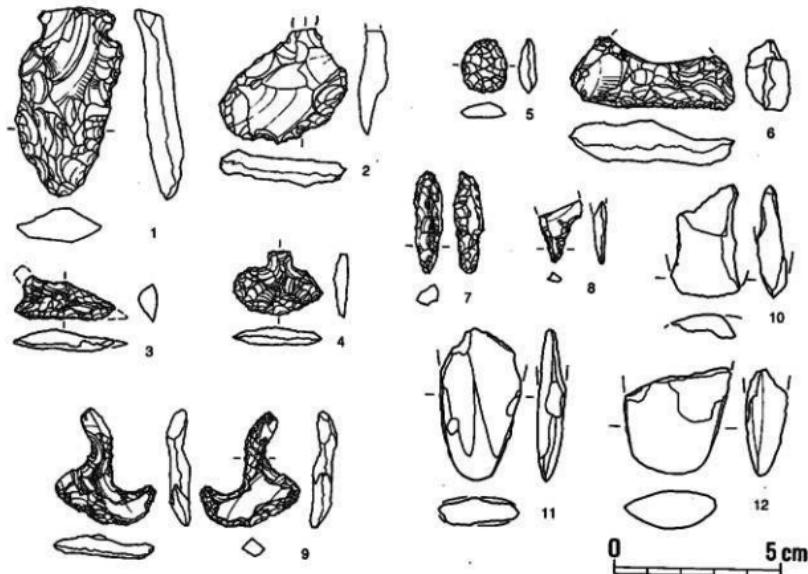
石材は小型磨製石斧を含め、緑色片岩26点 (53.1%)、凝灰岩9点 (18.4%)、砂岩10点 (20.4%)、流紋岩1点 (2.0%)、蛇紋岩1点 (2.0%)、安山岩1点 (2.0%)、ホルンフェルス1点 (2.0%) である。

打製石斧 (第43~44・45~46・47~48・49図1~78)

打製石斧は794点出土しており、今回の調査で出土した石器の中で最も数多く出土した。その内78点を図示した。平面形態の想定できる786点を、従来打製石斧の分類で用いられる「短冊形」・「撥形」・「分銅形」という三大別をもとに以下のように分類した。なお、本遺跡から分銅形は出土しておらず、それを省いて分類してある。

I類 側縁形態がほぼ平行なもの	308点	39.2%
(第43~49図1・2・4・5・8・10・17~19・61~66・68~72・76・77)		
II類 側縁形態が外側にふくらむもの	104点	13.2%
(同図3・6・7・9・11~16・20~22・25~30・45・47~49・67)		
III類 側縁形態がハの字状に開くもの	336点	42.8%
(同図23・24・31・32・34・36~43・46・50・51・73~75)		
IV類 側縁形態が若干屈折あるいは内湾状を呈し、刃部に最大幅がくるもの	38点	4.8%
(同図33・35・44・52~60・78)		

上記のI類・II類がほぼ短冊形にあたり、III類・IV類がほぼ撥形にあたる。III類が一番多いが、I類も同じぐらい多い。I類とIII類の側縁形態は直線状を呈し、ハの字に広がるか平行になるかの違いだけなので、III類



第41図 石匙・スクレイパー他

になるかⅠ類になるかは、打製石斧の素材となる剥片の側縁形態によって決まるのであろう。

また、刃部形態の分かれるもの291点を、円刃・斜刃・平刃に分けると、円刃154点(52.9%)、斜刃70点(24.1%)、平刃67点(23.0%)となる。

破損状態については、完形170点(21.4%)、刃部が欠損するもの264点(33.2%)、基部が欠損するもの93点(11.7%)、刃部と基部が欠損するもの86点(10.8%)、刃部の破片10点(1.3%)、基部の破片157点(19.8%)、胴部の破片12点(1.5%)、横が半分欠損するもの2点(0.3%)である。やはり、その80%弱が欠損品であり、欠損率はかなり高い。

石材は、ホルンフェルス476点(60.0%)、砂岩140点(17.6%)、頁岩52点(6.5%)、安山岩50点(6.3%)、凝灰岩39点(4.9%)、片岩30点(3.8%)、粘板岩7点(0.9%)である。

粗製石匙(第50図1~13、第51図14~18)

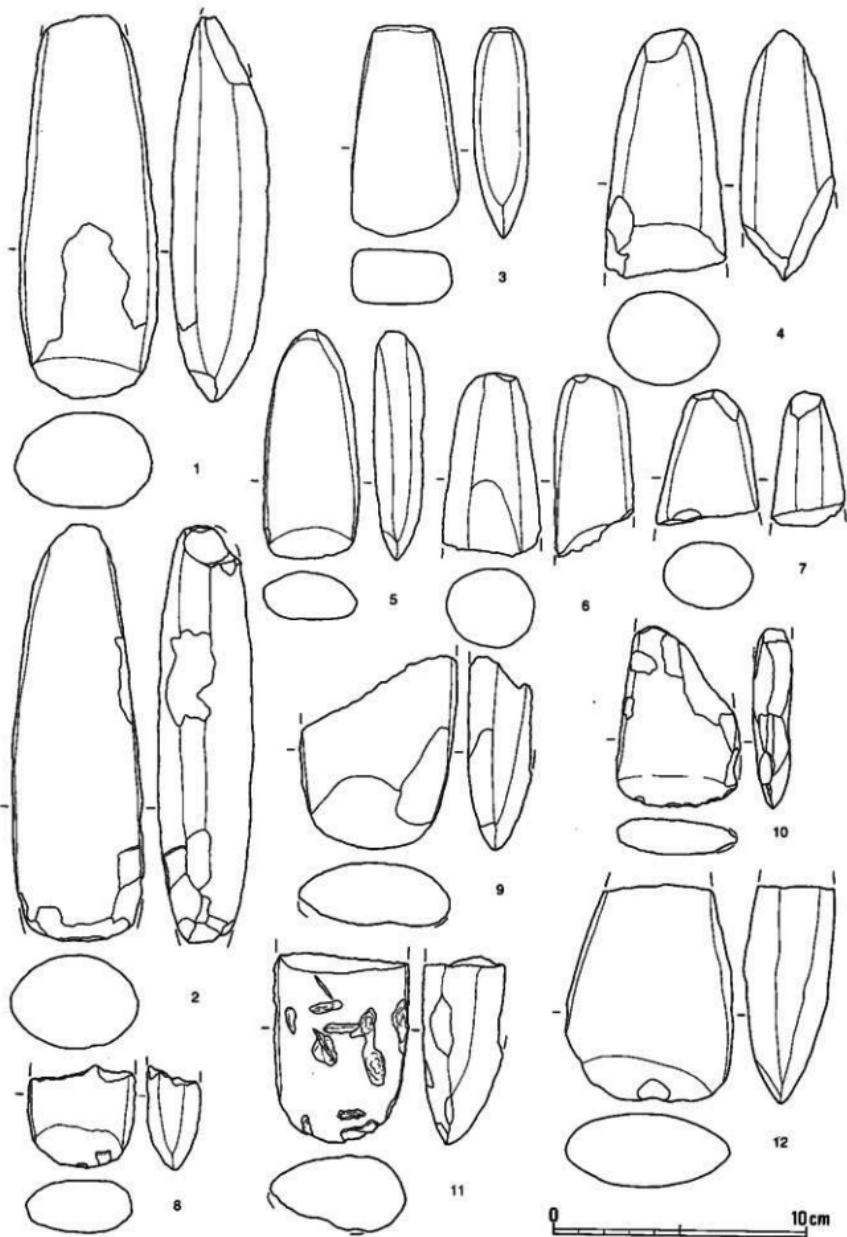
先述した黒曜石・チャート製の石匙と比べ調整が粗い石匙を粗製石匙としてあつかい、出土数18点をすべて図示した。つまみ部と刃部の位置関係と、胴部形態により次のように分類した。

I類 刃部に対してつまみ部が直行するもの、いわゆる横形のもの

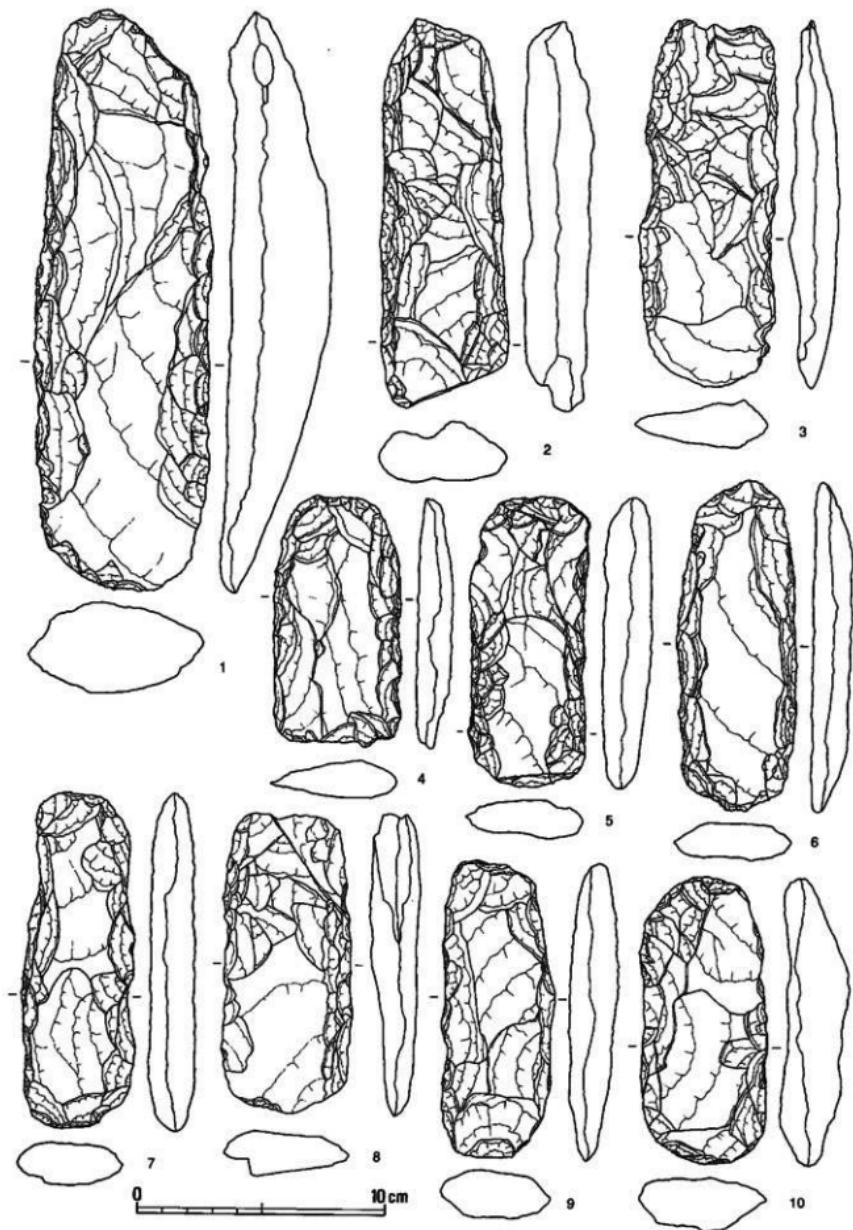
I a類 脇部形態が三角形を呈するもの	1点	5.6%	(第50図1)
I b類 脇部形態が四角形を呈するもの	4点	22.2%	(同図2・4・7・12)
I c類 脇部形態が台形を呈するもの	3点	16.6%	(同図3・5・6)
I d類 脇部形態が半円形を呈するもの	3点	16.6%	(同図8~10)
I e類 脇部形態が菱形を呈するもの	1点	5.6%	(同図11)

II類 刃部に対してつまみ部が斜行するもの、いわゆる斜形のもの

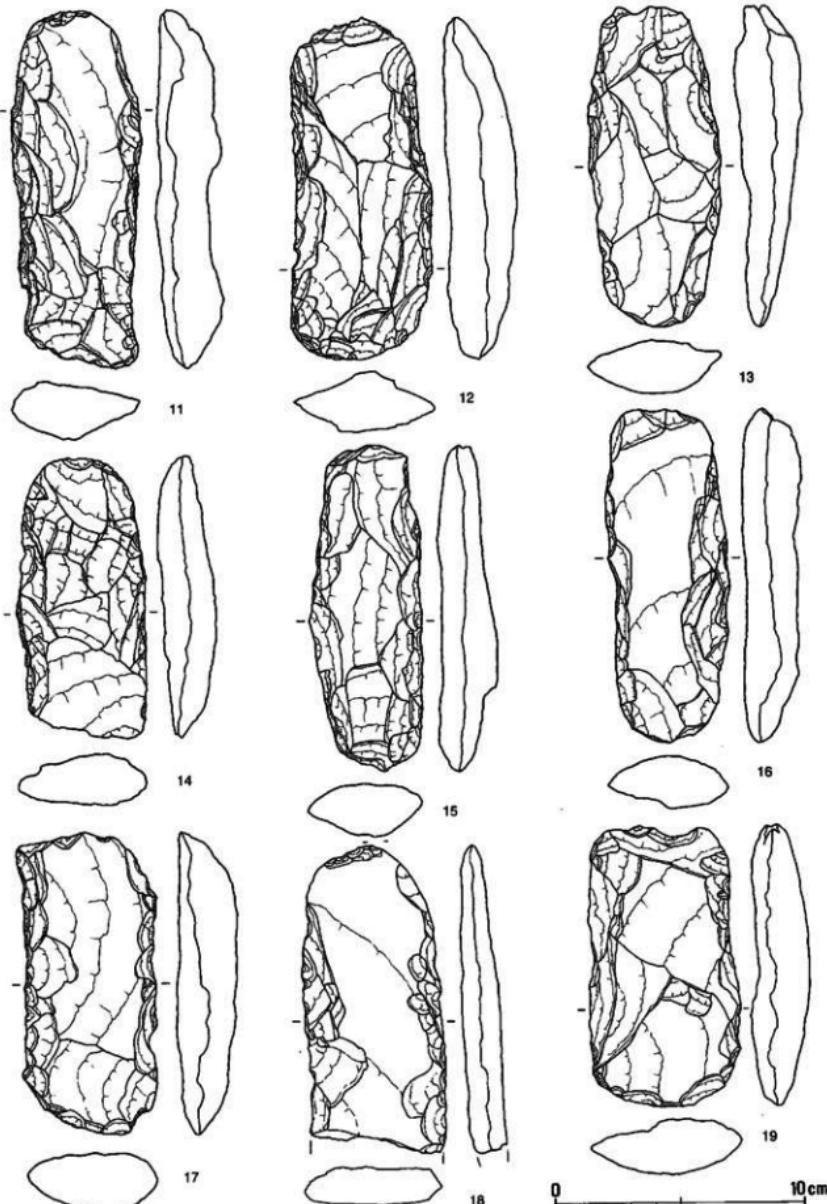
II a類 脇部形態が三角形を呈するもの	3点	16.6%	(第51点14・16・18)
II b類 脇部形態が四角形を呈するもの	1点	5.6%	(第50図13)



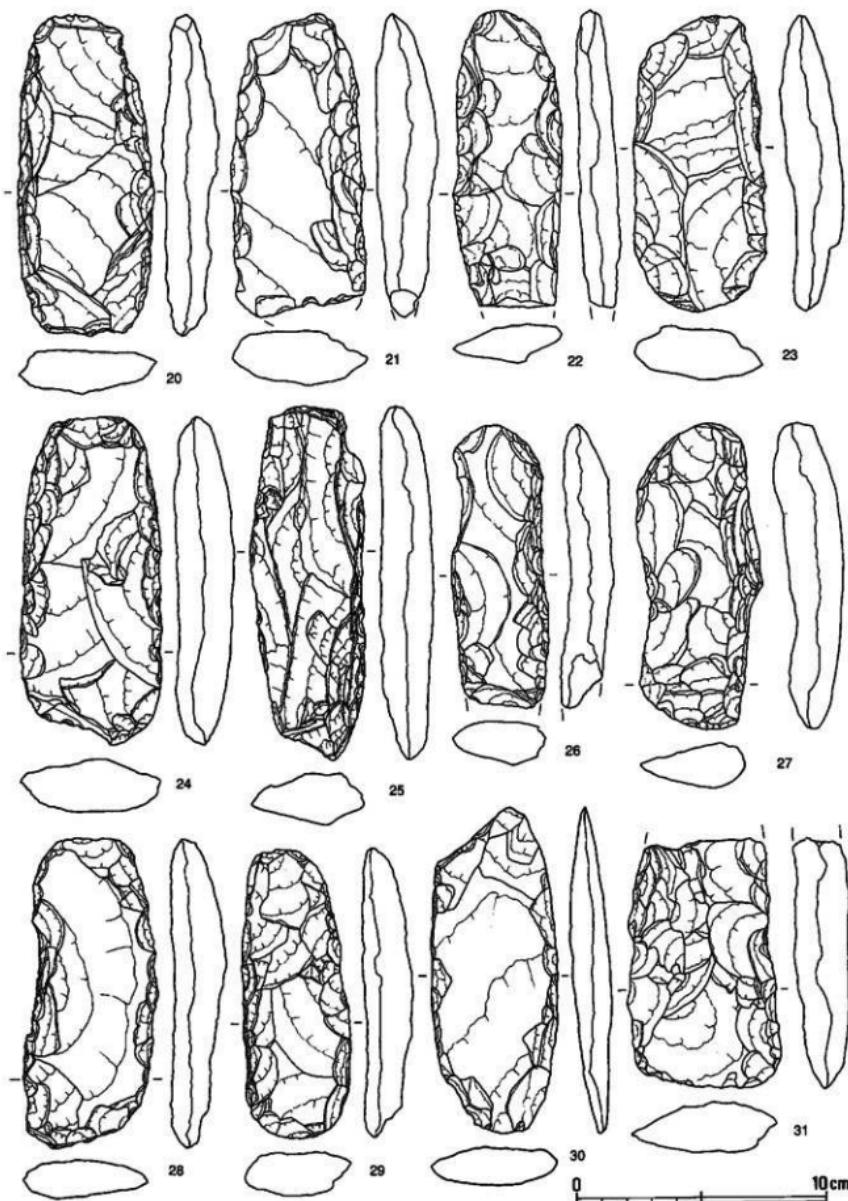
第42図 磨製石斧



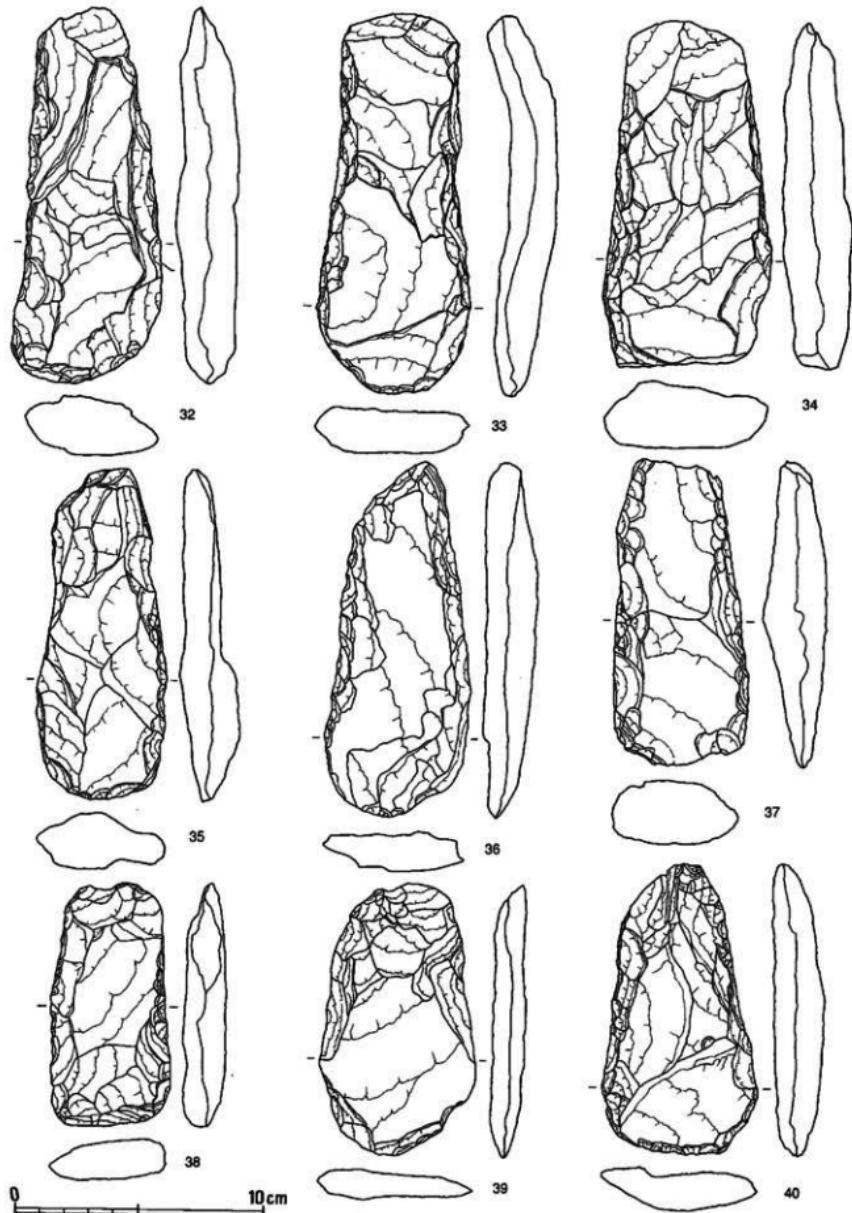
第43圖 打製石斧 (1)



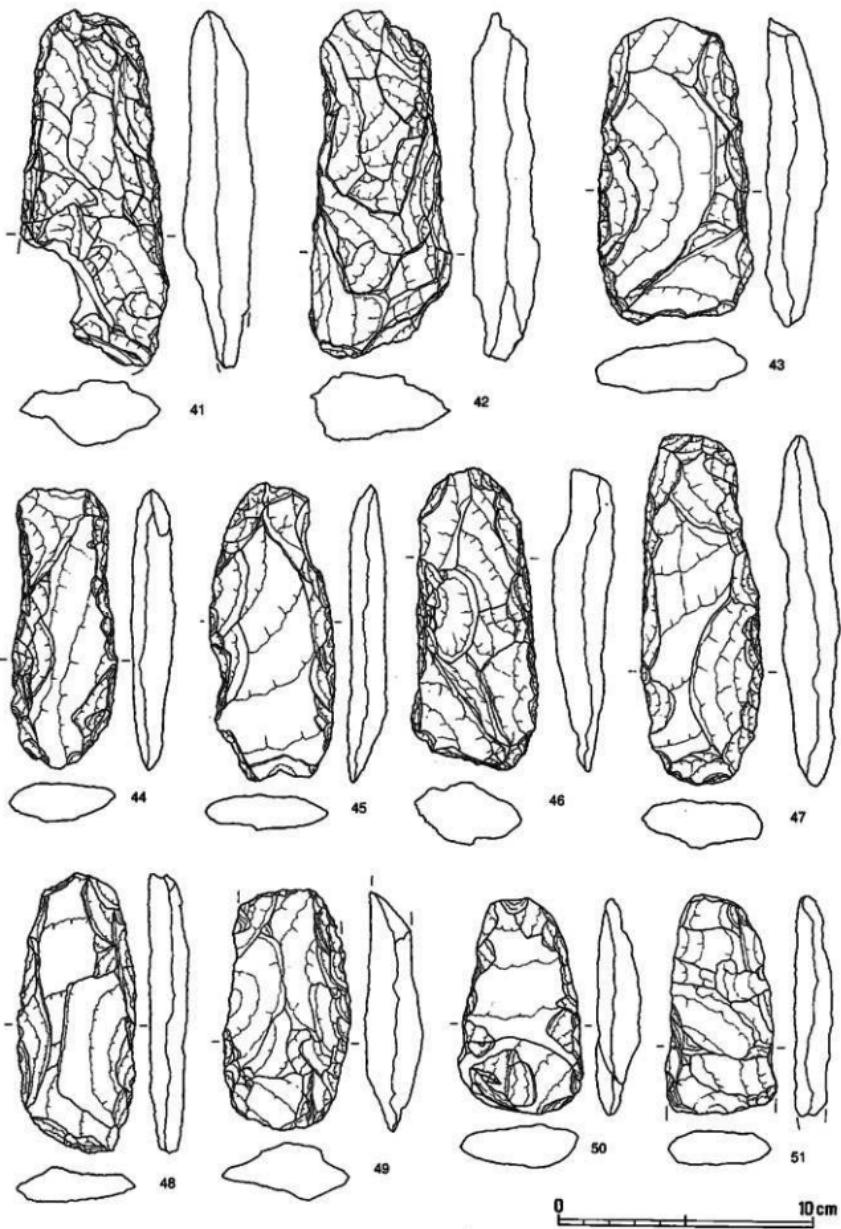
第44図 打製石斧 (2)



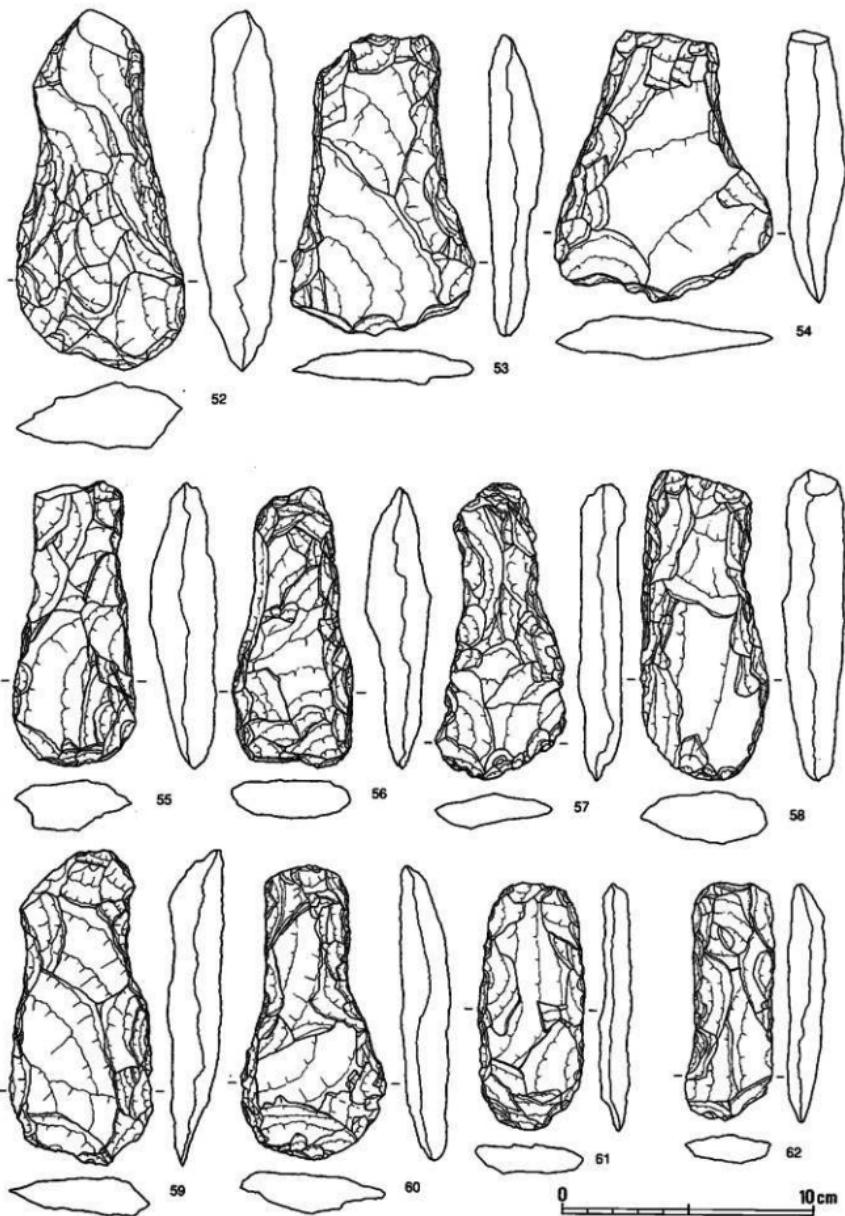
第45図 打製石斧 (3)



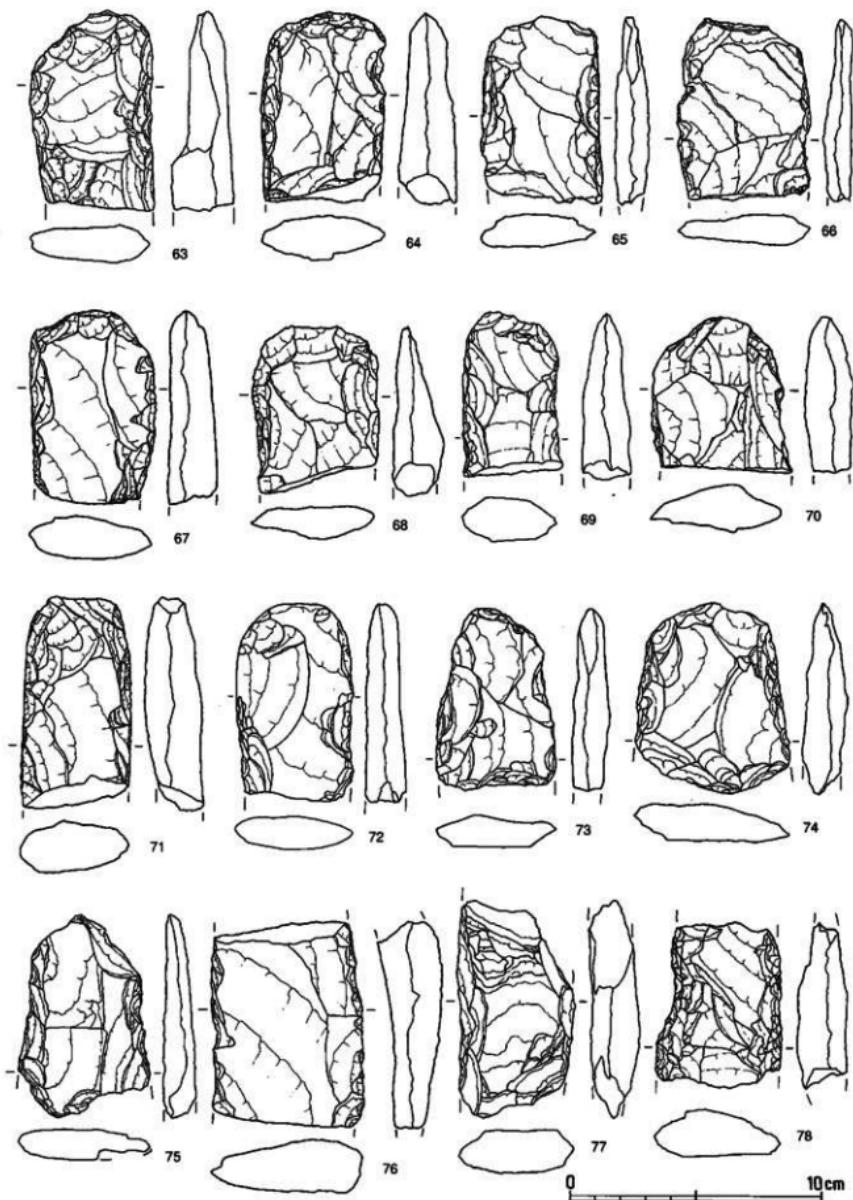
第46図 打製石斧 (4)



第47図 打製石斧 (5)



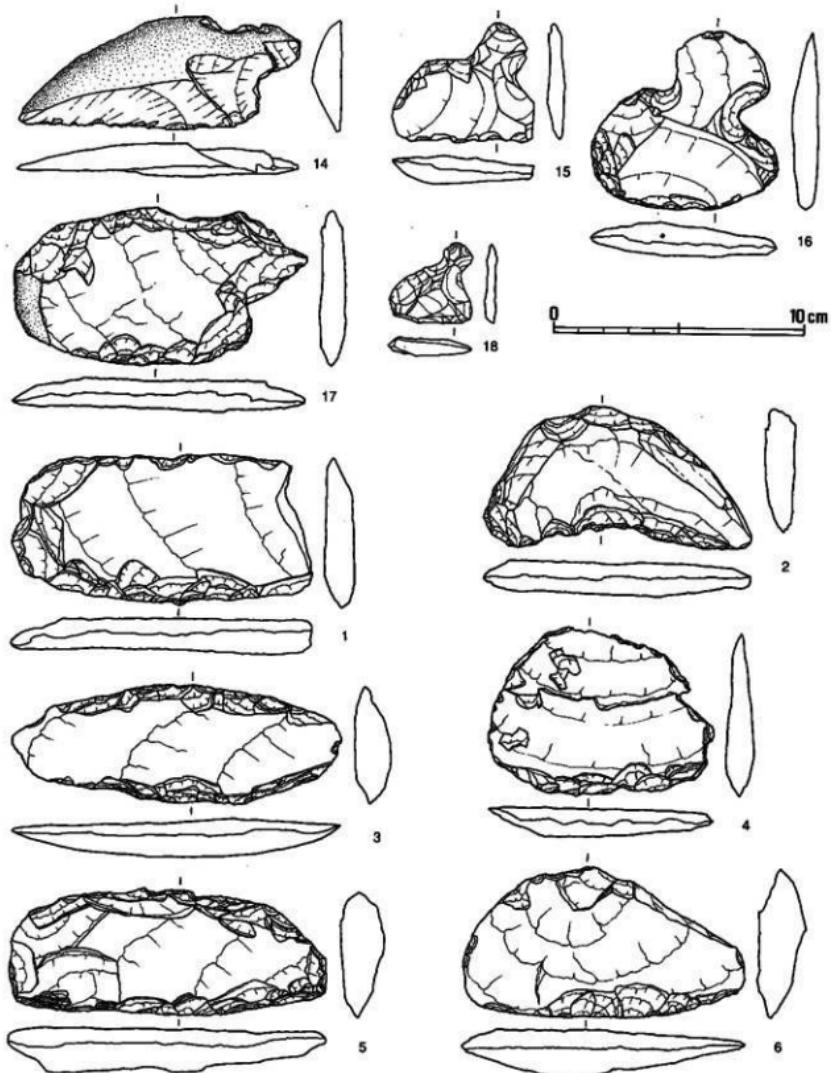
第48図 打製石斧 (6)



第49図 打製石斧 (7)



第50図 粗製石匙 (1)

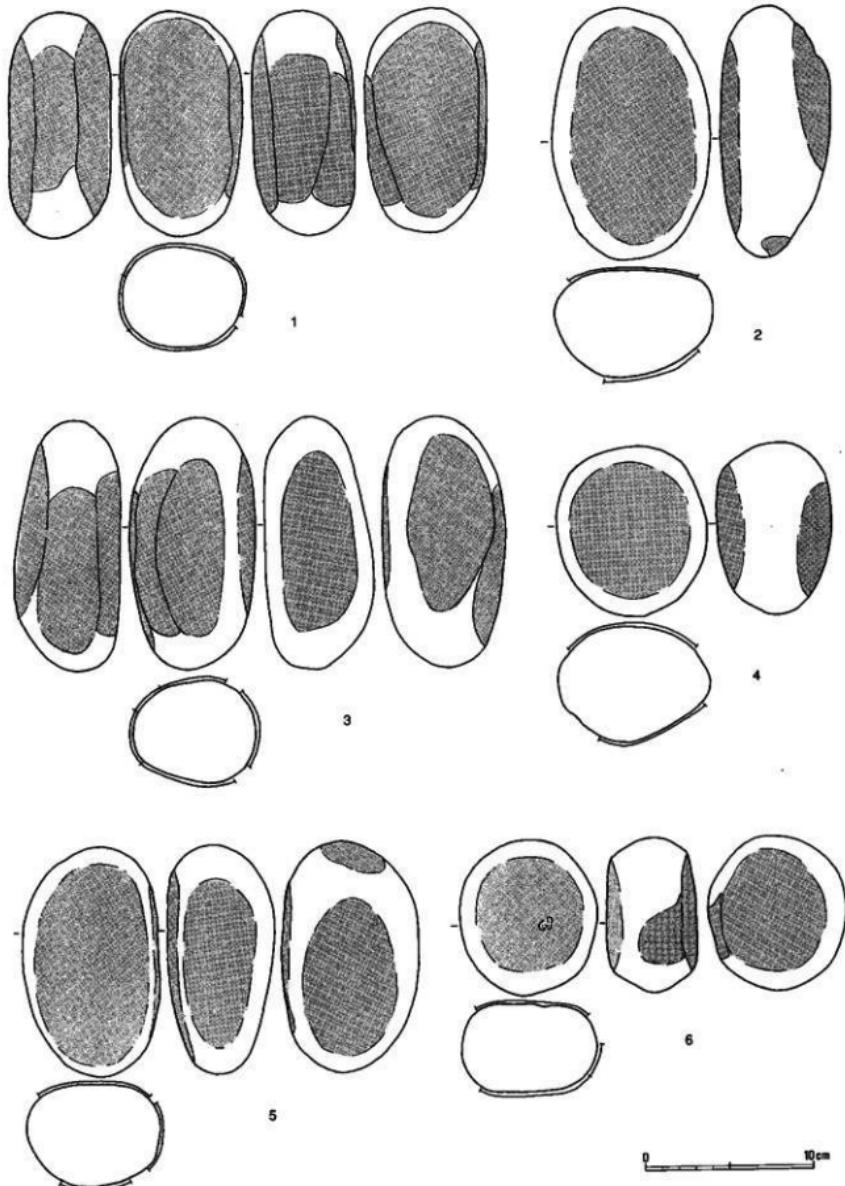


第51図 粗製石匙(2)・横刃形石器

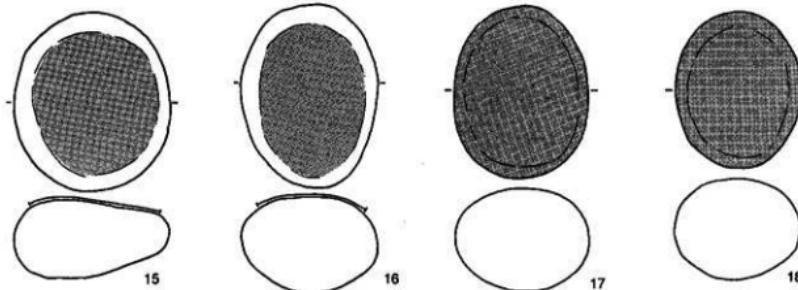
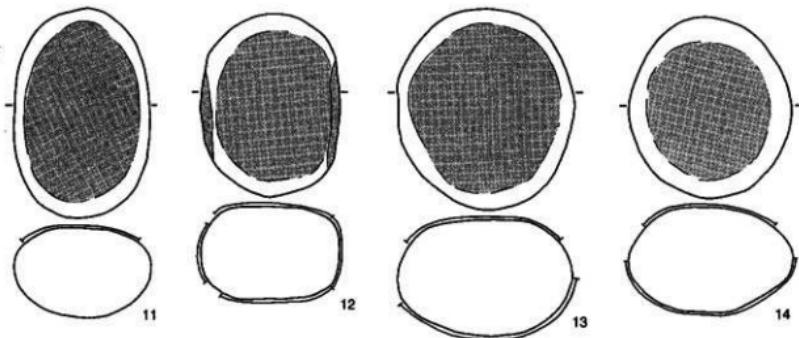
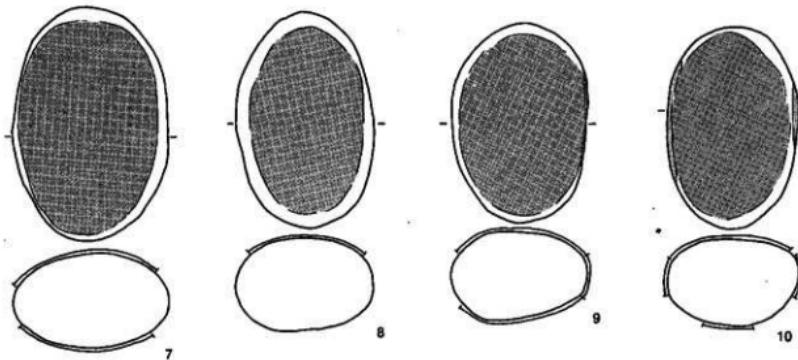
II c類 腹部形態が台形を呈するもの 1点 5.6% (第51点15)

II f類 腹部形態が橢円形を呈するもの 1点 5.6% (同図17)

刃部形態は、外湾状のもの13点(72.2%)、直線状のもの5点(27.8%)である。また、完形が18点中13点と多く、その他もつまみ部や刃部の端が一部欠損しているぐらいで、全体の形態が分からなくなるほど欠損しているものはない。石材はホルンフェルス9点(50.0%)、砂岩7点(38.9%)、頁岩2点(11.1%)である。

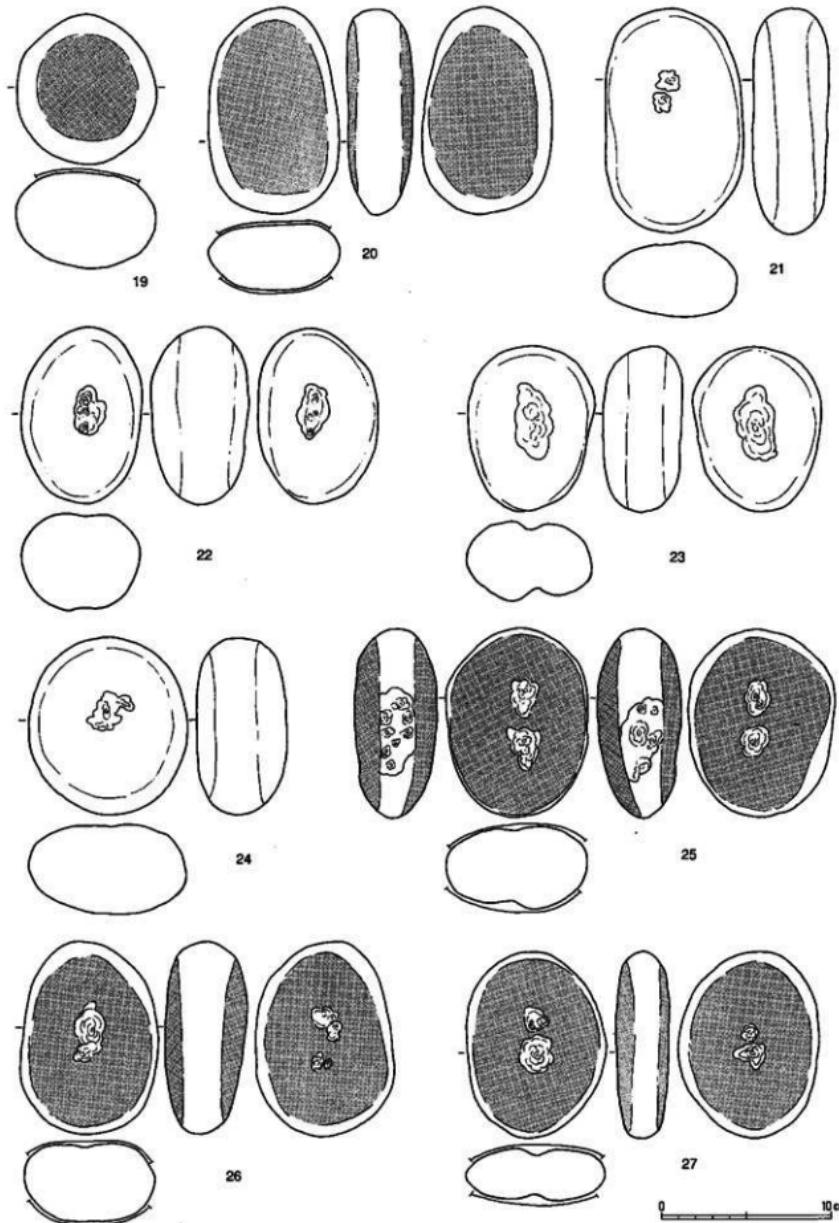


第52図 磨石類 (1)

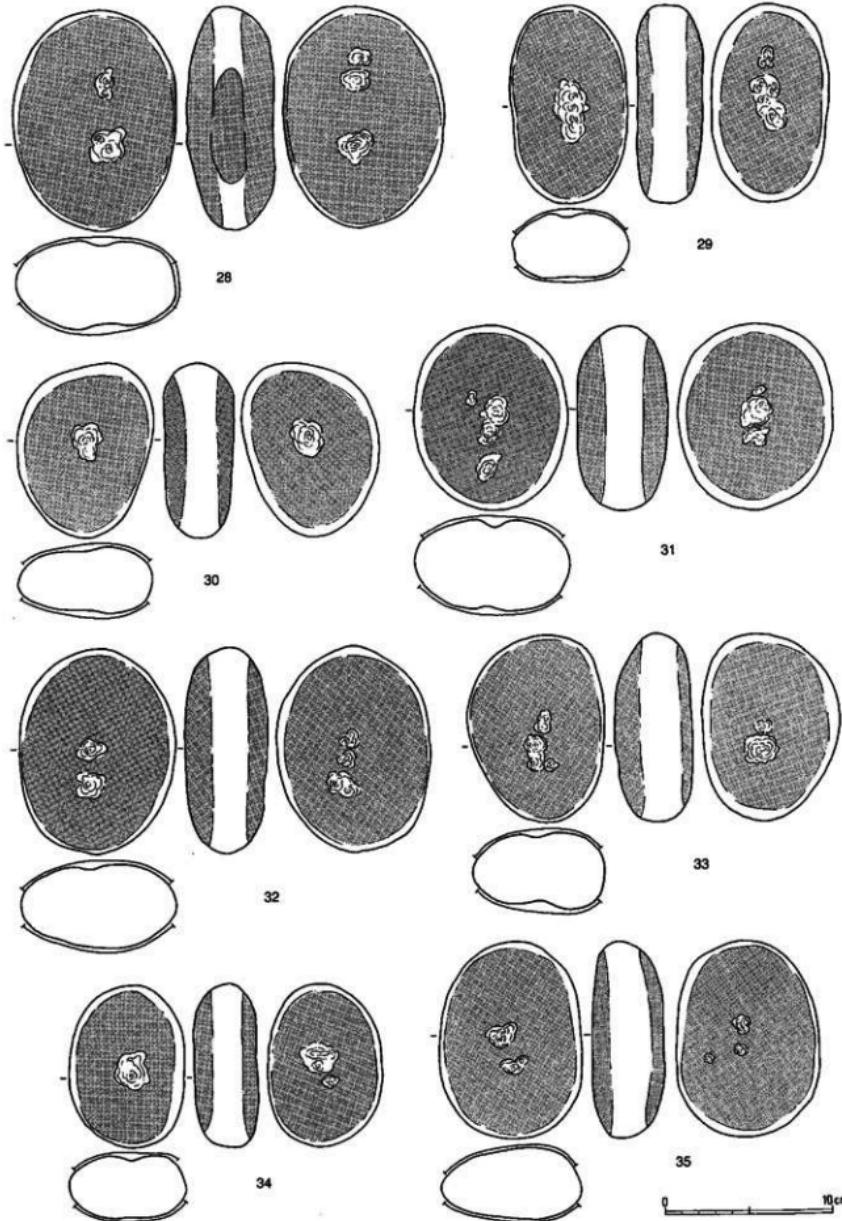


0 10 cm

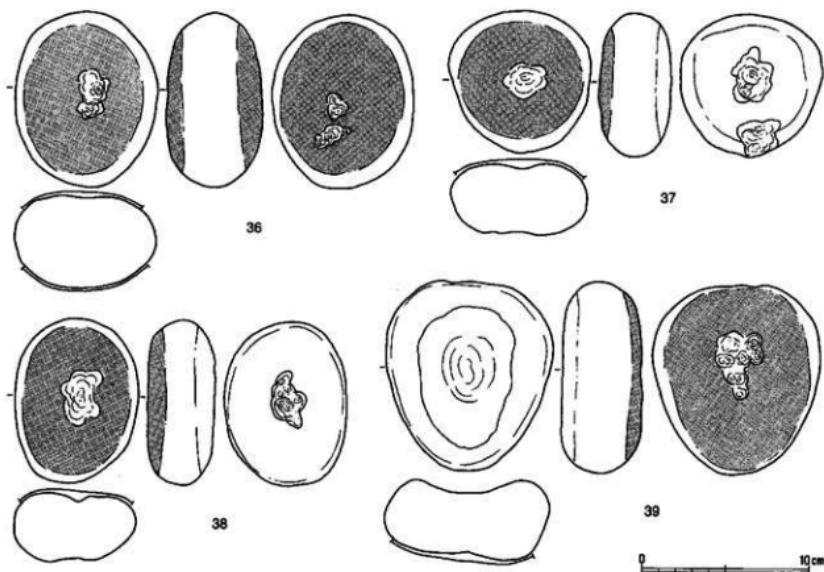
第53図 磨石類 (2)



第54図 磨石類 (3)



第55図 磨石類 (4)



第56図 磨石類 (5)

横刃形石器 (第51図 1~6)

横刃形石器は49点出土している。そのうち6点を図示した。刃部を除いた体部形態により以下のように分類できる。

I類 半円形もしくは半梢円形のもの	20点	40.8%	(第51図 2~5)
II類 四角形に近いもの	15点	30.6%	(同図 1)
III類 平行四辺形に近いもの	6点	12.3%	
IV類 三角形に近いもの	5点	10.2%	(同図 6)
V類 直線状のもの	3点	6.1%	

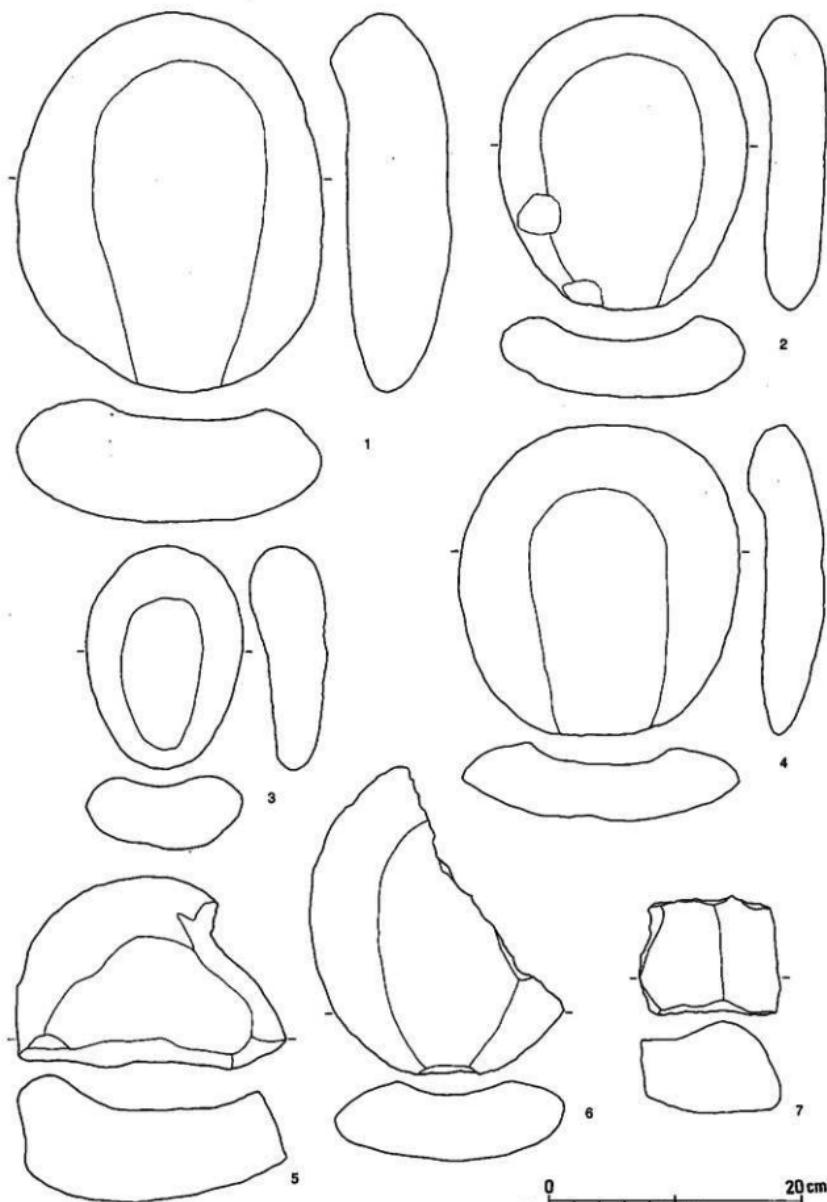
また、刃部を外湾状・直線状・内湾状の3つに分類すると、I~V類の各内訳は以下のようになる。

I類 外湾状	8点 (16.3%)	直線状	9点 (18.4%)	内湾状	3点 (6.1%)
II類 外湾状	6点 (12.3%)	直線状	6点 (12.3%)	内湾状	3点 (6.1%)
III類 外湾状	2点 (4.1%)	直線状	3点 (6.1%)	内湾状	1点 (2.0%)
IV類 外湾状	3点 (6.1%)	直線状	2点 (4.1%)		
V類 外湾状	3点 (6.1%)				

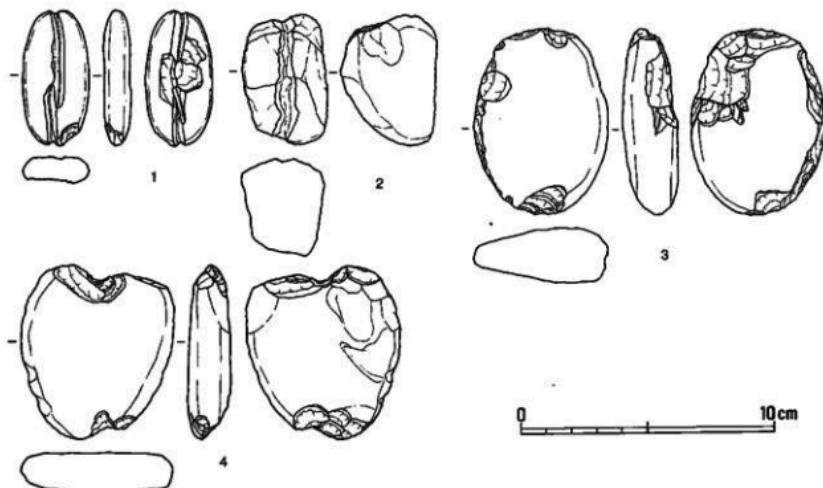
I・II類の外湾状・直線状を合わせると半分以上となり、主体を占めるものである。内湾状のものは少ない。破損状態は、欠損しているものが出土数49点中18点(半分欠損しているもの5点、一部欠損しているもの13点)と約1/3であり、約2/3が完形である。石材はホルンフェルス19点(38.8%)、砂岩16点(32.7%)、頁岩9点(18.4%)、安山岩3点(6.1%)、粘板岩1点(2.0%)、凝灰岩1点(2.0%)である。

磨石類 (第52・53・54・55・56図 1~39)

一般に磨石・凹石・敲石などと区別され呼ばれているものを、ここでは「磨石類」と一括してあつかうこととした。なぜならば、これらの石器の使用痕である磨面・凹部・敲打痕を、それぞれ単独で持つものもあるが、



第57図 石皿



第58図 石錐

複数の使用痕を合せ持つものも多い。そのため明確に磨石・凹石・敲石と区別することが難しいので、「磨石類」として一緒にまとめた。

今回の調査では551点出土し、39点図示した。その内、形態の判別可能な522点について、磨石類の素材となる礫の形態を以下のように分類した。

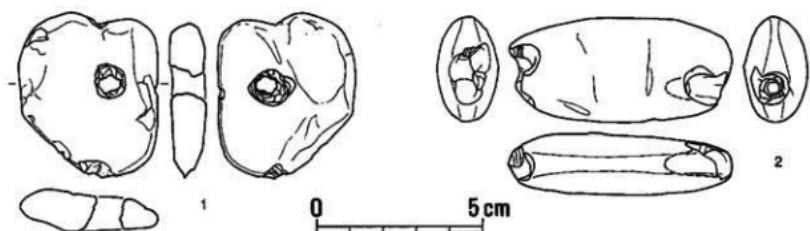
I類 平面が円形または楕円形を呈し、断面が楕円形の礫	328点	62.8%
(第52~56図2・4・6~11・13・14・16~26・28・29・31~36・39)		
II類 平面が円形または楕円形を呈し、断面が偏平な楕円形の礫	72点	13.8%
(同図27・30・37・38)		
III類 平面が円形または楕円形を呈し、周囲に側面のある断面が方形の礫	26点	5.0%
(同図12)		
IV類 平面が円形または楕円形を呈し、断面が二等辺三角形のような礫	18点	3.4%
(同図15)		
V類 断面が円形または楕円形の棒状の礫 (同図1・3・5)	47点	9.0%
VI類 ほぼ球形を呈する礫	2点	0.4%
VII類 平面・断面とともに不定形な礫	29点	5.6%

使用痕については、確認できたもの539点について、その組み合わせは、磨面のみ267点 (49.5%)・凹部のみ77点 (14.3%)・磨面+凹部184点 (34.1%)・磨面+敲打痕7点 (1.3%)・磨面+凹部+敲打痕4点 (0.8%)である。磨面のみが半数近くあり、また、磨面をもつものの割合が非常に高く、本遺跡では磨面を使う作業が多く行われたのであろう。石材は、安山岩468点 (84.9%)、砂岩41点 (7.4%)、凝灰岩34点 (6.2%)、花崗岩5点 (0.9%)、角閃石1点 (0.2%)、閃綠岩1点 (0.2%)、石英斑岩1点 (0.2%)である。

石皿 (第57図1~7)

石皿は90点出土している。その内7点図示してある。その大半が欠損品で、完形は90点中13点 (14.4%) しかない。一部欠損しているものも12点しかなく、残りの65点は半分以上欠損していたり、破片であったりする。

平面形態の確認できる28点についてみると、楕円形のもの7点 (25.0%)、不整な楕円形のもの10点 (35.7%)、



第59図 垂鎌

不定形なもの 6 点 (21.4%)、不整な円形のもの 5 点 (17.9%) である。破片状態のものが多く、平面形態の不明なものが非常に多い。

石皿の作業面をみると、深い凹面をもつものの 61 点 (67.8%)、浅い凹面をもつものの 9 点 (10.0%)、凹面をもたず平らな磨面であるもの 17 点 (18.9%)、不明 3 点 (3.3%) である。裏面の利用は 51 点 (全体の 56.7%) に認められ、その内多数の凹部があるもの 15 点、磨面をもつものの 36 点である。石材はすべて安山岩である。

台石

石皿より大型で、平らな面をもつ不定形な石を台石とした。図示はしなかったが 5 点出土している。完全に残っているものは 1 点のみで、他は台石の一部と思われる破片である。石材はすべて安山岩である。

多孔石

表面に多数凹みをもつものを多孔石とした。20 点出土したが図示はしなかった。平面形態は 1 点のみ不整な円形をしているだけで、その他はすべて不定形なものである。凹みも表面と裏面と両方にあるものが 15 点、表面だけにあるものが 5 点と、表裏どちらも利用しているもののが多い。あまり表裏の意識をせず使用された石器なのであろうか。石材は石皿・台石と同じくすべて安山岩である。

礫器

片手で持てるほどの礫の一部あるいは全体を粗く調整してある石器を礫器とした。出土点数は 6 点であり、図示はしなかった。1 点のみ一部が欠損していて、その他は完形である。石材は砂岩 4 点 (66.6%)、頁岩 1 点 (16.7%)、凝灰岩 1 点 (16.7%) である。

石錘 (第58図 1~4)

石錘は 4 点出土しており、すべて図示した。1・2 は有溝石錘、3・4 は打ち欠き石錘である。1 は橢円形をした礫の長軸方向に上下から溝を作っている。礫の中央付近で、溝がうまくつながらず、表裏とも互い違いになっている。裏面中央と下端部が一部欠けている。2 は表面にわずかな溝があるが、裏面にはないものである。3 は礫の長軸方向の上下端を打ち欠いている。打ち欠きが浅く、側面にも打ち欠き痕がある。4 は不整な橢円形の上下端を打ち欠いている。1・3 が砂岩、2・4 が安山岩である。

石棒

石棒は図示はしなかったが、4 点出土している。いずれも大きめの棒状の自然礫を利用し、それを少し加工している。石材は、安山岩が 2 点、砂岩 1 点、片岩 1 点である。

垂鎌 (第59図 1・2)

1 は不整な砂岩礫の中央に孔を空けており、垂鎌と思われる。礫の上下と右側面にわずかな打ち欠き痕がみられ、石錘になる可能性も考えられる。2 は長楕円形をした凝灰岩の上下端に、加工痕を残した垂鎌の未製品と思われる。一つは、三方向から長軸に対して垂直に孔を空けようとして、アーチ部分が欠けてしまったものであろう。もう一方は、長軸に対して垂直に孔を空けようとしたが欠けてしまい、その後長軸方向に沿うように孔を空けようとして、途中で止めてしまったものである。

第2表 石器観察表

団番号	器種	出土位置	重量(g)	石材	
第3261	ナイフ形石器	表 案	2.2	黒曜石	
第4028	石 砕	表 案	0.9	チャート	
~ 2	~	N-4	(1.1)	黒曜石	
~ 3	~	H-6	1.2	~	
~ 4	~	K-19	1.0	~	
~ 5	~	K-14	0.9	~	
~ 6	~	H-22	(0.6)	~	
~ 7	~	L-14	(0.8)	~	
~ 8	~	H-15	0.7	~	
~ 9	~	G-15	0.7	~	
~ 10	~	G-15	(0.5)	~	
~ 11	~	表 案	(0.4)	~	
~ 12	~	B-23	(0.4)	~	
~ 13	~	E-4	(0.7)	~	
~ 14	~	3 住	(1.0)	~	
~ 15	~	G-22	(0.9)	~	
~ 16	~	H-5	(0.4)	~	
~ 17	~	25 土	(0.4)	~	
~ 18	~	1 住	(2.9)	~	
~ 19	~	G-17	(1.3)	~	
~ 20	~	L-4	(1.0)	~	
~ 21	~	B-4	(0.9)	~	
~ 22	~	表 案	(1.2)	~	
~ 23	~	P-8	(1.2)	~	
~ 24	~	E-2	(1.3)	~	
~ 25	~	L-3	(0.6)	~	
~ 26	~	表 案	(1.1)	~	
~ 27	~	K-18	1.4	~	
~ 28	~	表 案	1.4	~	
~ 29	~	-	1.1	~	
~ 30	~	49 土	1.5	~	
~ 31	~	E-24	0.9	~	
~ 32	~	J-4	1.3	~	
~ 33	~	C-19	(0.5)	~	
~ 34	~	E-3	(1.7)	~	
~ 35	~	G-18	1.6	~	
~ 36	~	K-13	(0.7)	~	
~ 37	~	表 案	0.5	~	
~ 38	~	E-18	0.5	~	
~ 39	~	6 住	0.3	~	
~ 40	~	4 住	0.3	~	
~ 41	~	表 案	0.2	~	
~ 42	~	8 (住)	0.5	~	
~ 43	~	表 案	0.5	~	
~ 44	~	C-25	(0.3)	~	
~ 45	~	K-19	0.4	~	
~ 46	~	1-14	0.3	~	
~ 47	~	11 住	(0.3)	~	
~ 48	~	25 土	(0.3)	~	
~ 49	~	J-13	(0.3)	~	
~ 50	~	G-10	(0.2)	~	
~ 51	~	E-23	0.7	~	
~ 52	~	H-4	(1.2)	~	
~ 53	~	H-21	(0.3)	~	
~ 54	~	K-3	(0.5)	~	
~ 55	~	H-19	(0.7)	~	
~ 56	~	H-21	(0.3)	~	
~ 57	~	C-22	(0.3)	~	
~ 58	~	K-4	(0.3)	~	
~ 59	~	H-4	(0.5)	~	
~ 60	~	S-14	(0.4)	~	
第41回1	石 砕	9 住	17.0	~	
~ 2	~	表 案	(9.3)	チャート	
~ 3	~	-	(1.8)	黒曜石	
~ 4	~	N-2	2.0	~	
~ 5	スクリュー	4 住	1.1	~	
~ 6	~	D-21	(10.3)	~	
~ 7	石 砕	5 住	2.0	~	
~ 8	~	表 案	(0.4)	~	
~ 9	骨針形石器	-	3.5	~	
~ 10	砾 片	H-13	(4.9)	黒曜岩	
~ 11	~	G-3	(9.5)	~	
~ 12	~	G-18	(12.4)	砂 岩	
第42回1	F-3	(465.8)	片 岩		
~ 2	~	F-4	(496.3)		
~ 3	~	E-3	126.5	或粒岩	
~ 4	~	77 土	(203.4)	黒曜岩	
~ 5	~	F-3	106.7	片 岩	
~ 6	~	G-21	(127.4)	~	
~ 7	~	E-2	(74.6)	砂 岩	
第42回8	磨 所	F-7	(44.0)	片 岩	
~ 9	~	4 住	(144.9)	~	
~ 10	~	C-22	(67.0)	黒曜岩	
~ 11	~	H-11	(178.7)	砂 岩	
~ 12	~	J-4	(312.8)	~	
第43回1	打 所	F-3	428.2	砂 岩	
~ 2	~	3 住	(269.6)	ミルクチャコ	
~ 3	~	G-4	182.8	砂 岩	
~ 4	~	N-3	90.6	真 岩	
~ 5	~	L-13	146.4	砂 岩	
~ 6	~	G-5	124.1	真 岩	
~ 7	~	J-3	149.3	ミルクチャコ	
~ 8	~	F-3	139.1	~	
~ 9	~	4 住	126.2	~	
~ 10	~	K-3	159.5	砂 岩	
第44回11	K-13	198.3	~		
~ 12	~	J-11	258.0	ミルクチャコ	
~ 13	~	4 住	178.0	~	
~ 14	~	J-3	142.4	砂 岩	
~ 15	~	H-11	149.2	~	
~ 16	~	74 土	180.0	~	
~ 17	~	J-11	196.4	~	
~ 18	~	F-3	(151.3)	~	
~ 19	~	N-4	204.3	ミルクチャコ	
第45回20	H-4	152.3	真 岩		
~ 21	~	E-3	(184.5)	砂 岩	
~ 22	~	表 案	(98.5)	~	
~ 23	~	4 住	164.6	ミルクチャコ	
~ 24	~	表 案	206.6	砂 岩	
~ 25	~	O-4	158.0	真 岩	
~ 26	~	2 土	(109.8)	砂 岩	
~ 27	~	H-13	164.2	~	
~ 28	~	H-2	157.4	~	
~ 29	~	78 土	108.1	~	
~ 30	~	4 住	117.7	片 岩	
~ 31	~	49 土	(160.5)	砂 岩	
第46回32	H-3	222.6	ミルクチャコ		
~ 33	~	44 土	212.8	真 岩	
~ 34	~	4 住	(202.9)	ミルクチャコ	
~ 35	~	L-4	(147.2)	~	
~ 36	~	E-3	165.1	~	
~ 37	~	-	189.0	砂 岩	
~ 38	~	K-21	109.9	~	
~ 39	~	F-3	97.8	ミルクチャコ	
~ 40	~	E-2	135.7	真 岩	
第47回41	49 土	(197.0)	~		
~ 42	~	4 住	(282.3)	ミルクチャコ	
~ 43	~	F-3	195.9	~	
~ 44	~	L-4	87.0	安山岩	
~ 45	~	E-5	95.7	砂 岩	
~ 46	~	F-9	138.9	~	
~ 47	~	E-5	158.1	ミルクチャコ	
~ 48	~	O-3	95.6	~	
~ 49	~	2 土	(100.1)	真 岩	
~ 50	~	6 住	75.9	ミルクチャコ	
~ 51	~	10 住	(42.3)	~	
第48回52	表 案	284.1	砂 岩		
~ 53	~	-	190.7	ミルクチャコ	
~ 54	~	L-3	194.8	砂 岩	
~ 55	~	H-3	146.7	ミルクチャコ	
~ 56	~	表 案	134.1	黒曜岩	
~ 57	~	14 土	105.1	真 岩	
~ 58	~	E-3	184.6	片 岩	
~ 59	~	E-7	181.9	ミルクチャコ	
~ 60	~	G-3	122.5	真 岩	
~ 61	~	J-6	62.4	~	
~ 62	~	H-4	54.3	~	
第49回63	G-7	(110.6)	ミルクチャコ		
~ 64	~	L-4	(104.1)	真 岩	
~ 65	~	65 土	(52.8)	~	
~ 66	~	6 土	(45.0)	~	
~ 67	~	93 土	(98.1)	砂 岩	
~ 68	~	H-13	(68.5)	ミルクチャコ	
~ 69	~	H-3	(63.4)	砂 岩	
~ 70	~	N-12	(67.9)	安山岩	
~ 71	~	L-4	(112.3)	砂 岩	
~ 72	~	25 土	(82.9)	ミルクチャコ	
~ 73	~	2 土	(59.6)	安山岩	
第50回1	F-3	(465.8)	片 岩		
~ 74	~	-	(83.9)	真 岩	
~ 75	~	10 住	(53.2)	~	
第49回76	打 所	G-5	(132.0)	砂 岩	
~ 77	~	75 土	(94.4)	ミルクチャコ	
第50回1	磨石所	H-13	258.7	ミルクチャコ	
~ 2	~	E-6	84.1	砂 岩	
~ 3	~	85 土	64.7	~	
~ 4	~	90 土	57.0	ミルクチャコ	
~ 5	~	49 土	29.2	砂 岩	
~ 6	~	E-12	(60.5)	真 岩	
~ 7	~	O-4	35.8	ミルクチャコ	
~ 8	~	4 住	(37.5)	真 岩	
~ 9	~	G-12	(37.9)	ミルクチャコ	
~ 10	~	O-3	(21.5)	~	
~ 11	~	G-21	53.5	~	
~ 12	~	J-16	(60.9)	~	
~ 13	~	78 土	97.5	砂 岩	
第51回14	G-3	50.8	~		
~ 14	~	F-19	27.9	ミルクチャコ	
~ 15	~	L-4	61.2	~	
~ 16	~	3 住	95.8	砂 岩	
~ 17	~	17 土	7.6	~	
~ 18	~	66 土	~		
~ 19	~	E-3	115.0	~	
~ 20	~	O-8	88.8	ミルクチャコ	
~ 21	~	H-2	84.9	安山岩	
~ 22	~	F-4	70.4	砂 岩	
~ 23	~	5	12.5	~	
~ 24	~	H-2	70.4	黒曜岩	
~ 25	~	3	20	98.3	
~ 26	~	3	36	76.4	
~ 27	~	5	120.7	~	
~ 28	~	6	58.7	安山岩	
第53回7	H-4	93.7	~		
~ 8	~	49 土	77.7	~	
~ 9	~	F-3	60.9	~	
~ 10	~	1-7	71.4	~	
~ 11	~	G-7	74.0	黒曜岩	
~ 12	~	75 土	51.2	~	
~ 13	~	141.1	~		
~ 14	~	O-3	88.4	~	
~ 15	~	36 土	600.3	~	
~ 16	~	75 土	71.7	~	
~ 17	~	G-4	61.4	~	
~ 18	~	75 土	51.2	~	
第54回19	82 土	610.4	~		
~ 20	~	36 土	51.2	~	
~ 21	~	G-12	662.0	黒曜岩	
~ 22	~	93 土	53.5	安山岩	
~ 23	~	F-3	392.0	~	
~ 24	~	G-5	622.0	~	
~ 25	~	G-3	504.8	~	
~ 26	~	N-9	624.7	~	
~ 27	~	P-12	339.3	~	
第55回28	3 住	79.6	黒曜岩		
~ 29	~	78 土	434.2	安山岩	
~ 30	~	25 土	464.3	~	
~ 31	~	K-15	655.8	~	
~ 32	~	E-3	697.2	~	
~ 33	~	83 土	495.1	~	
~ 34	~	40 土	320.6	~	
~ 35	~	78 土	537.9	~	
第56回36	4 住	669.7	~		
~ 37	~	32.8	322.8	黒曜岩	
~ 38	~	90 土	366.5	~	
~ 39	~	F-2	729.0	安山岩	
第57回1	石 画	11 土	869.0	~	
~ 2	~	9 住	338.0	~	
~ 3	~	J-4	1500.0	~	
~ 4	~	4 住	407.0	~	
~ 5	~	H-2	(3510.0)	~	
~ 6	~	3 住	(3400.0)	~	
~ 7	~	74 土	(920.0)	~	
第58回1	石 繩	66 土	(23.2)	砂 岩	
~ 2	~	60 土	73.8	安山岩	
~ 3	~	-	(105.2)	砂 岩	
~ 4	~	表 案	79.3	安山岩	
第59回1	麦 箬	H-11	32.2	砂 岩	
~ 2	~	G-11	(31.4)	黒曜岩	

第3表 造構別出土石器一覧

	ナイフ	石鏃	石砲	スク	石錐	釣針	磨片	打斧	粗細	横刃	磨石	石頭	白石	多孔	鍬器	石錐	麥錐	石棒	合計
1住		1 16.7						2			3							6	
3住		1 4.5						12	1	1	6	1						22	
4住		2 2.6	1 1.3					5 6.6	35 46.1	1 1.3	6 7.9	19 25.0	5 6.6			1 1.3	1 1.3	76	
5住				1 5.9				3 17.6			6 35.3	6 35.3	1 5.9					17	
6住		1 14.3						1 14.3			4 57.1	1 14.3						7	
7住								1 33.3			1 33.3	1 33.3						3	
8住		1 20.0						1 20.0			1 20.0	2 40.0						5	
9住			1 50.0								1 50.0							2	
10住								5 71.4			2 28.6							7	
11住		1 12.5						5 62.5			2 25.0							8	
小計 (住数)	7 4.6	1 0.7	1 0.7	1 0.7				5 3.2	65 42.4	2 1.3	7 4.6	44 28.7	17 11.1	1 0.7		1 0.7		153 0.7	
2土								1 9.1	5 45.4		4 36.4				1 9.1			11	
3土								1 20.0			4 80.0							5	
4土								1 50.0			1 50.0							2	
5土											1 100							1	
6土								2 33.3			4 66.7							6	
9土								1 100										1	
11土								3 42.8			2 28.6	2 28.6						7	
12土											2 100							2	
14土								1 50.0			1 50.0							2	
15土								1 33.3			2 66.7							3	
16土								1 100										1	
17土											1 50.0			1 50.0				2	
19土								1 50.0			1 50.0							2	
20土											1 100							1	
22土								1 100										1	
23土											7 63.6	2 18.2		2 18.2					11
25土	2 40.0							1 20.0			2 40.0							5	
26土											1 100							1	
28土											1 100							1	
29土											1 100							1	
31土							1 100											1	
32土											1 100							1	
35土											1 100							1	
36土											4 80.0		1 20.0					5	

上段：出土点数 下段：%数值

	ナイフ	石鏃	石耙	スク	石錐	釣針	磨片	打斧	雨靴	横刀	磨石	石皿	台石	多孔	環器	石鏟	彫刻	石棒	合計
38土											1	100							1
39土											2	100							2
40土										2	100								2
44土							1	100											1
48土										1	100								1
49土	1 5.5						7 38.9	1 5.5	1 5.5	5 27.8	2 11.2			1 5.5					18
55土										1	100								1
59土										1	100								1
60土											1	50.0		1 50.0					2
61土										1	50.0	1 50.0							2
62土										1	100								1
64土										1	100								1
65土							1 100												1
66土							5 50.0	1 10.0	3 30.0					1 10.0					10
67土							1 100												1
73土							1 100												1
74土							1 50.0				1 50.0								2
75土							1 25.0			3 75.0									4
77土							1 33.3	2 66.7											3
78土							1 16.7	1 16.7	2 33.3	1 16.7				1 16.7					6
79土							1 100												1
81土										1 100									1
82土									1 50.0		1 50.0								2
83土										1 100									1
84土							1 100												1
85土								1 100											1
88土								1 50.0			1 50.0								2
89土							1 100												1
90土								1 20.0	1 20.0	1 20.0	2 40.0								5
93土								1 33.3			2 66.7								3
95土							1 50.0	1 50.0											2
小肝 (土塊)	3 1.9						6 3.9	46 29.7	5 3.2	2 1.3	63 40.6	20 12.9	2 1.3	4 2.6	2 1.3	2 1.3	2 1.3		155
ダリヤF	41 5.2	1 0.1	1 0.1				24 3.1	459 58.4	11 14	35 4.5	192 24.5	11 14	3 0.4	3 0.4	1 0.1	2 0.3	1 0.1	1 0.1	785
表探	1 0.1	9 1.5	2 0.1				1 0.1	14 2.5	1 39.4	5 0.9	252 44.3	42 7.4	2 0.4	13 2.3	1 0.1	2 0.1	1 0.1		569
合計	1 0.1	60 3.6	4 0.2	2 0.1	2 0.1	1 0.1	49 3.0	794 47.8	18 11	49 2.9	551 33.2	90 5.4	5 0.3	20 1.2	6 0.4	4 0.2	2 0.1	4 0.2	1662

上段：出土点数

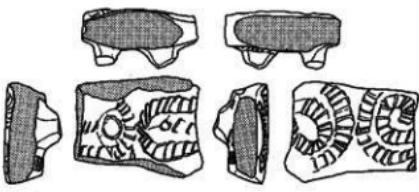
下段：%数値

第5節 土偶

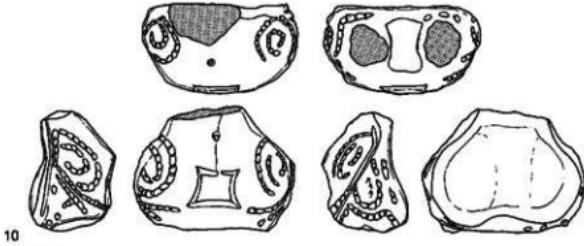
番号	遺構 (グリッド)	図版	部位	法量(単位はmm)			備考
1	49号土坑 (I-12)	60	頭部	左右41	前後36	高さ51	頭頂部が平坦で、顔面は小さく、目は点でわずかに表現されている。首が顔の右半分によっている。
2	(K-3)	60	頭部	左右33	前後28	高さ25	頭頂部は扁平で「カッパ形」の一種と見られる。顔面は存在しない。頭頂部と側面に貫通する穿孔が見られ、首にも穿孔の痕跡が見られる。
3	15号土坑 (J-18)	60	頭部	左右34	前後25	高さ34	細かい表現は全くないが、顔面の平坦、首のすぼまり、後頭部の出方などから土偶と推定
4	(F-3)	60	頭部	左右49	前後27	高さ37	髪型は表現されているが、目、口などは見られない。首が残存。
5	(L-3)	60	頭部 胴部	左右46	前後48	高さ68	いわゆる「円錐型土偶」である。胴部と頭部が中空である。顔面には目と口が表現されている。
6	(E-3)	60	頭部	左右56	前後38	高さ59	目、口、髪が表現され、耳と後頭部に穿孔が施されるが、右耳のみ残存し、他は欠損する。
7	50号土坑 (P-15)	60	頭部	左右57	前後52	高さ58	目、口、髪型の表現あり。顔面は平面。首が残存。
8	(E-4)	60	腕	長さ46	幅21	厚さ9	板状の幅平な腕、形状から右腕だと思われる。先端部分には刻みによって指が裏表に表現されている。
9	(K-3)	61	胴部	左右49	前後16	高さ37	板状の胸部に乳房が付く。乳房の回りと背中に角押文が施されている。
10	(O-8)	61	腹部 臀部	左右62	前後26	高さ46	いわゆる「出戻土偶」で、引き締まった腰、その2倍ほどの尻が特徴的である。腹部には刺突によるへそと角押し文による渦巻き状の文様、側面にも同様の渦巻き状の文様が施される。臀部はハート型で反り返ったような形を呈する。
11	6号住居 (E-13)	61	腹部 臀部	左右62	前後34	高さ68	いわゆる「出戻土偶」である。締まった腰部から臀部が漸増に肥大する。腹部には正中線とへそ、脚の付け根に文様が施される。側面には沈線・縄文が施され、臀部はハート型で脚との境に文様が見られる。
12	49号土坑 (I-12)	61	腹部 臀部	左右68	前後55	高さ83	いわゆる「出戻土偶」である。引き締まった腰、肥大化した尻と腹が特徴的、文様ははっきりしないが、腹部下半の「対称弦文」が見られるほか、ハート型の臀部に沈線の痕跡と思われる裂け目が見られる。
13	(I-4)	62	腹部 臀部	左右54	前後44	高さ74	「出戻土偶」である。臀部右半分のみ残存。脚の付け根に蓮華状の文様が見られる。
14	(K-4)	62	臀部	左右74	前後26	高さ86	右の股のみ残存し、腹部は残存しない。形状は緩やかな丸みを持つ。側面と尻の下部に半纏管文が施される。
15	(K-3)	62	脚部	左右20	前後34	高さ29	足も腰が扁平でなく上げ底状になった足の外側半分である。前後も明確にはわからない。
16	(J-4)	62	脚部	左右31	前後39	高さ22	足の爪先のみ残存する。僅かに指の表現が見られる。
17	49号土坑 (I-12)	62	脚部 18と接合関係	左右53	前後60	高さ40	大型脚の先端部であり、同じ49号土坑から出土した18の土偶脚部と接合する。右足であり、左足よりも残りがよく指先からかかとまでわかる。
18	49号土坑 (I-12)	62	脚部 17と接合関係	左右55	前後39	高さ39	大型脚の先端部である。同じ49号土坑から出土した17の土偶脚部と接合する。足の甲の部分に四条の沈線により指が表現されている。爪先が欠損している。左足である。
19	49号土坑 (I-12)	63	脚部	左右33	前後35	高さ49	円柱状の脚部。左足だと思われる。爪先にあたる部分に3ヶ所僅かな壅みがあり、指を表現しようとしたと思われる。
20	(E-12)	63	脚部	左右40	前後46	高さ52	円柱状の脚部である。右足だと思われる。爪先と言うより下部が全体的に広がっている後部に段階付いている。
21	(E-17)	63	脚部	左右33	前後35	高さ48	円柱状の脚部。左足だと思われる。爪先が出ており、やや内湾気味である。後ろ側には沈線による文様が施されている。
22	(F-14)	63	脚部	左右24	前後46	高さ40	足の外側半分のみ残存する。割れ口には制作時に芯になる棒を入れられた痕跡が残る。側面に沈線による弧を呈する文様が残る。下部のやや尖った部分を爪先と考えると左足と推定することができる。
23	10号住居 (N-12)	63	脚部 脚部	左右27	前後31	高さ64	脣部下半と脚部が左半分のみ残存する。腹部には沈線による正中線と側面につながる渦巻き状の文様が存在し、脚部にも沈線による文様が施される。爪先は僅かに表現されている。
24	(M-4)	63	脚部	左右36	前後40	高さ48	円柱状の脚部で、左足だと思われる。わずかに爪先が存在する。側面の上部に続続した円柱形の文様が施される。
25	(H-3)	63	脚部	左右26	前後42	高さ33	足の甲がはっきり表現されている脚であるが、爪先は欠損している。側面は内側が平坦で、外側が丸みを持つことから、左足だと考えられる。
26	30号土坑 (G-21)	63	脚部	左右41	前後58	高さ56	爪先が長く尖った脚である。左足だと思われる。文様は見られない。



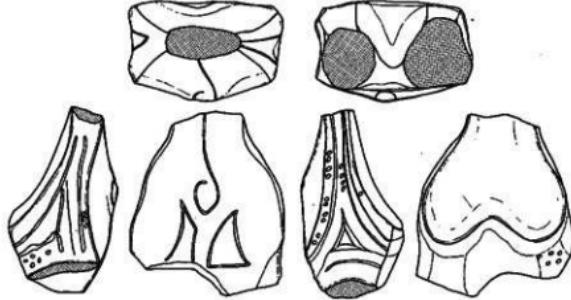
第60図 土偶(1)



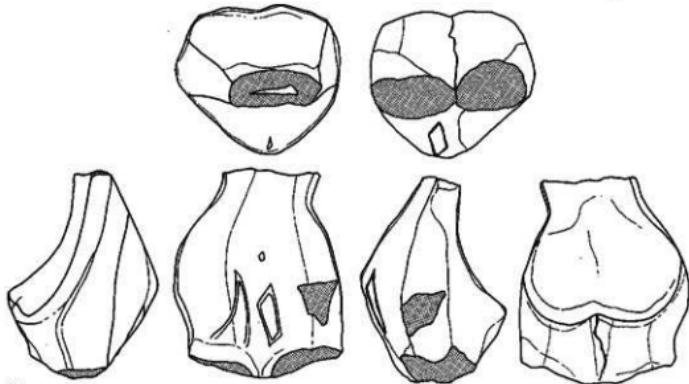
9 K-3



10 O-8



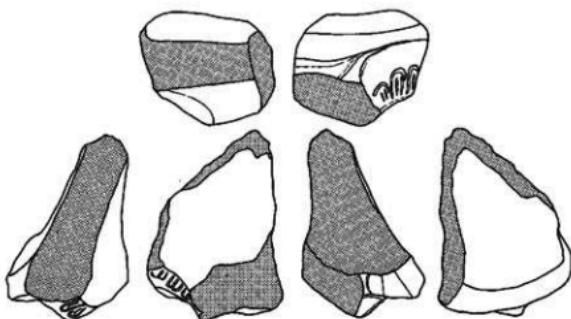
11 6住



12 49土

第61図 土偶(2)





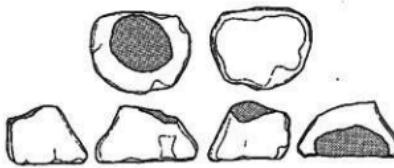
13 92-182



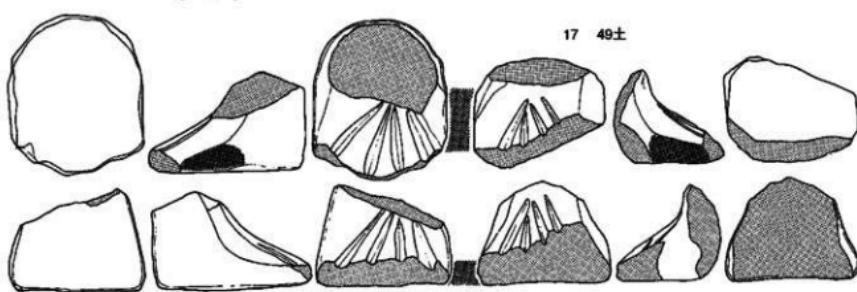
14 92-705



15 K-3



16 92-902



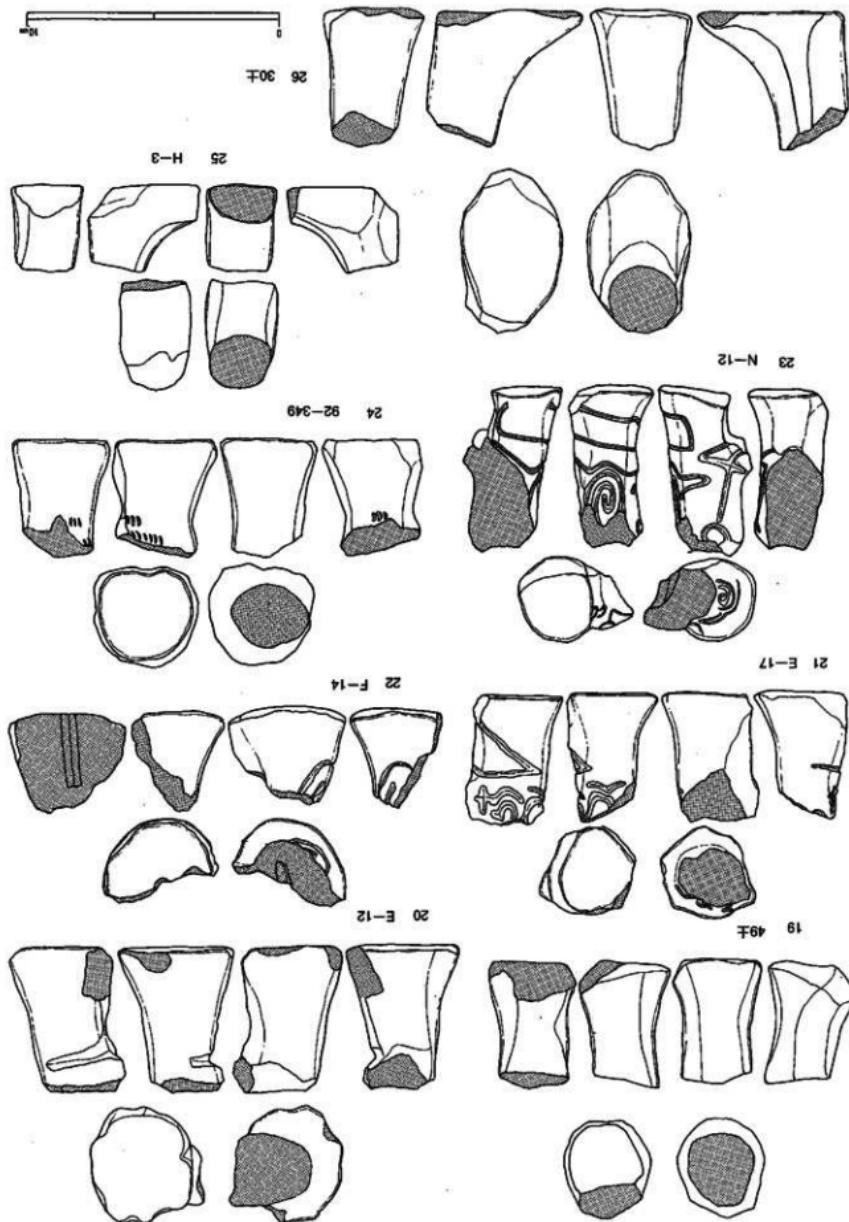
17 49土

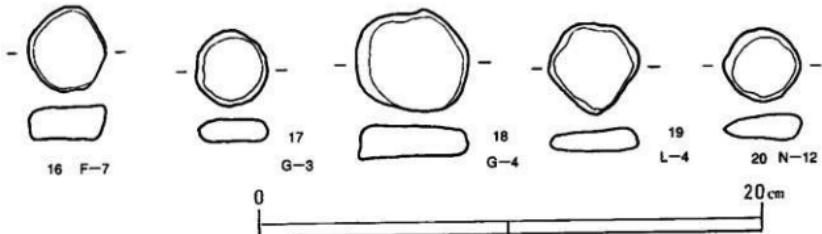
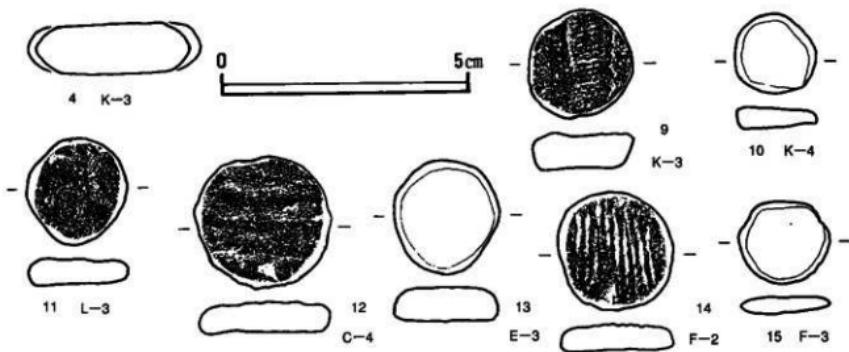
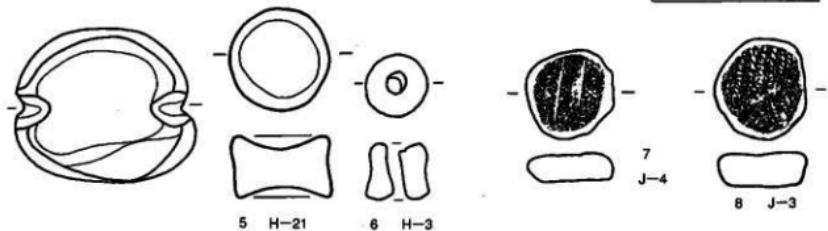
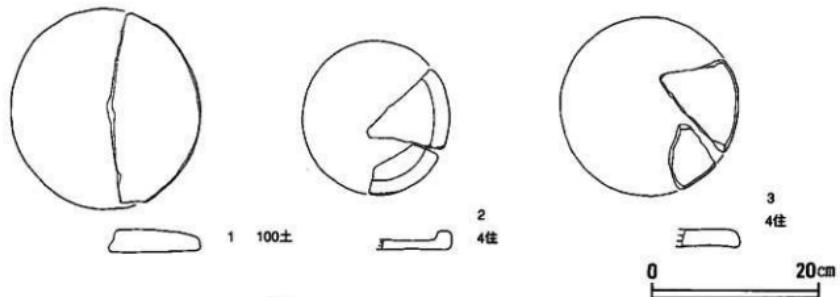
18 49土



第62図 土偶(3)

第63圖 土 壓 (4)





第64図 土製品実測図

第6節 土製品（第64図）

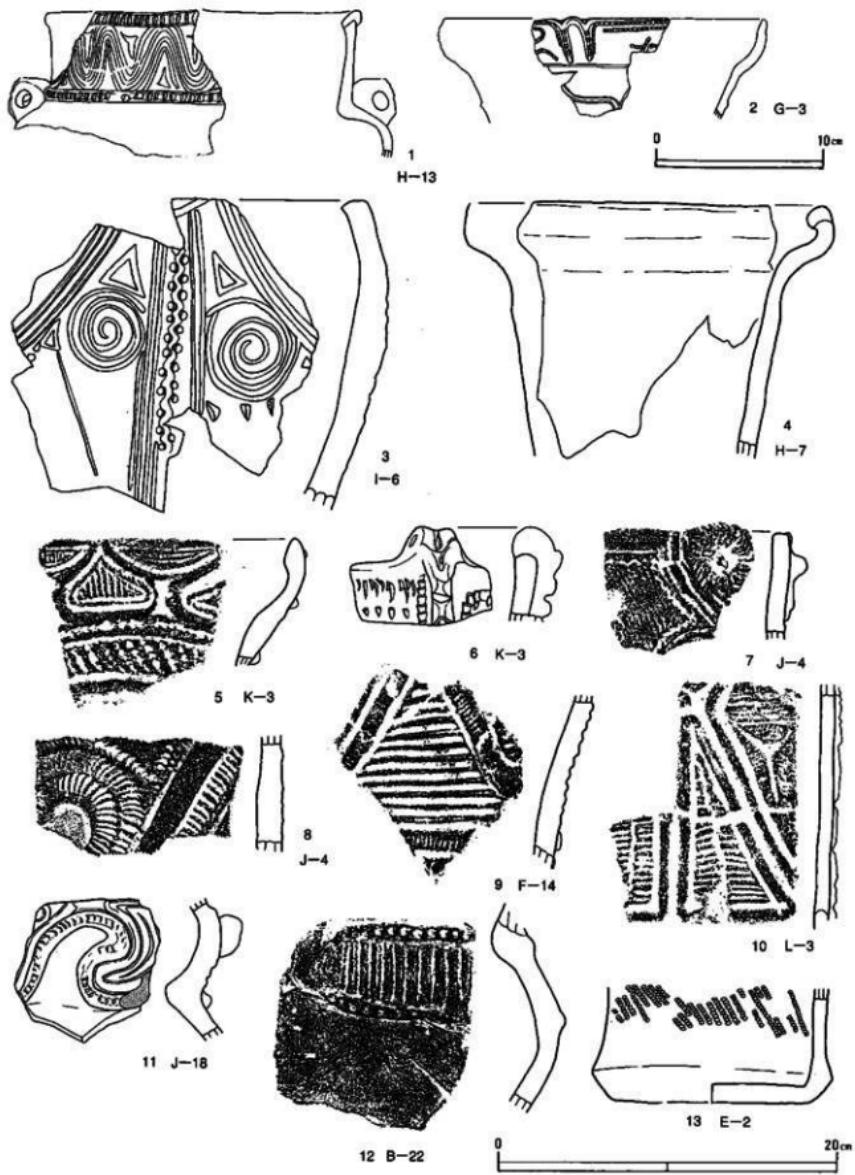
土製品は器台、土鍤、耳栓、土製円盤など20点に及ぶ。

1～3は器台である。器台は完全に形をとどめているものではなくどれも破損している。1は100土坑より出土した。破損しており、全体の約2分の1のみ残存している。円形で直径約23.2cm、厚さ2.6cmを測る。表面・裏面ともに平坦である。2・3は第4号住居より出土した。2は円形で直径約17.8cm、厚さ2.2cmを測る。全体の3分の1程度が残存している。表面は整形されており、裏面には台がつけられている。なお平面図は裏面のものである。3は円形で直径約21.2cm、厚さ2.0cmを測る。全体の約4分の1程度が残存している。4は土鍤である。長さ3.7cm、厚さ1.0cmを測る。両端に溝が切られており、表面は若干整形されている。全体的に摩滅が激しい。5、6は耳栓であり、包含層から出土した。5は直径2.0cm、厚さ1.2cmを測る。表裏面とも中心部が窪んでおり、また耳との接触部分にも窪みがみられる。6は直径1.3cm、厚さ1.1cmを測り、中央部に孔があるが、摩滅が激しい。5と同様に耳との接触部分に若干窪みが認められる。

7から20は土製円盤である。全体的に摩滅が激しく、表面に文様の痕跡が窺われるものもある。7は直径2.6cm、厚さ1.0cmを測る。打ち欠いた状態が一部残る。8は直径4.0cm、厚さ1.2cmを測る。土器片の周囲は摩滅している。9は直径4.2cm、厚さ1.2cmを測る。一部打ち欠き状態を残す。10は直径3.2cm、厚さ0.9cmを測る。周囲は摩滅している。11は直径4.0cm、厚さ1.0cmを測る。断面は打ち欠いた状態である。12は直径4.2cm、厚さ1.2cmを測る。周囲は若干摩滅している。13は直径4.3cm、厚さ1.4cmを測り摩滅している。14は直径4.4cm、厚さ1.0cmを測る。周囲には摩滅していない部分もある。15は直径3.6cm、厚さ0.7cmを測る。16は直径3.2cm、厚さ1.2cmを測る。17は直径2.8cm、厚さ1.0cmを測る。土器片の周囲は摩滅が著しい。18は直径4.5cm、厚さ1.2cmを測る。一部摩滅している。19は直径3.6cm、厚さ0.8cmを測り摩滅していない部分もある。20は直径3.0cm、厚さ0.9cmを測る。

第7節 包含層出土遺物（第65図）

第65図はグリッド出土の遺物で、時期的には全て縄文時代中期に位置付けられる。1は中期中葉井戸房式末期の深鉢と考えられるもので口縁部は直に立上がり胴部はキャリバー状を呈するタイプのものである。2は中期前葉落沢式の深鉢で頸部にくびれを持ち口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁部は連続角押文が、胴部はクランク状に隆帯が施される。3は中期前葉落沢式の深鉢の口縁部である。沈線によって玉抱三爻文とその下に三角押文が配され、沈線により垂下した中に交互に円形の刺突文が充填される。4は中期前葉落沢式の深鉢で無文である。5・6は中期前葉新道式で4号住居付近の包含層からの出土である。5は深鉢で口縁部はやや外反しながら立ち上がる。複合三角形区画文の内部を沈線で充填している。胴部は横位に区画され、三角押文が施される。6は圭頭状突起を有するので押圧隆帯が施され、口縁部は刺突文と押し引きによる角押文が施される。7～10は中期中葉藤内式である。7は隆帯により連続した爪形文が施され、周囲は縄文地に平行沈線と波状沈線が施されている。8は隆帯と連続爪形のキャタピラ文を併用して円形等のモチーフが施文されている。9・10は深鉢形土器であり、隆帯及び半截竹管状の工具による沈線によって施文され、パネル文等を基本とした文様構成が見られる。11～13は中葉井戸房式の深鉢の底部である。算盤玉形の器形で12は梢円区画文内に沈線を充填しており13は縄文が施されている。



第65图 包含层出土土器实测图·拓影图

第4章 遺構と遺物の検討

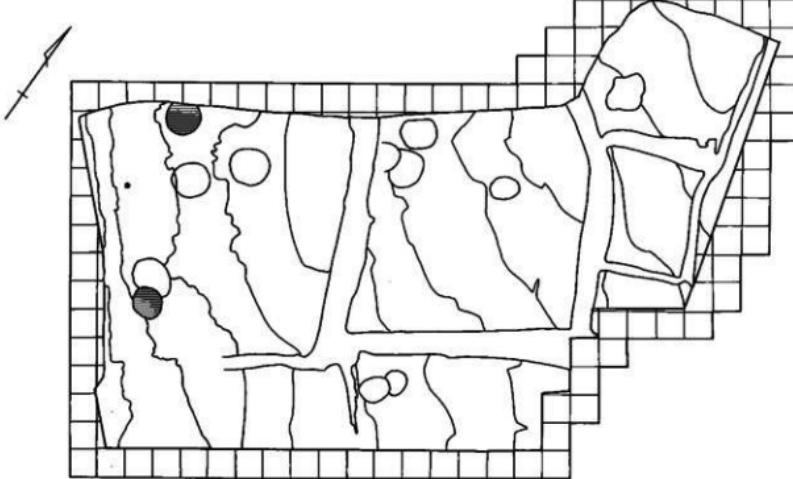
第1節 集落の変遷

本遺跡の住居跡は合計11軒が確認され、それらは主に調査区の南側緩斜面部にまとまって分布している。そのうち時期不明の2軒を除いた9軒の住居跡は縄文時代中期の範囲内に位置付けることができる。またそれに伴って数多くの土坑が調査区全域で確認された。の中には時期を特定できるものも含まれており、集落の構造や広がりなどを考える上で非常に興味深いものである。

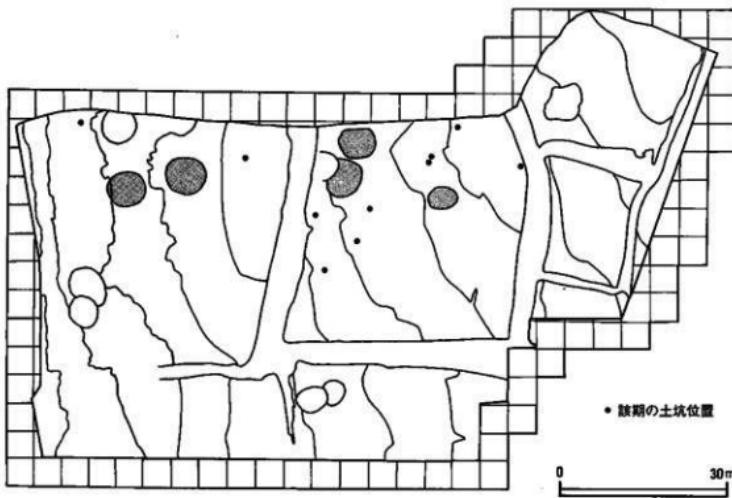
調査の結果現段階では、集落は中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期も後半になって初めて登場するようである。そして盛衰を繰り返しながらも、中期後葉曾利Ⅴ式期をもってそれ以後集落は營まれなくなるらしい。具体的に時期別に住居跡を概観して見ると、まず中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期では第1・4号住居跡が確認された。2軒とも埋甕炉をもっており、それが住居跡の時期を決定する根拠となっている。住居跡は調査区南斜面の縁辺部に位置している。またそれら2軒のほぼ中間では五領ヶ台Ⅱ式期でも最終末から貉沢式期初頭に位置付けることのできる99号土坑が確認された。中期中葉貉沢式期から藤内式期にかけての住居跡ははっきりしたものは確認されていない。だが第2号住居跡内のピット1より口唇部に三角状押圧文の施文された浅鉢や摩耗が著しいがバネル文と思われる文様を持つ深鉢片が出土しており、該期の可能性も否定できない。中期中葉井戸尻式期は第5・6・7・9号住居跡が確認された。調査区南斜面にまとまって立地し、周囲には土坑が点在する。遺構の分布から集落の中心は五領ヶ台Ⅱ式期より若干標高の高い地点におかれようである。遺構の数も増加し、その分布も広範囲になることから中期全般を通して最も集落が盛行した時期であったことが推察される。なお集落は調査区外北側に広がることが予想され、さらに規模が大きかったものと考えられる。ただし、住居跡から出土した遺物はそれほど多くはなく、むしろ土坑から出土した遺物の方がまとまりを持っているようである。中期後葉曾利Ⅰ式期は土坑のみで住居跡は確認されていない。また中期後葉曾利Ⅱ式期には第3号住居跡が調査区南斜面縁辺部でわずかに1軒が認められたのみであるため、集落構造については不明である。中期後葉曾利Ⅲ式期は包含層出土遺物の中にまばらに土器片が認められるが遺構は確認されなかった。中期後葉曾利Ⅳ式期にも土坑が1基確認できたのみである。中期後葉曾利Ⅴ式期は第8号住居跡と土坑3基が認められるなど、それまでよりは若干遺構数が増加している。遺構は広範囲に分布しているがその数は少なく閑散としている。

以上のように集落は中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期には調査区南側で初めて構成されるようになるが、それ以降貉沢式期から新道式期にかけては稀薄である。盆地内においてもこの時期の資料は乏しく本遺構も例外ではない。藤内式期は主に土坑の点在ばかり目立つ。そして集落は中期中葉井戸尻式期に最も活発化する。だが住居跡の掘り込みは全体的に浅く、第9号住居跡の石圓炉を構成する礫は石器等を転用するなどその造りは貧弱であり、また第6・7号住居跡に見られる埋甕炉や第5号住居跡の地床炉には焼土の堆積が浅いなど、短期定住的な様相も見受けられる。そしてこの時期以降、集落は細々と営まれるといった印象を受ける。前述のようなことから本遺構の中期初頭五領ヶ台Ⅱ式期の集落の立地については、この時期の典型的な在り方が看取できる。ただしこの時期以降については集落の規模は広範囲になる。最も遺構密度の濃い中期中葉においてはその集落全域のうち、南側の様相が今回の調査で明らかにされ、同時に集落の南限が確認された。

ただし集落とはいってもこれらの住居跡で出土した遺物が同形式であることから住居跡が同時に存在したと考えるには多少危険が伴うかもしれない。というのは近年に土器編年研究の進展には目覚ましいものがあり、それに伴って集落も細分化されている。そのため従来大集落といわれてきた遺跡においてもその住居群の同時性については疑問が投げかけられているというのが現状でもある。本遺構の住居跡群については先にも述べたとおり、まとまった遺物の出土はあまり見られず、また搅乱等のため層位観察は十分とはいえない。土器編年の細分化という観点から見ても住居跡の同時性には非常に疑問が感じられる。中期中葉井戸尻式期に位置付け

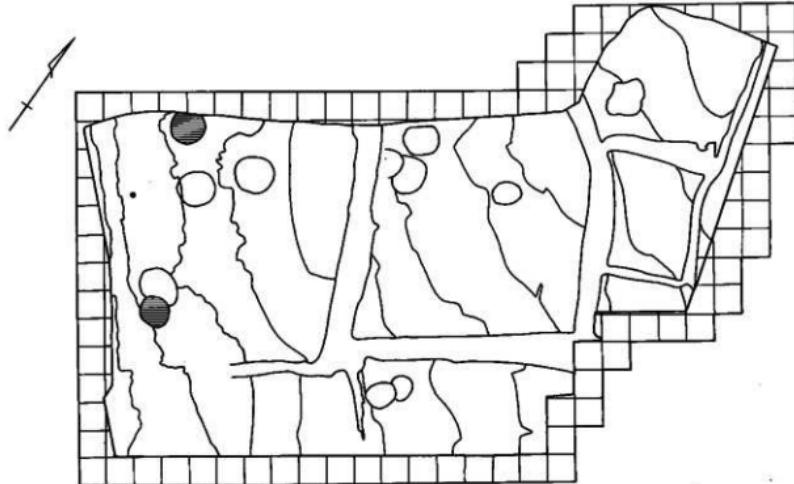


第66図 縄文時代中期初頭遺構分布図



第67図 縄文時代中期中葉遺構分布図

た第6号住居跡より出土した遺物は、井戸尻式期新相から曾利I式期古相の様相を呈しており、中期中葉から後葉への過渡的な位置に営まれたと考えられる。この住居跡が他の井戸尻式期に位置付けた住居跡と同時性を持つかどうかについては、時間軸の設定の問題とも密接な関係を持つ。今後周辺の同時期の集落とも考え合わせて、土器一形式間の時間幅や地域性などについて検討することが課題となるだろう。



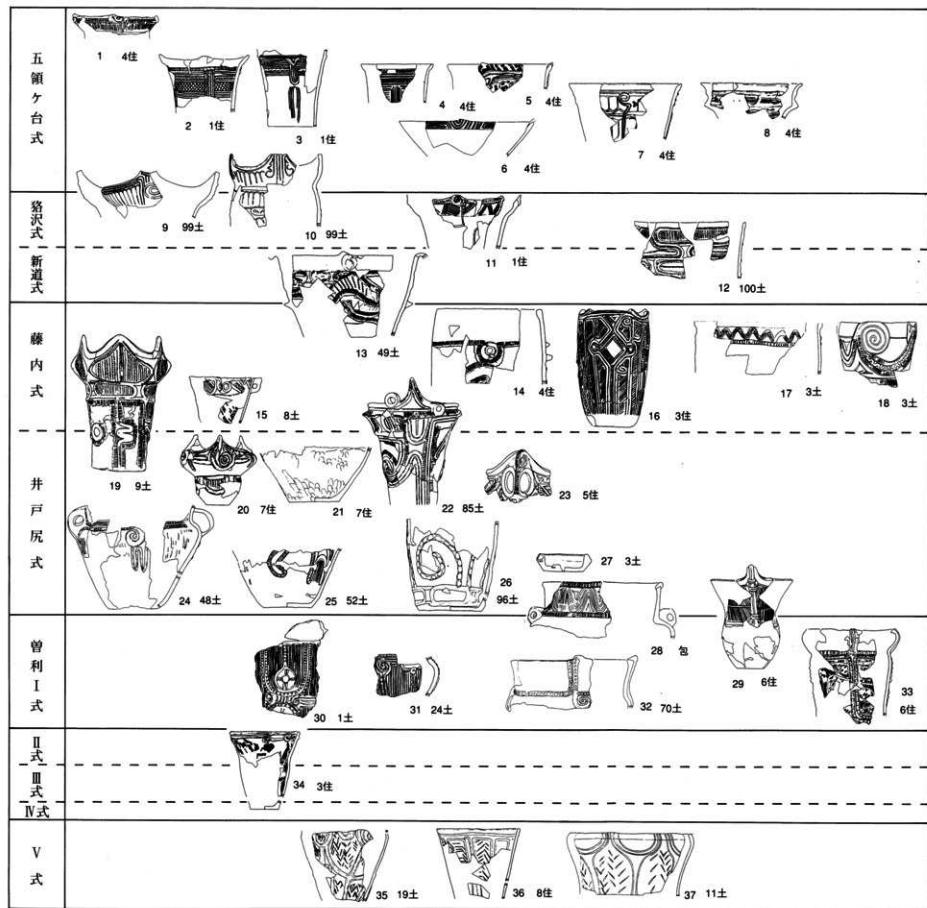
第68図 縄文時代中期後葉前半造構分布図



第69図 縄文時代中期後葉後半造構分布図

参考文献

- 新藤康夫・中西充・藤野修一 他「神谷原Ⅱ」八王子市門田遺跡調査会 1982
- 小野正文ほか「駒込堂Ⅱ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集 山梨県教育委員会 1987
- 今福利恵「勝坂式土器とその社会組織」『季刊考古学』第48号 雄山閣 1994
- 縄文中期集落研究グループ・宇津木台地区考古学研究会「シンポジウム縄文中期集落研究の新地平」 1995



第70図 唐松遺跡出土土器変遷図

第2節 土坑について

第1項 土坑の概要

本遺跡では数多くの土坑が発見された。総数は100基にのぼり、その用途、性格等は様々であることが遺物などの出土状態から推測される。本遺跡は地表面から確認面までの堆積が浅く、後世の耕作のためと思われる地境溝の掘削等擾乱が著しい。また地山と覆土の区別がつきにくく、層位観察には限界があった。そのため本遺跡では発掘調査時に数多くの性格不明のピットが認められた。そのいずれからも遺物の出土はなく、またピット間の関連性についても明確にすることはできなかったため、ここでは既に報告したように遺物の出土のあるもの及び何らかの人為的な行為が加わったと認められたもののみを土坑として扱った。そこでこの項においては集落内における土坑の性格・傾向等について若干触れてみたい。

本遺跡では発掘調査の結果、主に調査区の北側で集落が営まれたことが明らかとなった。さらに集落は北側の調査区外へも広がることが推測されることは既に述べたとおりである。土坑についても例外ではなく、主に北側の住居跡群周辺を中心に、そこから広がるように位置している。それらの土坑のうち、時期を決定できる遺物を含んだものは数少なく、ほとんどは土器等を含まない集石土坑及び遺物の流れ込んだ土坑等であった。時期を決定することができたものも含めて、これらの土坑はその概要から7種類及びその他のものを含めて8種類に分類することが可能である。ただし同種類の土坑がどの時代にも共通の使用方法で用いられたかどうかは不明である。このような事実も考慮した上で土坑の種類について下記の通り分類を行った。

グループ	内 容	該当する土坑番号
① A-1	一括土器が出土したもの	3・9・40・51・52・70・82・85・96・99・100
② A-2	同時期の土器片が多量に出土したもの	1・23・49
③ B-1	集石に土器片が混じっているもの	8・11・16・19・48
④ C-1	人頭大の碟による集石	2・4・75・78・91
⑤ C-2	拳大の碟による小型集石	18・21・37・38・41・43・44・45・69
⑥ C-3	碟が一部に集中しているもの	5・63・74
⑦ D-1	大型土坑	15・25・50・54・66・76・77・95

土坑は以上のように出土遺物の内容や出土状況等から4種類7パターンに分類でき、該当する土坑は合計44基である。次にそれぞれのグループについて個別に観察し、分析を行ってみたい。

Aグループに分類した土坑は土器を含んでいるものであり、ほぼ土坑の時期を断定することができる。Aグループはさらに上記の通り2種類に分類することが可能である。①はほぼ一個体の土器の出土が認められた。11基を確認したが、そのうちいくつかからは人頭大かそれ以上に大きな碟によって潰されるように出土したものや、土坑の縁から落ちて土圧により潰されたような形跡のあるものなどである。②は多量の土器片が出土したが、全体の文様の様子を窺えるような土器は含まれていないものである。

今回調査を行った土坑のうち集石を伴うものが数多く確認されたが、その内容はそれぞれ少しづつ異なっている。③から⑥に分類した2種類4パターンの土坑は、どれも集石に関連するものである。③のBグループに分類した土坑は出土状態はそれほど異なるが、集石に一個体の土器が混入して出土したものである。時期は縄文時代中期中葉藤内式期から井戸尻式期にやや集中しているが、後葉曾利Ⅳ式期にも認めるができる。

Cグループは集石のみが認められた。このうち④は数個の人頭大の碟が中心になって集石が構成されるものである。碟が大きく、それに比例して規模の大きいものが存在する。⑤は④とは対称的に拳大の碟によって構成された集石土坑である。碟は数十個が集中するものから4、5個がまとまっている程度のものまで様々であるが④と相対的に土坑の規模は小さい。④⑤には集石に混じって土器片や石器を若干含むものも見られる。

Dグループは大型のプランを有する土坑で、まとまった土器の出土は見られなかったものの土器片や石器が

多量に出土した。その中でいくつかは炭化物の出土や焼土の堆積が見られるなど人為的な痕跡を認めることができる。

また上記のいずれにも属さないが、利用方法が推測できる土坑もある。28号土坑は掘り込みや焼土の状態などから屋外炉であった可能性が高いことは既に述べたとおりである。83号土坑は掘り込みはそれほど深くないが覆土には多量の炭化物が混入しており、やはり火を用いた痕跡が認められている。出土遺物からそれらはいずれも縄文時代中期中葉のものである。

次に出土遺物などからおおよそ時期が推定できる土坑の時期的分布について触れて見たい。本遺跡の土坑は全て縄文時代中期の範囲とされることができることは既に各項で述べた通りである。本遺跡の土坑で最も早く設備されるのは99号土坑であり、縄文時代中期前葉五領ヶ台II式期である。1号住居と4号住居の中間地点で台地の南縁部に位置している。その後中期中葉猪沢式期から新道式期にかけては菅みが希薄になるらしく、土坑も単独でしか確認できない。49・100号土坑が該当するがそれぞれ性格が異なっており、どのような在り方のものは不明である。中期中葉藤内・井戸尻式期は集落として最も活発化する時期であり、住居に伴つて土坑も多数構築される。これらは遺跡のほぼ全域にわたって出土している。中期後葉曾利式期の土坑は、現在曾利V式期のもののみが確認されている。遺構の数は多いわけではないがやはり調査区全域にわたって分布している。このような様相から土坑においては集落の盛衰に比例して、構築された数量にも時期的な差異を見出すことができるのである。

第2項 集石土坑について

本遺跡では集石土坑が全土坑の約20%を占めるに至った。前述で大別した集石土坑C-1・C-2・C-3がこれに該当する。本項ではこれら集石土坑について発掘調査時などに気付いた点を若干まとめてみたい。

時期的な土坑の分布状況は第1節で示した通りで、これら時期のわかる土坑はそれぞれ住居に付属して分布している。集石土坑は時期を決定する遺物を含むものが数少ないため、その分布のみから考えて行きたい。集石土坑は調査区の中心部及びそれより西側に分布する。とくに縄文時代中期中葉藤内式期・井戸尻式期の住居跡群周辺で最も密度が濃いようである。ここでは主にB-1・C-1・C-3が密集しており、これらにそれぞれどんな使用方法があったのかは現状では把握することはできない。しかし、C-1に分類したものの中には2・78・91号土坑など炭化物が混入しているものがある。これらは食物を蒸し焼きにするなどの、調理に用いられた可能性もある。一方C-2は、小型の集石である。これは拳大の礫が数個、もしくは打斧や磨石、石皿片などを含んでいる場合も多々あり、決まって規模が直径30~50cm弱の小型の土坑より出土する例が多く認められる。これらは主に調査区の中では標高の高い西側でまとめて確認された。周辺には住居跡等を認めることができないため、生活空間とは違った意味合いを持つ空間であったと考えている。ただ時期を決定できないため、いつこのような空間が用いられたのかは類例の増加を待つかないようである。

以上集石土坑については分布等から生活空間とそれ以外の空間があることが推測できたが、集石土坑の性格などを明確にすることはできず、ここでは今後の課題を提示するのみにとどめたい。

参考文献

石岡憲雄・金子真土『日野原遺跡』玉川村日野原遺跡調査会 1982

山本茂樹・野代幸和『日影田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第100集 山梨県教育委員会 1995

第3節 唐松遺跡の土偶について

唐松遺跡の出土遺物の中で、とりわけ注目されるのが土偶である。

唐松遺跡の土偶の数は26点である。最近開催された「土偶シンポジウム4 長野大会 一中部高地をとりまく中期の土偶」の発表資料によれば、この数は現在までのところ、釧遊堂遺跡群の1,116点、宮之上遺跡の79点、坂井遺跡の45点、酒呑場遺跡の37点（現在整理中）に次いで山梨県下で5番目の数である。しかも唐松遺跡の存続した縄文時代中期初頭から後半にかけての各時期の土偶が存在すること、土偶の全身像¹⁾を知りうる事例はないものの身体の各部位が見つかったこと、接合する土偶破片の存在など、釧遊堂遺跡群に見られるような縄文時代中期の土偶のありようを集約した形となっている。以下、唐松遺跡の土偶について若干の考察を加えたいと思う。

唐松遺跡出土の縄文中期の土偶の分類については、釧遊堂遺跡出土の土偶と比較検討することが有効である。小野正文氏による釧遊堂遺跡群出土の土偶に関する分類は、製作技法から分割塊製作法・手こね法・輪積法・塑像法などに分類し、形態的には「猪沢式期から井戸尻式期」（本稿では以下「勝坂式期」と呼ぶ）をAからH、「曾利式期」をAからDに分類している。また施文方法等から時期的な分類もなされている。このような分類方法を唐松遺跡出土の土偶に当てはめて検討すると、形態的には、勝坂式期のA形態の有脚立像土偶に該当するものが多く、B形態の「円錐形中空土偶」（櫛原型）にあたるもののが5である。また前述のA類の系譜を引く曾利式期のA類の有脚立像土偶については、沈線による施文を有するものが存在する。

部位について注目すると、完形で出土したものではなく、各部位の破片で出土している。身体の部位による内訳は、頭部6点、頭部・胸部1点、胸部1点、腕1点、臀部1点、臀部・腹部4点、胸部・脚部1点、脚部11点である。以下、部位別に当該時期の推定を行う。まず、頭部については2がいわゆる「カッパ」形土偶の初期の形態であり、五領ヶ台式に属すると考えられる。小さく顔面の表現が無い。また頭頂部や側面の穿孔も特徴的である。これに続くのが1の「カッパ」形土偶で、顔の表現はあるものの、小さく眼なども点で表現されている。今福利恵氏による勝坂式土偶の頭部の形態分類の1類に当てはまる。これらに対し、5～7の頭部破片は細長くややつり上がった目の表現、髪型の表現など勝坂式期に最もポピュラーな土偶頭部の特徴がみられる。5は先に述べたように「円錐形中空土偶」であるが今福分類に当てはめると3類に当たる。6は髪型から5類、7は平らな顎から3類に当たる。なお、4についても顔面の細かい表現はないものの髪型の特徴や頭部の形から5類であると考えられる。3については時期を特定することはできない。唯一の腕の破片である8については、勝坂式土偶の特徴である水平方向に開いた形態である。また胸部の破片9は文様から猪沢式と考えることができる。腹部・臀部の破片については勝坂式の「出尻」土偶と呼ばれるものであるが、文様から10と14は猪沢式、13は藤内式に当たると考えられる。脚部については大型で写実的な17と18および26は井戸尻式に当たる。また21・22・23の沈線による施文は曾利式期の特徴といえる。

遺構別の出土状態は第71図の通りである。住居址出土の土偶が6点である。4号住居跡からは2・5・14の3点、6号住居跡からは11・20の2点、10号住居跡からは23の1点である。一方、土坑出土の土偶は7点である。49号土坑からは1・12・17・18・19の5点、15号土坑から3、30号土坑から26、50号土坑からは7が1点ずつ出土している。このうち49号土坑の場合、後で述べるように2点の脚は接合するが、時期を異にすると考えられる5や17も含まれている。釧遊堂遺跡群では、越北A地区においては藤内式期のほとんどの住居跡から土偶が出土しており、一方、三口神平地区においては「土器捨て場」からの土偶破片の出土が多いとの報告がある。

次に土偶の接合関係であるが、唐松遺跡では49号土坑から出土した17・18の脚部の破片が接合する。釧遊堂遺跡の場合、1,116点の土偶破片のうち15例（30点）が接合、3例（6点）が同一個体であり、その割合は僅か2.7%にすぎない。縄文中期の土偶がいかに単独の破片で発見されるかがよくわかる。釧遊堂遺跡群の接合例の中には、230mを隔てて発見されたケースをはじめ、異なる場所から出土した破片の接合関係が特徴的で

ある。これを土偶破片の分配が行われたことによるとの見解が提起されている。土偶の接合関係は土偶の使用の過程を推察するきわめて有力な情報といえよう。唐松遺跡の場合も、接合する17・18の破片は、土偶を使った祭祀の過程もしくはその後、49号土坑に両方の脚の部分を廃棄なり収納した縄文人の姿をリアルなものとしてよみがえらせるのである。

最後に土偶の出土地点の分布状況であるが、第71図では唐松遺跡全体でおおまかな時期別に分布の違いが見られる。まず五頭ケ台式期から猪沢式期の土偶破片は遺跡の南西半分の地区、特に第1次調査区に集中しているのが特徴である。これに対して藤内式から井戸尻式期のものと考えられる土偶は遺跡全体に広がりを見せており、そして曾利式期の土偶については遺跡の中央部において出土している。こうした傾向は住居の分布や土坑の集中などと同じ傾向を示しているわけであるが、このような角度からも各時期における集落の広がりの一端を見ることがある。

以上、雑談ではあるが唐松遺跡の土偶について検討を加えてみた。先に述べた土偶シンポジウムの資料を手にして、唐松遺跡の土偶の出土が山梨県内のみならず周辺地域においても有数なものであることを知り、唐松遺跡の特色を再認識した。これまで数多くの発掘調査が行われてきた北巨摩地域に関して見ても、これだけの土偶が出土した遺跡は、著名な坂井遺跡以外ではなく、遺跡の中での土偶のあり方にについて論じられることはなかった。平成6年度から山梨県埋蔵文化財センターで調査を行っている酒呑場遺跡は北巨摩地域では最大級の縄文時代の遺跡であることが明らかになった。この遺跡では整理の過程で縄文シンポジウム資料に報告されている数よりも大きく上回る数の土偶が検出されているようである。酒呑場遺跡の報告書においては縄文中期の土偶に関して更に深まった考察がなされるであろう。このことに期待しながら本稿を結びたい。

1) 発表資料では唐松遺跡の土偶は25点となっているが、9の胸部破片を加えて26点が正しい。

参考文献

土偶とその情報研究会編『土偶シンポジウム4 長野大会 一中部高地をとりまく中期の土偶』

信毎書籍出版センター

柳原功一 1996 「山梨県の中期土偶」「土偶シンポジウム4 長野大会」発表要旨

今福利恵 1996 「中期前半山梨県の様相」「土偶シンポジウム4 長野大会」発表要旨

新津 健 1996 「山梨県の様相」「土偶シンポジウム4 長野大会」発表要旨

小野正文 1996 「ボーズ土偶」「土偶シンポジウム4 長野大会」発表要旨

山梨県埋蔵文化財センター 1986 「駿遊堂I」「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第17集

山梨県埋蔵文化財センター 1987 「駿遊堂II」「山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第22集

小野正文 1985 「所謂円錐形土偶について」「研究紀要」2 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

小野正文 1990 「土偶大量保有の遺跡—縄文中期の場合—」季刊「考古学」第30号 雄山閣出版

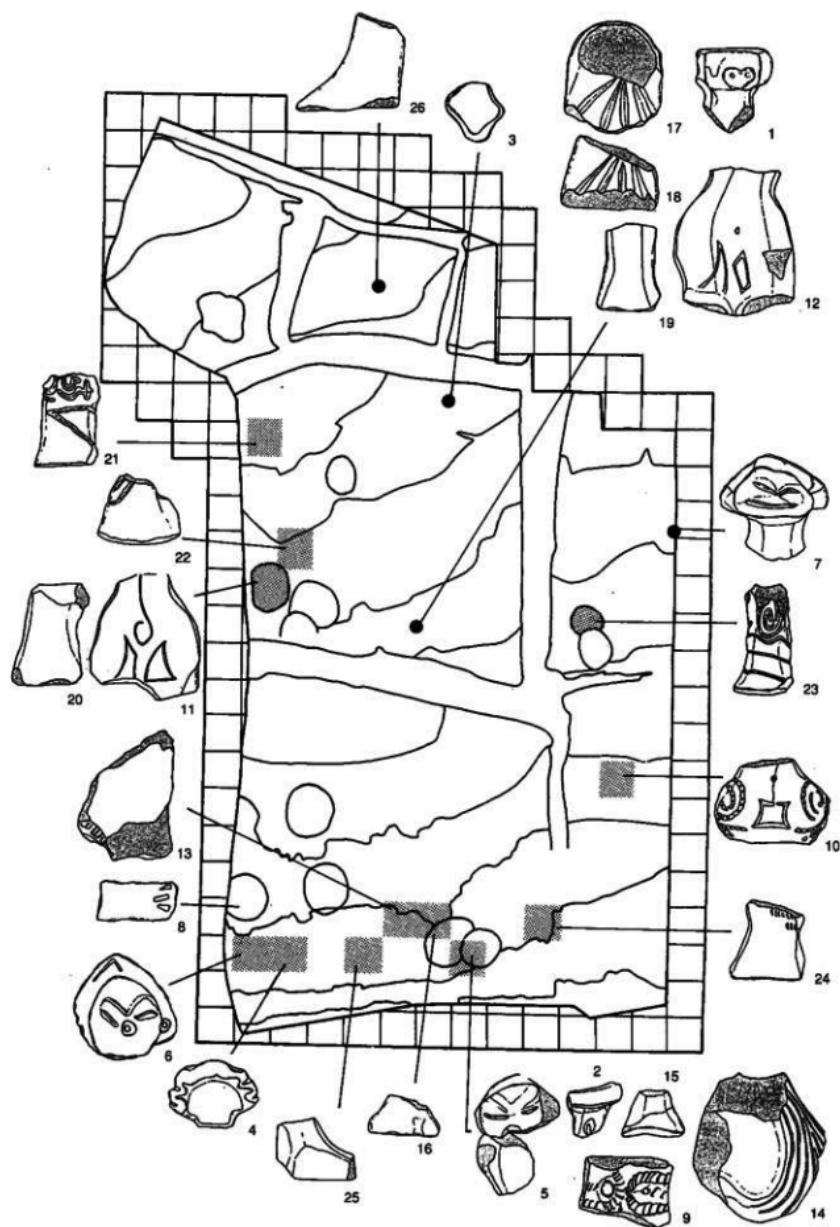
谷口廉浩 1990 「土偶のこわれ方」季刊「考古学」第30号 雄山閣出版

志村滝藏 1970 「坂井」

山梨県埋蔵文化財センター 1993 「宿尻遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第81集

野代幸和・村松佳幸 1996 「山梨県長坂町酒呑場遺跡 一縄文時代前期・中期を主体とする集落遺跡の調査」

『考古学ジャーナル』398



第71図 土偶出土地点分布図

第4節 繩文時代中期初頭から前葉の土器様相について

はじめに

本遺跡における繩文時代にみる人類の初現は、中期初頭段階の五領ヶ台Ⅱ式併行期に始まる。この期を境として、段階的な継続性を維持しながら、前葉の新道式期まで徐々に変化を遂げつつ存在している。該期における出土土器の変遷については、第72図に示したとおりである。遺構について見てみると、住居跡を伴い定住していた状況を垣間見ることができ、他の同時期の遺跡と比較しても本遺跡の状況は規模・内容共にも優れていることがわかる。ここでは唐松遺跡を中心として中期初頭から前葉段階の土器と県内出土の該期の土器（第73図）をとおして、その変遷過程を類推して述べてみたい。ちなみにここで扱った該期の遺物が出土した遺構は、第1号住居跡、第4号住居跡、第99号土坑、第100号土坑である。

土器の変遷

本遺跡における中期初頭から前葉段階の類推変遷（第72図）をここで述べる。ここでは唐松遺跡を中心に取り扱うため、初現期の五領ヶ台Ⅱ併行期をⅠ期、これに続く新道式期までの変遷をⅡ期、Ⅲ…とする。

Ⅰ期 平行沈線文を主要文様として構成し、横位の文様帯区画と斜位・格子目文を胴部に施文する集合（五領ヶ台Ⅱa段階）沈線文系の一群（1）。類例…中道町上の平、長坂町中込

縄文を地文とし、肥厚した口唇部と胴部に横位の《Y》字状の連続文を施した縄文系の一群（2）。

類例…勝沼町駅迎堂、長坂町酒呑場

Ⅱ期 口辺部の連続爪形文、胴部の横位・縦位・格子目の平行文および交互刺突文を施し、4分割する（五領ヶ台Ⅱb段階）垂線の上に粘土を波状に貼付した集合沈線文の一群（3～6）。

類例…高根町旭東久保、大泉村甲ッ原、小淵沢町上平出、長坂町酒呑場、中道町上の平、塩山市安道寺、勝沼町駅迎堂

Ⅲ期 肥厚した口唇部と胴部に施された平行沈線文と交互刺突文、それに4分する垂線が入る。Ⅱ期と（五領ヶ台Ⅱc段階）Ⅲ期の区分は微妙である（7～10、20）。

類例…小淵沢町上平出、長坂町酒呑場、中道町上の平

胴部がキャリバー状に内湾し、口縁部で緩やかに外反する。胴上半部の肩部に交互刺突文などを施した文様帶を伴う東北系の影響が考えられる一群（11）。

類例…大月市宮谷、長坂町酒呑場

10・12は押引き、押圧手法による結節平行沈線が施されている。

Ⅳ期 沈線を主要文様とし、横位の連続《Y》字状文などを施した五領ヶ台式末期と考えられる一群（五領ヶ台Ⅱd段階）（13～19）。18については、新道式期に多く見られるものであるが、他に遺物が存在しないので該期として位置付けたが、胎土を観察するともう少し新しい可能性があるが、可能性の域を越えない。

類例…高根町当町・日影田

Ⅴ期 沈線を主要文様とし、横位の連続《Y》字状文、玉抱き三叉文、弧状文を施したものや、隆線に（猪沢a段階）による玉抱き三叉文などが施された一群（20～23）。Ⅳ期とⅤ期は過渡期であり互いに両型式に影響し合っている。22は交互刺突文を施す最後の一組と考えられ、縦位に連続した円形の刺突文が左右交互に行われている。

類例…高根町当町

Ⅵ期 押引きによる結節平行沈線が密接化して連続した押圧文・押引文に変化し、口辺部に横位の連続（猪沢b段階）する《Y》字状文や《V》字状文などが施される。胴部はクラシック状の懸垂文が施され、大石タイプの影響が見られる（24～32）。25・29では蹄場系統に見られるもので、口縁部に棒状隆線《□》が付けられ、この上を竹管状工具で刻む。

- 類例…高根町当町、大泉村甲ヶ原、長坂町酒呑場、中道町上の平、勝沼町糸迦堂
- VII期 隆起による楕円区画に角押文を、区画内に波状の角押文が施されている（33・34）。34は楕円区（新道期）画内が空白で、角押文が多様化する前と考えられ、やや古手の可能性がある。
- 類例…大泉村寺所・甲ヶ原、長坂町酒呑場、中道町上の平、勝沼町糸迦堂

まとめ

本遺跡においては、中期初頭～前葉段階の遺構を伴っていたため、遺物の量が少ない割に良くまとまりを見せており、その変遷過程を見て取れてとても興味深い。形式的には五領ヶ台Ⅱ式併行期から洛沢式期への転換期が主体を占め、やはり過渡的な様相が段階的に見て取れる。ここに示したものは類推図であるが、このような資料的に希薄な該期を扱う場合、時期差・地域差などを踏まえて考察を加えていく必要性があり、類例が少ない県内において、該期の遺物がこれほど段階的に追うことができる遺跡は顕著な例で、このような現状ではここに示したような類推といった段階で捕らえざるを得ず、今後の課題は山積みしている。土器の施文的な色彩は、中部高地の影響が強いようである。

唐松遺跡における該期の遺構変遷については、1住・4住→99土→100土と考えられ、未調査の周辺部にはまだ多くの遺構が存在するものと想定される。一般に前期末～中期初頭段階においては、ある一定の継続性を持って存在する特徴があることが明らかとなっているが、本遺跡においては若干時期は異なるもののその特徴は生き続けているようである。前期については今回の調査では全く発見できなかったが、前述のような特徴があることから、今後の周辺地域における調査の進展で発見される可能性はある。遺構の分布状況については、該期の特徴として台地の縁辺部の暖傾斜地に占地される傾向が見られるが、この点については本遺跡においてもよくその特徴を示しており、前節で記したように台地の南向き暖傾斜地の縁辺部に遺構がまとまって分布する状況が確認できる。その分布状況は、住居跡と住居跡を挟むようにして土坑および遺物集中箇所（G-3、H-7、I-6グリッド）の存在が認められる。これはその中間付近に土坑などの住居跡以外の遺構の存在によって、居住空間と居住空間とを区別するかのような分布を示しており興味深い。

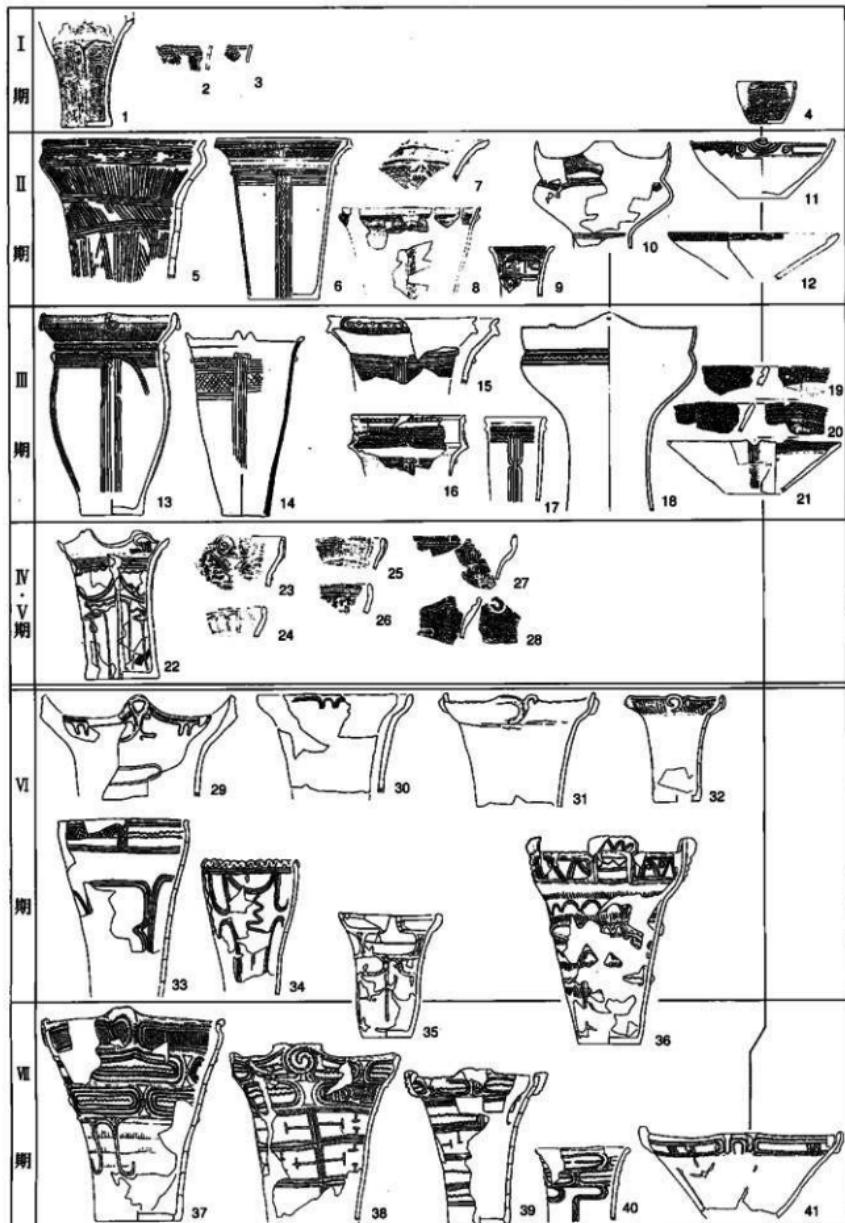
ちなみに第73図については、第72図に示したものを基準にして、数少ないが県内の類例から段階的に同系統のものを集めて変遷させ類推した。ただし第73図に示したものは洛沢式末期に位置し、唐松遺跡の7期は新道式に該当するため対応しないことを付記しておく。

（野代）

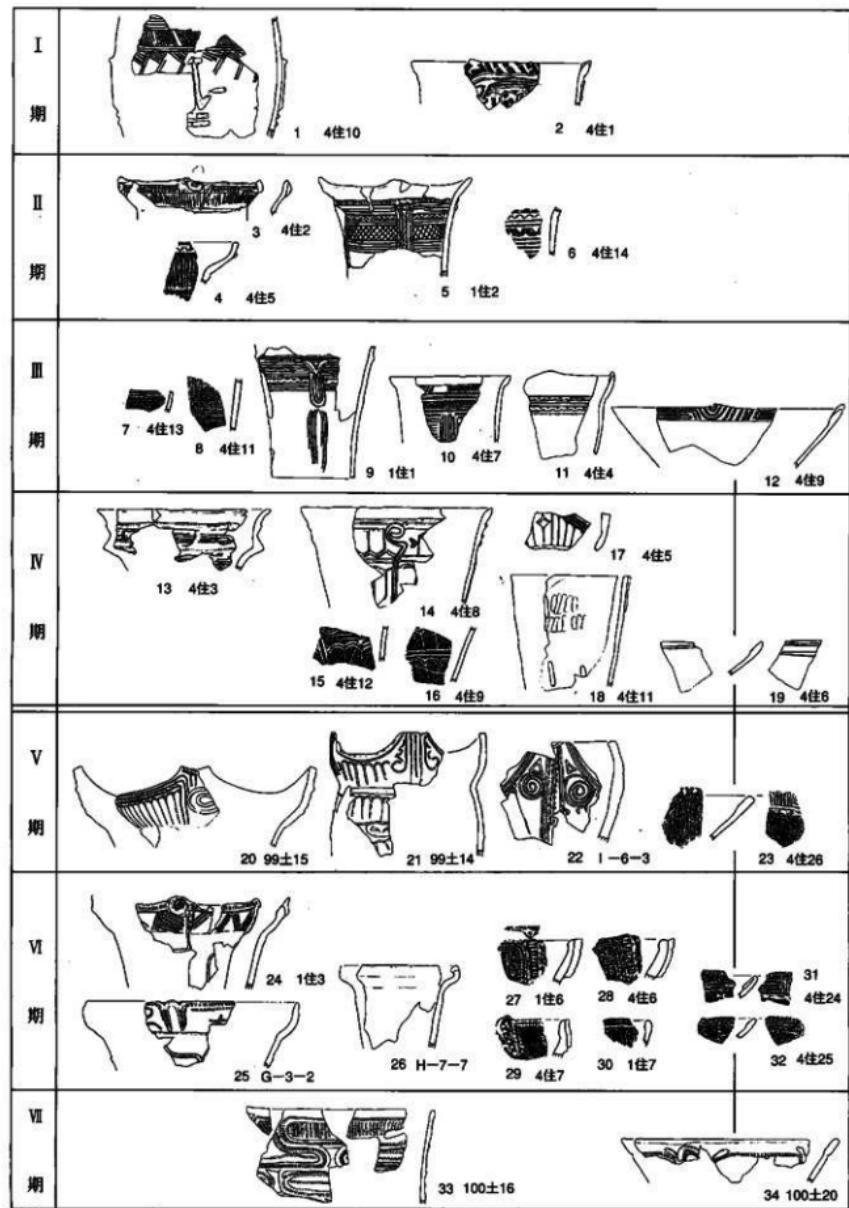
【参考文献】

- 静岡県考古学会『縄文土器の交流とその背景—特にその中期初頭の土器群をとおして—』静岡県考古学会シンポジウム4、1980
- 今村啓爾「五領ヶ台式土器の編年」「東京大学考古学研究室紀要」4、1985
- 寺内隆夫「勝坂式土器成立期に見られる差異の顯在化—隅接型式との関係」阿玉台式土器その1」「下総考古学」9、1987
- 寺内隆夫「五領ヶ台式土器から勝坂式土器へ」「長野県埋蔵文化財センター研究紀要」I、1987
- 三上徹也「梨久保式土器再考」「長野県埋蔵文化財センター研究紀要」I、1987
- 縄文セミナーの会「中期初頭の諸様相」1995
- 黒尾和久・小林謙一・中山真治「多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」「縄文時代中期集落研究の新地平」1995

第72図 「山梨県内における唐松I期～VII期の土器変遷図」の出典遺跡 1・4 中道町上の平 2・3 長坂町中込 5 長坂町健康村 6・12・13・17 小淵沢町上平出 14 中道町下向山 7・15・16・21・29・30・40 大泉村甲ヶ原 9・22 高根町日影田 8・11 須玉町塩川 18 大月市宮谷 10・27・28・31～39・41 勝沼町糸迦堂 19・20 大泉村天神 23～26 高根町当町



第72図 山梨県内における唐松Ⅰ期～Ⅶ期の土器変遷図



第73図 唐松遺跡縄文時代中期初頭～前葉段階土器変遷図

第5節 住居跡出土の石器組成について

今回の調査で1,662点の石器が出土しているが、そのうち153点が住居跡から出土している。住居跡の時期とそこから出土した石器の時期が必ずしも同じとは限らないが、石器の時期決定にはある程度有効であろう。そこで、時期の判別している8軒の住居跡から出土した石器群の様相と変遷を捉えてみたい。

本遺跡で一番古い時期である五領ヶ台式期には、第1号住居跡と第4号住居跡があるが、出土点数をみると第1号住居跡が6点、第4号住居跡が76点とその差に開きがあり、器種についても第4号住居跡の方が数多く出土している。両方に共通している出土石器は石鏃・打製石斧・磨石類の3つである。縄文中期になると打製石斧の割合が高くなるのだが、第4号住居跡でもその割合が半分近くを占め、組成の主体となっているが、周辺の遺跡では、山梨県大泉村小坂遺跡の1号住居跡で石鏃と打製石斧が、同じく2号住居跡では石鏃がそれぞれ主体となっており、遺跡数が少ないので概には言えないが、石器組成の共通性はあまりみられない。

五領ヶ台式期の後の貉沢式～新道式期の住居跡はなく、次に出てくるのは藤内式期であるが、この時期にあたる第2号住居跡から石器は出土していない。次の井戸尻式期の第5・6・7・9号住居跡をみると、第5号住居跡の17点が一番多く、その他は10点以下である。組成をみると、打製石斧の割合が低くなり、それに変わって磨石類あるいは石皿の割合が高くなっている。組成の主体が打製石斧から磨石類・石皿に移り、器種数も少ない。山梨県長坂町柳坪A遺跡4号住居跡、山梨県韮崎市宿尻遺跡8号住居跡においても磨石類の割合が高い。山梨県一宮町・勝沼町駅迎堂遺跡S-I区SB-73・53・32では、多摩丘陵の多摩ニュータウンNo.471遺跡8・18・19・31・40号住居や、武藏野台地の恋ヶ窪遺跡3号住居と同じように、打製石斧が55%～75%を占め、磨石類・石皿の割合は少ない。同じ山梨でも北西側と東側では石器組成の主体に違いがある。

中期後半になり、本遺跡では曾利II式期の第3号住居跡、少し時期が離れて曾利V式期の第8号住居跡が出てくる。曾利II式期ではまた打製石斧が主体となり、曾利V式期では点数が少ないので石皿が主体となる。山梨県長坂町頭無遺跡4号・9号、14号住居・宿尻遺跡4号住居では、曾利II～IV式期において打製石斧の割合はそれほど高くなく、むしろ磨石類が主体となっており、本遺跡と異なる。駅迎堂遺跡S-I区SB-43・S-II区SB-65・56でも、中期中葉と比べ打製石斧の割合が低くなり、逆に磨石類の割合が高くなっている。武藏野台地の恋ヶ窪遺跡は中期中葉の様相をそのまま引き継いでいて、打製石斧が60%～65%と高い割合を占めている。

本遺跡において、住居跡出土の石器組成の変遷をみると五領ヶ台式期では打製石斧が、井戸尻式期では磨石類あるいは石皿が、曾利II式期では打製石斧が、曾利V式期では石皿がそれぞれ主体となる。打製石斧が主体である本遺跡でも、時期により組成の主体は変化している。

他地域と比べると、多摩丘陵、武藏野台地の住居跡では、中期中葉・後葉とともに打製石斧の割合が60～80%と圧倒的に高い。山梨では打製石斧の割合は20～60%でそれほど高くなく、磨石類の方が高いものもある。打製石斧が主体の中部高地・西関東においても、地域によって石器組成に多少の差異がある。

遺構外出土や表採の石器、剥片石器など定型化していない石器や剥片などを除き、住居跡出土石器だけを扱い、取り上げた遺跡数も少ないので問題も多いが、詳細な時期の石器組成を捉えようとするには、住居跡出土の石器が有効であろう。今後、比較的の時期決定しやすい住居跡などの遺構内出土石器から、各時期の石器組成の様相を把握し、その変遷を通じ縄文社会の一侧面を解明していきたい。

[参考文献]

山梨県教育委員会『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内一』(1975)

山梨県教育委員会『駅迎堂Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第12集(1987)

山梨県教育委員会『小坂遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第63集(1991)

山梨県教育委員会『宿尻遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第81集(1993)

東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡平成3年度(第3分冊)』東京都埋蔵文化財センター調査報告第15集(1993)

国分寺市教育委員会『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』(1982)

第4表 住居跡出土石器組成

(上：唐松遺跡、下：その他の遺跡)

	住居名	石錐	石槍	石耙	スク	石錐	磨斧	打斧	粗匙	橢刀	磨石	石皿	台石	多孔	礫器	砾石	石棒	合計	
中期 初期	唐松 1住	1						2			3							6	
	五箇ヶ台 16.7							33.3			50.0								
中期 初期	4住	2				1		5	35	1	6	19	5			1		76	
	五箇ヶ台 2.6					1.3		6.6	46.1	1.3	7.9	25.0	6.6		1.3		1.3		
中期	5住					1		3			6	6	1						17
	井戸尻							5.9	17.6		35.3	35.3	5.9						
中期	7住							1			1	1							3
	井戸尻								33.3		33.3	33.3							
中期	9住				1							1							2
	井戸尻				50.0							50.0							
中期 後期	6住	1						1			4	1							7
	井戸尻一曾利Ⅰ 14.3							14.3			57.1	14.3							
中期 後期	3住	1						12	1	1	6	1							22
	曾利Ⅱ 4.5							54.6	4.5	4.5	27.3	4.5							
中期 後期	8住	1						1			1	2							5
	曾利Ⅴ 20.0							20.0			20.0	40.0							
中期 後期	10住							5			2								7
	不明							71.4			28.6								
中期 後期	11住	1						5			2								8
	不明 12.5							62.5			25.0								
合		7			1	1	1	5	65	2	7	44	17	1		1		1	153
					4.6	0.7	0.7	3.2	42.4	1.3	4.6	28.7	11.1	0.7		0.7		0.7	

	住居名	石錐	石槍	石耙	スク	石錐	磨斧	打斧	粗匙	橢刀	磨石	石皿	台石	多孔	礫器	ビエス	砾石	合計	
中期 初期	小坂 1住	6				3		6			1					1		17	
	山根大森Ⅰ 五箇ヶ台 35.3							17.6	35.3			5.9				5.9			
中期 初期	小坂 2住	7				3		4			1								15
	山根大森Ⅰ 五箇ヶ台 46.7							20.0	26.6			6.7							
中期	柳坪A 4住		1				1	4			5	3							14
	山根長瀬Ⅰ 屋内		7.1				7.1	28.6			35.7	21.4							
中期	宿居 8住							2			3								5
	山根 屋内							40.0			60.0								
中期	武道跡-Ⅲ SB-73	6				4		45			10	2							67
	武道跡-Ⅳ SB-73	9.0				6.0		67.1			14.9	3.0							
中期	武道跡-Ⅴ SB-53	15		5		2	9	212			23	7			6	1		280	
	山根-河原 新道	5.4	1.8			0.7	3.2	75.7			8.2	2.5			21	0.4			
中期	武道跡-Ⅵ SB-32	9	3			12	4	53			8	1			2	5			97
	山根-河原 屋内	9.3	3.1			12.4	4.1	54.6			8.2	1.0			21	5.2			
中期	多摩No.671 18住	2						13			5	2							22
	東京都立市 五-8	9.1						59.1			22.7	9.1							
中期	多摩No.671 19住	10						110			7	4							131
	東京都立市 新道	7.6						84.0			5.3	3.1							
中期	多摩No.671 31住	1						34			5	3	1						44
	東京都立市 勝坂	2.3						77.3			11.3	6.8	2.3						
中期	多摩No.671 40住	3					1	41			8	1	1						55
	東京都立市 勝坂	5.5					1.8	74.6			14.5	1.8	1.8						
中期	志ヶ塚 3住		1				1	93			12	6			1			114	
	東京都立市 勝坂		0.9				0.9	81.5			10.5	5.3			0.9				
中期	頭原 4住		3				2	6			26	2							39
	山根長瀬Ⅱ 曾利Ⅱ		7.7				5.1	15.4			66.7	5.1							
中期	頭原 9住	1		9			1	9			11								31
	山根長瀬Ⅱ-8	3.2		29.0			3.2	29.0			35.5								
中期	頭原 14住	2					1	13			11	1			4				32
	山根長瀬Ⅱ 曾利Ⅱ	6.3					3.1	40.6			34.4	3.1			12.5				
中期	宿居 4住							2			7	1			1				11
	山根-河原 曾利Ⅱ							18.2			63.6	9.1	9.1						
中期	武道跡-Ⅳ SB-65	1				3	1	24			4	1				2			36
	武道跡-Ⅴ 曾利Ⅱ	2.8				8.3	2.8	66.7			11.1	2.8				5.5			
中期	武道跡-Ⅲ SB-43	4	1				1				8	1			1	4			32
	山根-河原 曾利Ⅱ	12.5	3.1	3.1				37.5			25.0	3.1			3.1	12.5			
中期	武道跡-Ⅳ SB-56	4						2	13			16	3						38
	山根-河原 曾利Ⅱ	10.5						5.3	34.2			42.1	7.9						
中期	志ヶ塚 15住	4	1			3	2	133			27	39				4	3		216
	東京都立市 曾利Ⅱ	1.8	0.5			1.4	0.9	61.6			12.5	18.1				1.8	1.4		
中期	志ヶ塚 16住	15	2			7	6	1	241			47	10			4	2		395
	東京都立市 曾利Ⅱ	3.8	0.5			1.8	1.5	0.3	61.0			11.9	17.7			1.0	0.5		
中期	志ヶ塚 17住	2				2	1	1	48			10	9						73
	東京都立市 曾利Ⅱ	2.7				2.7	1.4	1.4	65.8			13.7	12.3						

上段：出土点数

下段：%数値

唐松遺跡の放射性炭素年代測定結果

1. 測定結果

放射性炭素年代測定は、唐松遺跡から採取された2試料について行った。分析用試料は、いづれも炭化材を用いた。以下の表1に測定結果を示す。なお、測定は学習院大学放射性炭素年代測定室の木越邦彦氏にお願いした。

年代は、 $14C$ の半減期5570年（LIBBYの半減期）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yrsBP）として示している。付記した年代誤差は、 β 線の計算値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差（ONESIGMA）に相当する年代である。

なお、年代値の妥当性については産状等が不明なことから、ここでは議論しない。

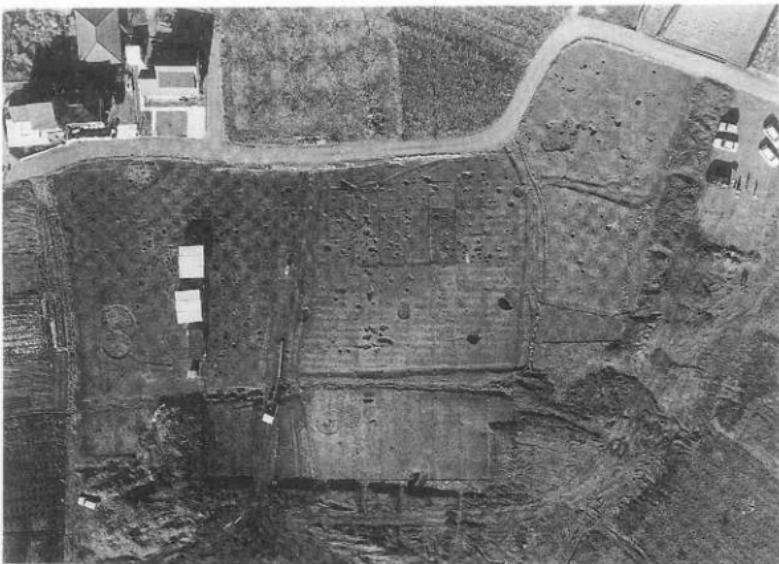
表1 唐松遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料番号	測定試料	コード番号	測定値 (yrsBP)
唐松遺跡炭化材-①	炭化材	GaK-18609	990±90 (A.D.960)
唐松遺跡炭化材-②	炭化材	GaK-18610	1470±70 (A.D.480)

図 版



図版1 遺跡より茅ヶ岳・八ヶ岳を臨む



図版 2 遺跡全景



調査風景

図版 3



図版 4



図版 5 第 1 号住居跡



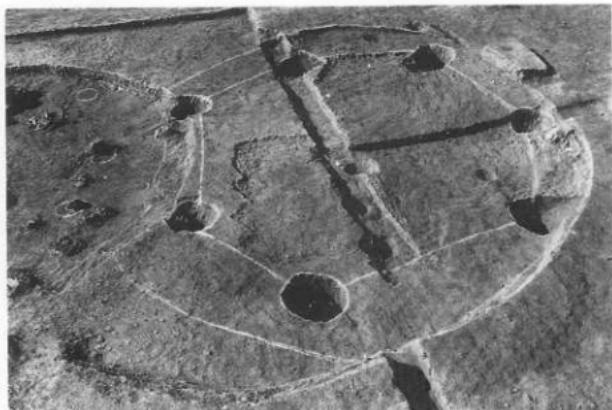
出土遺物



図版 7



図版 8 第 2 号住居跡



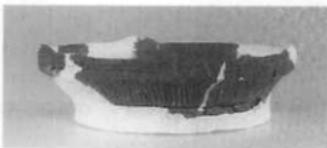
図版9 第3号住居跡



図版10（左）
出土遺物
図版11（右）
遺物出土状況



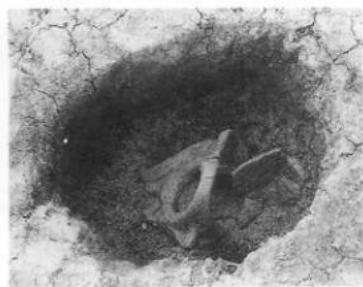
図版12 第4号住居跡



図版13 埋甕炉利用の土器



图版14 第5号住居跡



图版15 遺物出土状況

出土遺物

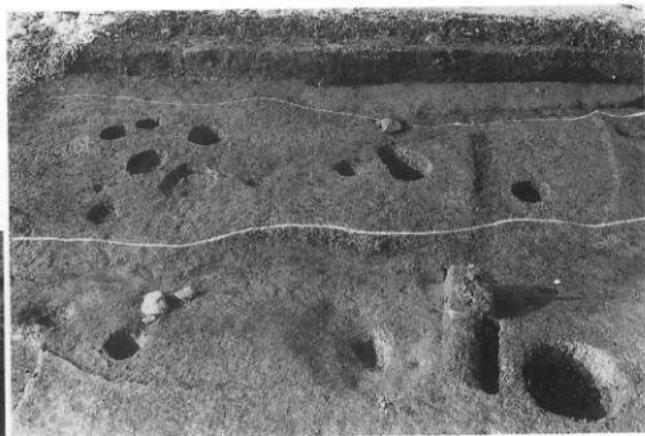


图版16



图版17

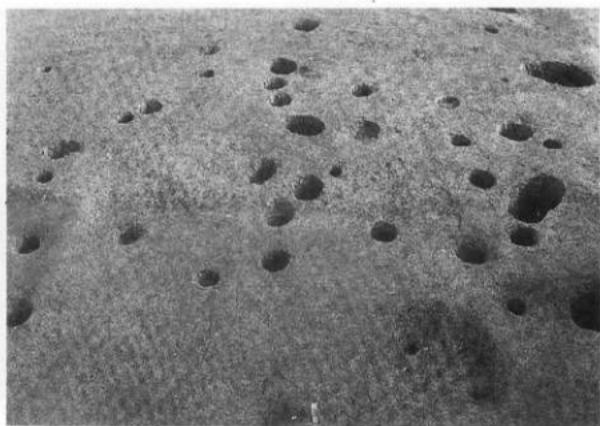
图版18 第6号住居跡



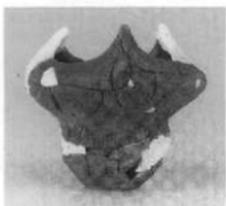
图版19 土偶出土状況



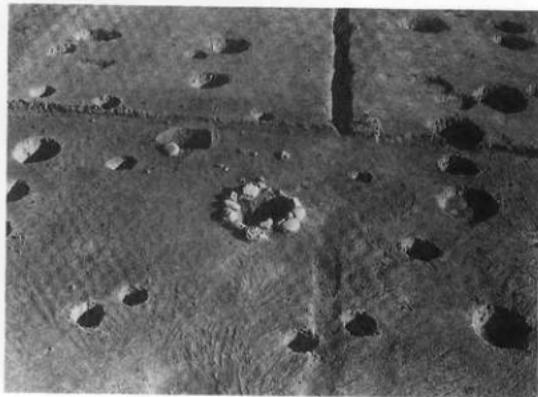
図版21 第7号住居跡



図版20 出土遺物



図版22 第8号住居跡

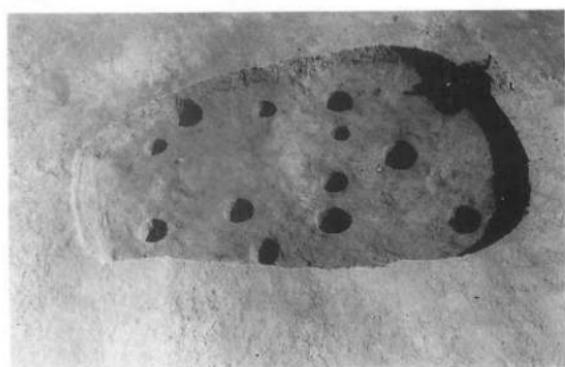


図版23 第9号住居跡



図版24

第10号（奥）・11号（手前）住居跡



図版25 第1号竪穴状遺構



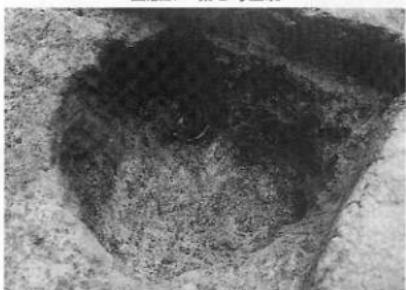
図版26 炭焼窯



图版27 第2号土坑



图版31 第11号土坑



图版28 第3号土坑



图版32 第17号土坑



图版29 第5号土坑



图版33 第25号土坑



图版30 第9号土坑



图版34 第40号土坑



图版35 第50号土坑



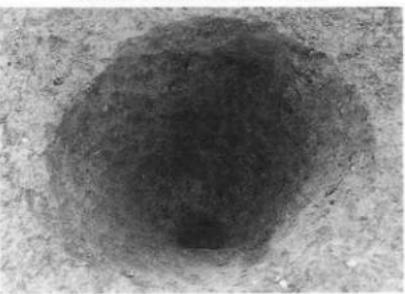
图版38 第52号土坑



图版39 第56号土坑遗物出土状况



图版36 第50号土坑遗物出土状况



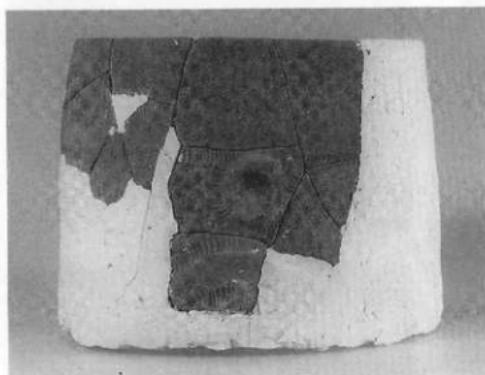
图版40 第56号土坑



图版37 第51号土坑



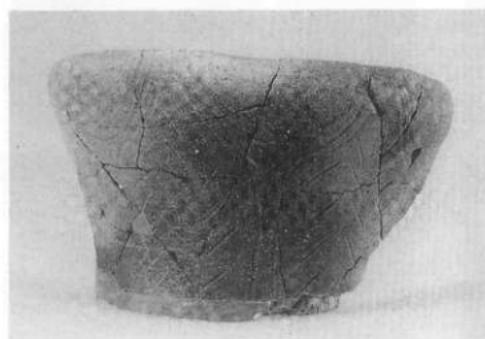
图版41 第85号土坑



图版42 第4号住居跡包含層



图版43 第3号住居跡包含層



图版44 第11号土坑



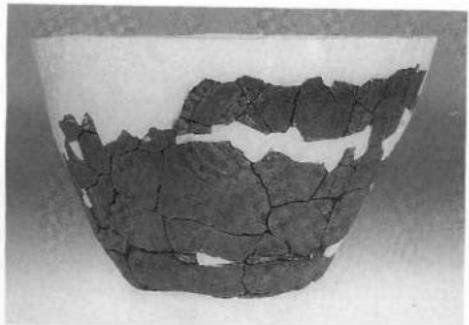
图版46 第9号土坑



图版45 第48号土坑



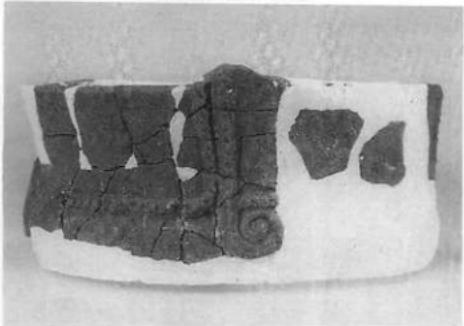
图版47 第8号土坑



图版48 第52号土坑



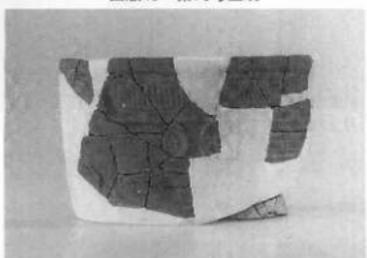
图版52 第85号土坑



图版49 第70号土坑



图版53 第96号土坑



图版50 第100号土坑



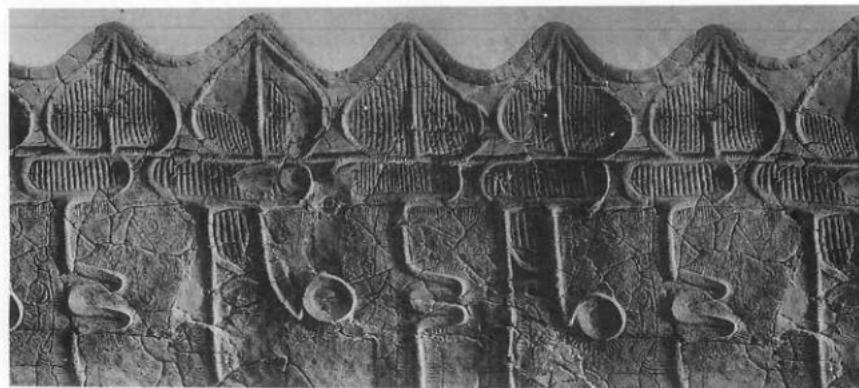
图版54 第99号土坑



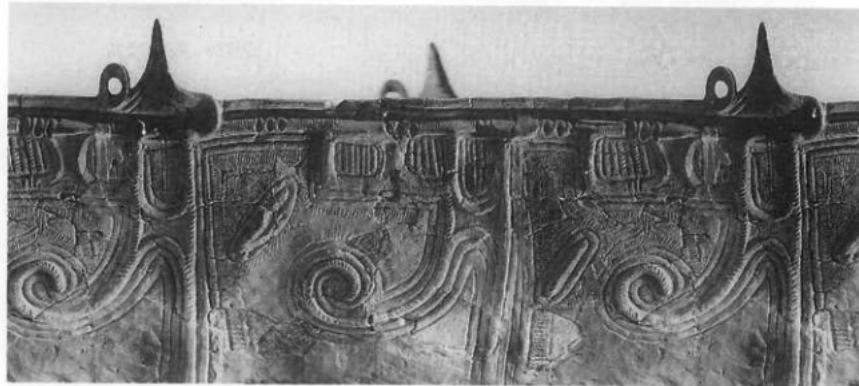
图版51 第99号土坑



图版55 第3号住居跡包含層



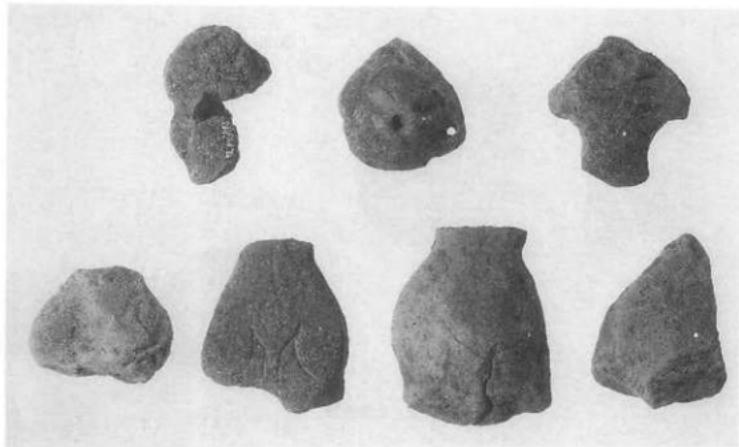
图版56 第9号土坑



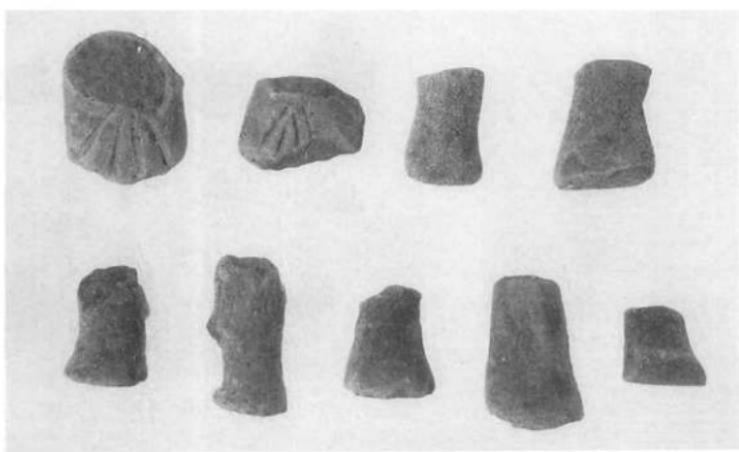
图版57 第85号土坑

土偶

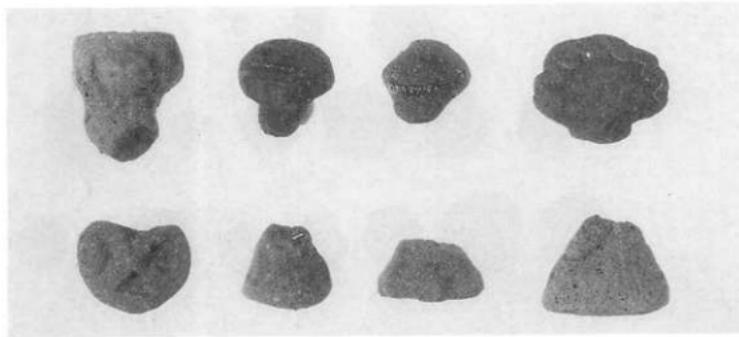
图版58

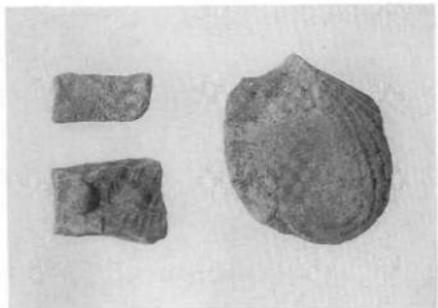


图版59

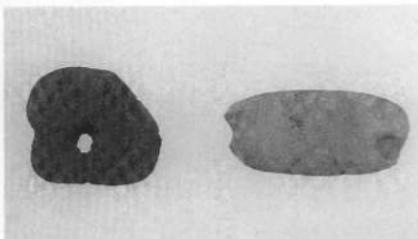


图版60





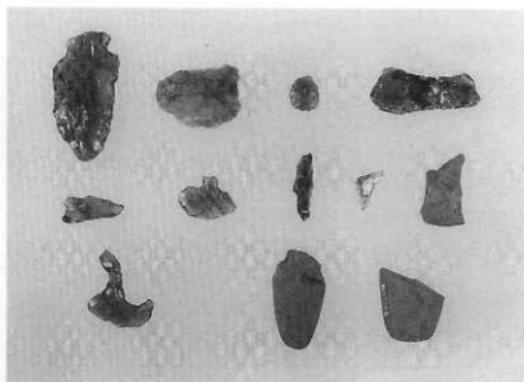
図版61 土偶



図版62 石製垂飾



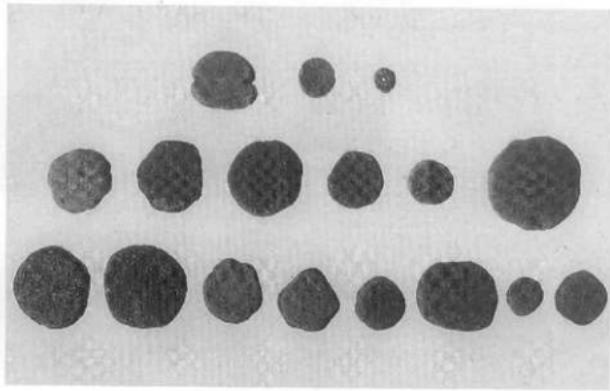
図版63 ナイフ形石器



図版64 石匙・スクレーバー他

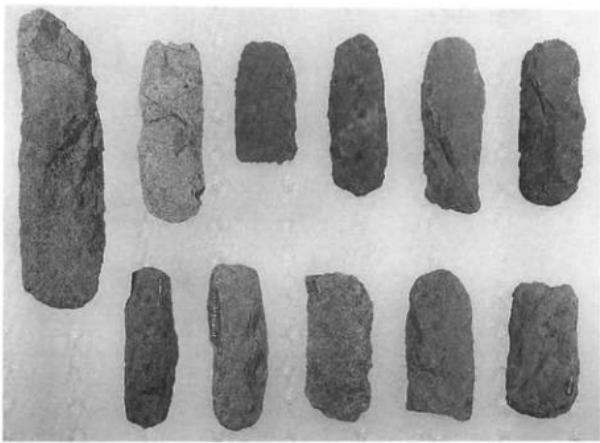
図版65

土製品

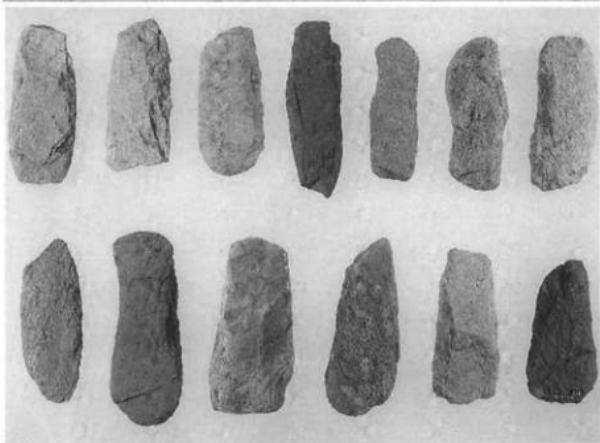


打製石斧

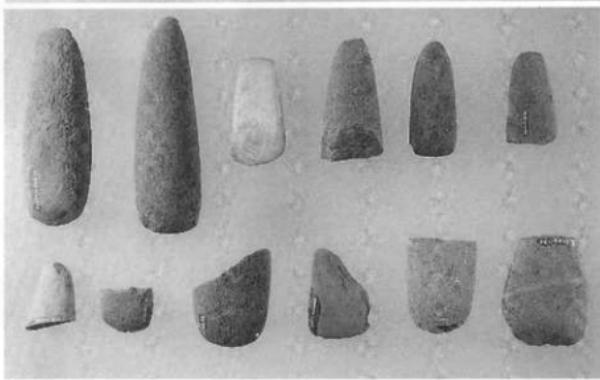
圖版66



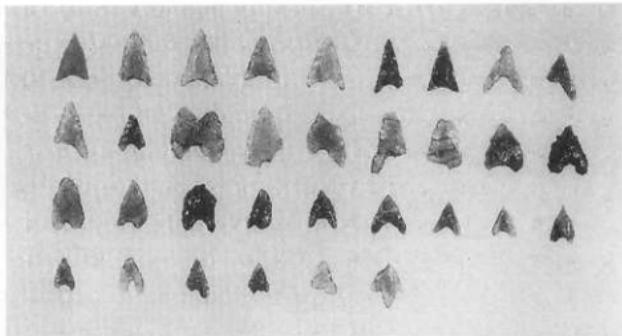
圖版67



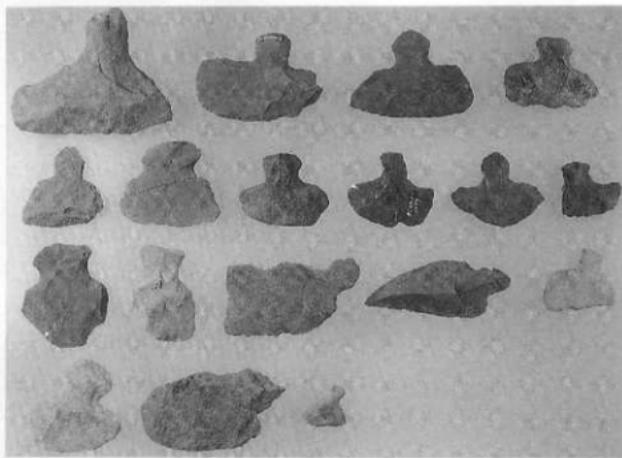
圖版68 磨製石斧



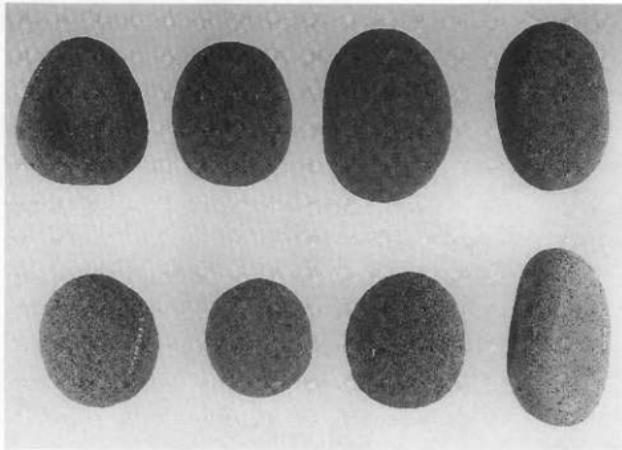
図版69 石鏃



図版70 石匙



図版71 磨石



報告書概要

フリガナ	カラマツイセキ
書名	唐松遺跡
副題	一・双葉唐松団地建設に伴う発掘調査
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第111集
編著者名	五味信吾・石神孝子・野代幸和・村松佳幸
発行者	山梨県教育委員会・山梨県住宅供給公社
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-15 山梨県東八代郡中道町下曾根923 ☎0552-66-3016
印刷所	株式会社 ヨネヤ
印刷日・発行日	1996年3月25日・1996年3月29日
遺跡所在地	山梨県北巨摩郡双葉町宇津谷
1/50000地図名・位置	韋崎東経138° 28' 26" 北緯35° 41' 52" 標高380m
概要	主な時代 繩文時代中期
	主な遺構 住居跡11軒（繩文時代中期 9軒、時期不明 2軒） 土坑 100基（繩文時代中期） 炭焼窯（平安時代）
	主な遺物 土器（繩文時代中期、弥生時代前期末～中期初頭） 石器（繩文時代中期） 炭化材（平安時代）
	特殊遺物 土製品・土偶・耳栓（繩文時代中期） 石製品・垂飾（繩文時代中期）
調査期間	1992年11月4日～1992年12月24日 1993年5月6日～1994年1月9日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第111集

唐松遺跡

一・双葉唐松団地建設に伴う発掘調査

印刷日 1996年3月25日

発行日 1996年3月30日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

山梨県住宅供給公社

印刷 株式会社 ヨネヤ

